

TURN in BRAZIL 2016 ドキュメントブック

日 比 野 克 彦 と
ブ ラ ジ ル で
T U R N し た
3 9 日 間

TURN in BRAZIL 2016 ドキュメントブック

日 比 野 克 彦 と
ブ ラ ジ ル で
T U R N し た
3 9 日 間

004	地球の裏側でTURNしてきた。	日比野克彦	146	TURN in BRAZILカレンダー 6/1-9/9	
				出国前トークシリーズ	
006	TURNした瞬間の「ことば」のリレー				
008	はじめに		158	ブラジルの旅を終えて	
	TURN／TURN in BRAZIL／メンバープロフィール			帰国報告	
			162	不自由の先にある可能性	五十嵐靖晃
				今、豊かさを感じる	瀧口幸恵
				新たな花盛り	タチ・ポロ
				治癒と変化としての芸術	ジュン・ナカオ
014	サンパウロ編		170	2016年秋、旅の途中で考えたこと	日比野克彦
	施設紹介				
	サンパウロでの日々 6/15-8/12				
	日比野克彦／五十嵐靖晃／瀧口幸恵／タチ・ポロ／ジュン・ナカオ				
090	日本国内研修		174	A ATITUDE QUE VIGORA NOS DEDOS	PIPA
	5/15-6/13 宮城県本吉郡南三陸町／5/11-6/8 龍工房／5/9-6/1 つまみ堂			A ESSÊNCIA HUMANA EM CADA UM DE NÓS	Monte Azul
094	サンパウロからの便り			AS HORAS DE CONVÍVIO	Kodomo-no-Sono
	心を交わす体験	高塚由美		O MAIS BELO DO SER HUMANO	Ikoi-no-Sono
	指先に宿る態度	PIPA		O REFLORESCER	Tatiana Polo Tsubouch
	それぞれが固有に持つ、本質的な世界	Monte Azul		A ARTE COMO CURA E MUDANÇA	Jum Nakao
	共に過ごした時間	こどものその			
	人として最も美しいもの	憩の園			
104	リオデジャネイロ編				
106	TURN in BRAZIL ステイトメント／バソ・インペリアル会場図				
108	設営から最終日までのドキュメント 8/11-9/7				
140	会場の声				
142	TURN in RIOカンファレンス		191	あとがき	森司

地球の裏側でTURNしてきた。

日比野克彦

TURN

丸い地球の裏側にいる人に会いに行って来た。

丸い地球が浮かんでいる宇宙を人間は解明したがっている。
いま自分がいるところがどこまで続いているのかを追求したがっている。
そしてその大きな空間がどのように創られたのかを知りたがっている…。
そんな人がいることを私は知っているし、それを想像する気持ちもわかる。

丸い地球の上にいる命がどのようにして生まれてきたのかを人間は解明したがっている。命とは何なのかを探求したがっている。そして今の自分の命はいつまで続くのか、命を創り出すことができるのかを知りたがっている…。そんな人がいることを私は知っているし、その想像する気持ちもわかる。

しかし、どれだけがんばっても絶対に完璧には解明はしきれない。だから私たちには、想像するという放物線的な視点と、わかり得ないものだという微分的思考が必要である。想像するという自由なことは永遠になくなりはいしないけれど、また、想像するという不安定なことが不必要にはならないとも言える。

私という個体は現在地球上(一部宇宙ステーション)に約 70 億人存在する。
世界人口時計によると 7,372,967,476 人(2017 年 2 月 20 日午後 12 時 34 分現在)がいます。
私以外の 7,372,967,475 人(2017 年 2 月 20 日午後 12 時 34 分現在)は、私ではありません。
私ではない人のなかに、家族、友人と呼ばれる人もいますが私ではありません。

私は、私ではない人と宇宙の中に浮かんでいる地球で共に生きています。そのなかには、私を産んだ私以外の人があります(もしくはいました)。その産んだ人を産んだその人以外の人があります(もしくはいました)。それを辿っていくと、ここではない、山の向こうや海の向こうの遠くにも人っているだろうと理解できます。そして空を見上げると雲のその先にある瞬く星にも命はあるのだろうと想像もします…。

星の数は銀河系に 2,000 億個あると言われ、銀河は 1,000 億個以上あると言われています。その一つひとつの星にいるかもしれない命のことをどれだけ想像しても追いつかないことはわかってはいるけれど、私たちは想像することをやめたりはしません。

わかりきりえない大勢の人と一緒に暮らしているこの地球では、わからないから想像することを止めるということをしたら、一つも先には進めず、しぼんでいってしまうでしょう。どちらかというと、人はわからない人と居ることはわりと得意なのかもしれません。生命は、きっと一番最初、どうして産まれたのかもわからないまま、わからないことを引き受けて産まれてきたのだと思います。それから 40 億年間、ズーとわからないことと共に過ごしてきました。
いまでも私は、私以外の私たちのことをどれだけ想像してもわかりきれません。理解しよう捕まえようとしても理解しきれず捕まえきれず、するりと私の腕から逃げていきます。いつまでたっても追いつかないことはわかってはいるけれど、私たちはそれを想像することを止めようとはしません。

この丸い地球の上で、私の隣にたまたま居合わせた私以外の人と、一番遠い地球の裏側にいる私以外の人、どちらも私以外の人だけれども、遠い人も知りたい、わかりたいという気持ちがあるというのが、人間の力、命の力なのでしょう。そしてその私から遠いと思う距離は、想像する力ならでの、「私が私以外の人にシュートしたくなる距離感*」なのでしょう。

わからないけれどわかりたい、知らないけれど、知ってみたい、
そんな「間合い」で日本の地球の裏側のブラジルに行きました。
そこには私ではない私たちがいました。
そして、丸い地球の裏には、そこから見える裏がありました。
地球の丸みは、人の想像する力で膨らんでいます。

放物線的な視点による他者への想像。微分的な思考による他者との関係。

4人から日比野へ TURNした瞬間の「ことば」のリレー

TURN in BRAZILにおいて、監修者である日比野克彦はブラジルのTURNを掬い取る方法を模索していた。

日比野がサンパウロに渡ったのは、各アーティストの交流も終盤の頃。彼らが交流を重ねてきた現場を巡って確信したのは、どのアーティストにも、滞在した日々のなかでTURNした瞬間が随所にあったということ。そのとき感じたことを「ことば」として記録することが、リオデジャネイロの展示における核のひとつになると日比野は考えた。

アーティストたちのことばを集め、日比野がブラジルの言語であるポルトガル語で記す。アーティストがサンパウロで体験したさまざまな瞬間は、バトンのように日比野の手に渡し、一人ひとりの「TURNとは何か?」を問いかける「ことば」として完成した。

8月15日
リオデジャネイロ、パソ・インベリアル

Photo by Tsukasa Mori



TURNは、異なる背景や習慣を持った人々が関わり合い、さまざまな「個」の出会いを生み出す「交流」を主軸にしたアートプロジェクト。一人ひとり異なるすべての人に届く、新たな文化的体験をつくり出すことを目指している。

2015年には、TURNが『東京2020オリンピック・パラリンピック』の文化プログラムを先導する東京都のリーディングプロジェクトとして実施することが決定。当時、TURNは、健常者と障害者が交流し、芸術文化を創造・体験する「障害者アートプログラム」として提案された。

しかし、これからの社会が目指すべきは、障害者／健常者という二通りの人間の交わりではなく、一人ひとりが、異なる“その人らしさ”を持っていることに気づき、尊重し合う、より豊かな関係性の創造である。そこで、TURNの根幹を成す「交流プログラム」は、交流を「一人ひとりと出会い、相手との相互作用が起こる瞬間を探し続けるプロセス」と再定義している。

ここでいう交流とは、アーティストによる表敬訪問や、講師となって療育の一環を担うものではない。アーティストが、福祉施設やフリースクールなどコミュニティ特性が異なる場所へ赴き、その場所を利用する人や支援する人たちと時間を過ごし、交流を重ねることを主眼としている。

各所で展開している交流プログラムに加えて、年に一度、「交流プログラム」が一堂に会す『TURN フェス』を実施してきた。今後は、TURNの試みが日常的に実践される場としての『TURN LAND』をかたちにして、各地で展開していく予定である。

※TURNは、日本財団アール・ブリュット美術館合同企画展2014～2015『TURN／ひとがはじめからもっている力 陸から海へ』(2014～2015年)をきっかけに生まれた。

2016年度は、国内でのプログラムに加え、世界中の注目が集まる『リオデジャネイロ 2016 オリンピック・パラリンピック』に連動するかたちで、ブラジルでのプログラムが実施された。

TURN in BRAZILは、TURN初の海外展開。新たに伝統工芸という要素を取り入れ、日本及びブラジルを拠点に活動するアーティストたちが、サンパウロでの「交流プログラム」を経て、リオデジャネイロで発表した。

日比野克彦監修のもと、現地でTURNするのは、江戸組紐、江戸つまみ、東北切り紙「きりこ」、ブラジルの籠編み「セスタリーア」という、4つの伝統的な手法を携えたアーティストたち。サンパウロの福祉施設にそれぞれ約1ヵ月間通い、施設の利用者、スタッフ、地域住民の日常に触れながら、交流を重ねた。

リオデジャネイロでは、交流のプロセスを通して生まれた作品や経験を、会場となった「バソ・インベリアル」で公開するとともに、さまざまなワークショップやカンファレンスを開催。18日間の会期中にのべ4万人を超える来場者が訪れ、多くの人々を巻き込んだワークショップによって、会場は日々変化していった。

帰国後には、TURN in BRAZILの帰国報告を実施。ブラジルで展開した「交流プログラム」や展覧会の成果を、映像などを通して紹介するとともに、アート、福祉の実践者をゲストに迎え、TURNの来し方、行く末について活発な対話が行われた。

PROJETO ARTISTICO

TURN



TURN in BRAZIL メンバープロフィール

日本からブラジルに赴いたメンバーに、
サンパウロ在住のジュン・ナカオとタチ・ポロが加わり、ブラジルにおけるTURNはスタート。
サンパウロ、リオデジャネイロ両方の土地で、
多くのサポートメンバーに支えられ、プロジェクトは進んだ。

TURN監修

日比野克彦

1958年、岐阜市生まれ。アーティスト、東京藝術大学美術学部長、美術学部先端芸術表現科教授。1984年東京藝術大学大学院修了。1982年日本グラフィック展大賞受賞。2016年、平成27年度芸術選奨文部科学大臣賞（芸術振興部門）受賞。近年は各地でその地域の特性を生かしたアートプロジェクトを展開する。主なアートプロジェクトには、「明後日新聞社文化事業部／明後日朝顔」「海底探索船美術館」「アジア代表日本」等。監修事業には、2012年『ぎふ清流固体・ぎふ清流大会』2014-15年『TURN／ひとがはじめてもっている力陸から海へ』。主な役職として、東京芸術文化評議会評議員、岐阜県美術館館長。



TURNプロジェクトディレクター

森司（アーツカウンシル東京）

1960年愛知県生まれ。公益財団法人東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京事業推進室事業調整課長。東京アートポイント計画の立ち上げから関わり、ディレクターとしてNPO等と協働したアートプロジェクトの企画運営や、人材育成・研究開発事業「Tokyo Art Research Lab」を手がける。「東京都による芸術文化を活用する被災地支援事業（Art Support Tohoku-Tokyo）」、オリンピック・パラリンピックの文化プログラムの展開に向けた東京都の文化事業のディレクターを兼務している。

TURN in BRAZIL 現地コーディネーター

高塚由美

1979年、サンパウロ生まれ、大阪育ち。京都嵯峨芸術大学短期大学部入学後、専攻科、芸術文化研究所へと進学。在学中から作家活動を開始する。2006年に渡伯し、ホスピタルアート活動団体「Projeto Carmim」の活動に参加し、芸術活動を展開する。2008年からポルトガル語の翻訳家、現在では通訳家として活動。2015年にブラジルの出版社Lote 42から自身が文、挿絵をThais Uedaとの共同作業で手がけたモンゴル民話の絵本を出版。

プロジェクトスタッフ

浅野五月、堀江映予、赤澤由起子、畑まりあ（アーツカウンシル東京）

アーティスト

五十嵐靖晃



1978年千葉県生まれ。2005年東京藝術大学大学院修士課程修了。人々との協働を通じて、その土地の暮らしと自然とを美しく接続させ、景色をつくり変えるような表現活動を各地で展開。これまでのプロジェクトで、2005年にヨットで日本からミクロネシアまで約4,000km、2012年に日本海沿岸をたどる約970kmの航海を経験。“海からの視座”を活動の根拠とする。代表的なプロジェクトとして、樟の杜を舞台に千年続くアートプロジェクトを目指す福岡県太宰府天満宮での「くすかき」(2010-)や、漁師らと共に漁網を空に向かって編み上げ土地の風景をつかまえる「そらあみ」(瀬戸内国際芸術祭2013・2016)などを多数地域で行う。熊本県津奈木町では海の上にある廃校を拠点にしたアートプロジェクト「赤崎水曜日郵便局」(2013-2016)の企画運営に携わる。

アーティスト

タチ・ポロ



ブラジル・サンパウロ生まれ。テキスタイルアーティスト、建築家。世界の伝統テキスタイルアートに強い関心を示す。学生時代には絹絵工房で働き、染色技術を身に着けた。1998年からファッションデザイナー、インテリアデザイン専門店などとの協同企画を通じて、デザイン見本市や現代工芸の展示会に参加した。2001年、加賀友禅染めの技術を著名な専門家に教わるために訪日。その経験から絞りや植物染色の技術習得へと発展した。独自の作品には柄、色彩、素材の質感を通して、母国（ブラジル）と先祖（日本とボリビア）の文化の融合を表現する。2010年からは建築デザインの仕事と並行して、絞り、染色、草木染めのワークショップも実施している。

Photo by Rafael Salvador

ワークショップファシリテーター

瀧口幸恵



1990年徳島県生まれ。2013年香川大学法学部法学科社会設計コース卒業。在学中に公益社団法人セカンドハンドの学生部に加入し、カンボジアのフェアトレード商品販売・啓発活動、及びスラム街の学生への奨学金支援を行う(2011年度は学生部代表)。広告代理店勤務後、墨田区を拠点にワークショップや交流イベントを開催。すみだ川もこのコト市ではボランティアコーディネートを担当している。2014年、働いていた東向島珈琲店でアーティストのEAT&ART TARO氏と出会い、以後複数作品のアシスタントを務める(参加プロジェクト：大地の芸術祭越後妻有トリエンナーレ2015「ザキュリ ショー」、食通-Food correspondence-(アートNPOヒミング)、TURNフェス「夕飯コンシェルジュ」ほか)。

Photo by 富樫実和（だしフォト）

アーティスト

ジュン・ナカオ



日系三世のマルチメディアアーティスト、デザイナー、クリエイティブ・ディレクター。2004年のサンパウロ・ファッション・ウィークでのショーは、歴史に残るパフォーマンスとなった。紙で制作された繊細なドレスがモデルたちによってちぎられたシーンは、各国のファッション界からも注目された。2012年ロンドン五輪閉会式では、リオデジャネイロ紹介の演出を担当。2015年には、ハリウッド映画芸術科学アカデミーの依頼により、ソフィア・コッポラ監督作品『マリー・アントワネット』をモチーフにしたインスタレーションを制作した。

Photo by Andre Batista



TURN in BRAZIL in Sao Paulo

サンパウロについて

南アメリカ最大、851.2万km²の国土を持つブラジル。日本の面積の22.5倍にもなる広大な国は、26の州からなる。

国の南東部に位置するサンパウロは、南半球最大の都市で、サンパウロ州の州都。近郊を含む都市圏人口は2,000万人を超え、ブラジルにおける工業・商業・金融の中心部を担う。日系人が多く暮らす都市で、国内に住むおよそ150万人の日系人のうち、約40万人がサンパウロ近郊に住むともいわれる。

日本企業が多数進出しているほか、かつて日本人街と呼ばれた地域があり、日本語の新聞も発行されている。2008年には、

日本人のブラジル移住100周年を記念した行事が多数開催されるなど、日本との関わりは深い。

サンパウロは高原に位置するため、日比野やアーティストらが滞在した冬の気温は、10℃以下になることもあった。生活面では、治安が良好とはいえないため、日本人だけでの外出は制限されていた。このような状況から、現地コーディネーターや施設スタッフによる協力は、制作にとどまらず、食事や移動など日常生活にも及んだ。

アーティストたちの 交流施設



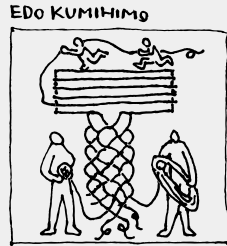
PIPA

ピッパ

PIPAは、5～15歳くらいまでの40人の自閉症の子供と20人の専門スタッフと親の会からなる「自閉症児療育施設」である。専門スタッフの半数は心理学者、そのほか理学療法士や体育指導員などで構成されており、教育者はいない。毎朝、専門家がディスカッションを行い、療育による子供たちの日々の変化や効果についてのふりかえりを行い、その内容がその日の対応に反映される。療育は「病氣」を治療するものではなく、子供の学びがより発展できるように、励ましを与えることを目的としており、投薬治療中心のブラジルでは非常にめずらしい実践と言える。

PIPAが産声をあげたのは、2006年。自閉症児を持つ親が、療育の専門家である三枝たか子の講演を聞いて感銘を受け、奔走の末にサンパウロ市内のお寺で「青空学級」としてスタートした。はじめこそ自閉症児4人という小規模な教室だったが、その後、日伯援護協会（ENKYO）が指導員の給与を負担する形で協力を開始。場所を変え、利用者も増えていった。現在、ブラジル保健省管轄下で国家統一医療システムを通じて療育を無料で行っており、今後はPIPAの実践を全国へ広めようという動きもある。

療育方針としては、体を動かして心のバランスを保つことが基本。朝のランニングにはじまり、音楽や、障害物競走、ホッピングなど、身体を使うプログラムが多数用意されている。また、親との密な連携がPIPAの特徴で、子供との向き合い方を指導し、親子に課題を出すなどして、家族が丸丸となって取り組むことを重視している。



施設名：PIPA (Projeto de Integração Pró-Autista)
住所：R. SOLDADO JOÃO PEREIRA DA SILVA, 273-PARQUE NOVO MUNDO SÃO PAULO-SP／運営母体：サンパウロ日伯援護協会／創設年：2006年／分野：自閉症児支援



五十嵐靖晃



江戸組紐

江戸組紐とは、日本の伝統工芸品で、細い絹糸を使い、一定の組み方により交互に斜めに交差させてつくられた紐を指す。「角打ち紐」と、リボン状に平たい「平打紐」、丸い「丸打紐」の3種類に大別されるが、制作に使う台の種類や、組み方により、できあがる紐のかたちは異なる。江戸時代のはじめに、美しい色彩や模様が考案され、現在は、帯締め用途を中心に、和服の装身具として定着している。「仕込み8割、組み2割」という言葉がある通り、入念な準備が重要とされる。

Monte Azul

モンチアズール

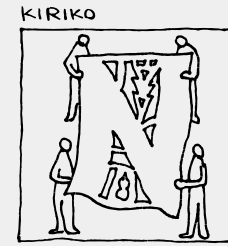
モンチアズールコミュニティ協会は、教育、健康管理、文化、環境プロジェクトを通じて、サンパウロ市の郊外にある社会的弱者や恵まれない地域における貧民コミュニティ(5,000世帯以上)を支援する非営利組織である。

コミュニティの拠点には保育所、幼稚園、アフタースクール塾、青年・成人のための就労プログラム、診療所や有機農園、文化センターなどといった施設が設置されている。

協会のはじまりは、ドイツ人教育者が近隣に住む子供たちを受け入れたことがきっかけだった。1970年に協会が発足し、活動が当初は、シュタイナー学校の生徒たちの手を借り、情操教育学校と診療所をスタート。やがてその支援範囲が広がっていった。障害者の受け入れを始めたのは1998年からである。

施設では、主に3つの属性の活動が展開している。ひとつ目は、瀧口が主に交流した『カミニャンド・ジュントス』という知的障害者の支援グループ。ふたつ目が、『ノッサ・シランダ』という貧困地域の学童保育。さらに、文化的な活動を統括するグループがあり、観劇にくる地域コミュニティの人々も利用していた。

カミニャンド・ジュントスの利用者は80人で、社会的リハビリや職業訓練などの分野における活動が行われている。



団体名：Associação Comunitária Monte Azul
住所：Avenida Tomás de Sousa, 552 Jardim Monte Azul-São Paulo-SP／運営母体：モンチアズールコミュニティ協会／創設年：1979年
分野：知的障害者支援、学童保育、貧困支援



瀧口幸恵



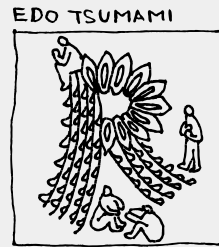
きりこ

東北沿岸部に色濃く残る、供物や縁起物を象った切り紙の呼び名のひとつ。地域の神職がゆく年の感謝と来る年の幸せを願って和紙を刻み、神棚飾りとして氏子に配布する。各神社で代々大切に受け継がれてきた門外不出のものだったが、3地域7つの神社の協力を得てプロジェクトが実現した。

きりこの起源は明らかではないが、300年ほど前から山岳信仰者は切り紙を用い、それらが風に揺れる姿や光によってできる影から目に見えない神の存在を感じていた。その流れを組んでいるとも言われている。

こどものその

『こどものその』は知的障害のある人々が共に暮らし、さまざまな活動に取り組む施設である。敷地内には、目的別の建物が点在していて、建物間の移動に車を利用し、門から本部の玄関まで10分もかかるほど、広大な施設となっている。



施設の歴史は古く、1958年、日伯寺初代総監の長谷川良信が創設に尽力した。当時、周囲の要請を受けて日伯寺学園内に施設の前身である「日伯寺学園治療教育部」を設置し、13人の精神薄弱児と孤児の養護を始めた。その後、土地の寄贈を受け、現在の場所にこどものそのを開園。ブラジルにおける全寮制の障害児施設として、初めての認定を受けた施設になった。開園当初は子供を受け入れ、家庭や社会に復帰する目的で運営されていたが、徐々に入所者、退所者がともに減少。現在ではこどものそで成長した成人72人の、生活の場となっている。こどものそのには、創設者である長谷川良信の「彼らのためではなく、彼らと共に」の理念がいまも息づいており、入所者の活動に反映されている。手芸や陶芸の作品から野菜や有機肥料まで、活動の一環としてつくられるものは、バザーなどで販売。収益が施設の運営の柱を担うなど、入所者が主体となるような運営がなされている。特に年に1度開催される「こどものそのフェスティバル」には1万5000人以上の来場者があり、施設運営費の1～2ヵ月分を賄っている。



団体名: Assoção Pro-Excepcionais Kodomo-no-Sono Association
住所: R. Prof. Hasegawa, 1198, São Paulo-SP / 運営母体: 社会福祉法人 こどものその / 創設年: 1958年 / 分野: 知的障害者支援



タチ・ポロ



江戸つまみ

つまみ細工は、いわば「布の折り紙」。江戸時代から伝わる技法で、薄絹の「羽二重」を正方形に小さく切り、これを摘んで折りたたみ、組み合わせることによって花や鳥の文様をつくる東京都指定の伝統工芸である。つまみ細工の歴史は約200年前、宮中の女官や大名の奥女中が趣味として楽しんでいた和小物の技法がはじまり。江戸時代から京都の舞妓や歌舞伎などの伝統芸能にも使われている。明治時代以降は、花かんざしや花くしなどつまみ細工の技法が応用されはじめ、多様な形態のつまみ細工が登場している。

憩の園

1958年、日本人ブラジル移住50周年を機に、サンパウロ市グアルーリョスにあるサン・フランシスコ修道院から10アルケイレス(252,503m)の土地を寄贈された、社会福祉法人 救済会によって、憩の園は開園した。救済会は、1942年に、サンパウロ日本カトリック教会のもとで活動を開始した団体。創設者は、宮越千葉太、渡辺マルガリーダ、石原桂造、高橋勝の4人だった。会の発足以来、日系人の救済援護事業に尽力してきたが、憩の園ができてからは、福祉事業の経営のほとんどすべてを、憩の園に注ぎ込むようになった。



憩の園は高齢者福祉を専門分野とし、「高齢化に伴ってそれぞれにどんな障害が現れても、各々が認められ、愛され、その可能性を活かして最後までその人らしく生きられるよう、良い環境づくりに専念する」という使命に従って活動している。日本の特別養護老人ホームにあたり、少しの介助で日常生活が可能な人から要介護者まで、さまざまな高齢者が入居。日系一世44人、二世26人の計70人の日系人が在園している。

広大な庭には、木々や花が生い茂り、池にアヒルが泳ぐ。庭の一角には、日本語を記された石碑が経っているほか、園内のあちこちで、日本語や日本にまつわるものを多く目にする。



施設名: Jardim de Repouso São Francisco Ikoï-no-Sono
住所: Rua Jardim de Repouso São Francisco 881-Pq Maria Helena 07261-000-Guarulhos-SP / 運営母体: 社会福祉法人 救済会 / 創設年: 1958年 / 分野: 高齢者介護



ジュン・ナカオ



セスタリーア

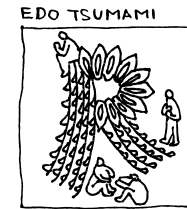
ブラジルの先住民の生活に欠かせなかった籠全般のことをいい、植物の皮や繊維を編み込んでつくられる。貨物輸送や食料などの入れ物として使用されるが、時には狩猟や釣りの道具としても用いられてきた。先住民のアイデンティティでもあり、アート作品として語られることもあるが、特に定義はなく、現在は、生活のなかでさまざまに使われている。

6/15

こどものその



こどものそので活動し始めて2日目。タチが到着する前から、すでに作業部屋の前で待っている生徒たちがいた。何人かはピンセットを使って生地を折ることができ、できない人は指で折った。

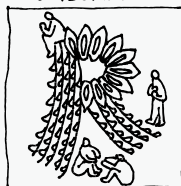


作業しながら話をして、お互いを知り合った。
そして、ときどき彼らは私に悲しい過去を話してくれる。
同じ花をつくりながらも、それぞれが欠けているものを
花は満たしてくれているのかもしれない。
私たちは思い出を共有した。

Enquanto produzíamos conversâmos. Conhecemos um ao outro.
Houve momentos em que eles compartilharam comigo tristes
lembranças.

Forjamos flores idênticas, mas talvez aquilo que cada um sentia
falta foi preenchido pelas rosas. Nós compartilhamos lembranças.

EDO TSUMAMI



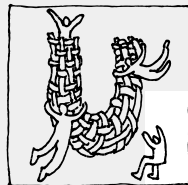
パウロがセラミックの作業場の片隅で座って泣いていた。友人は優しく彼を抱きしめて慰めていた。私はどうして泣いているのかと尋ねた。パウロは言った「お母さんに会いたい」。

Paulo estava **sentado**, **chorando**
à beira da oficina de cerâmica.
Um amigo o consolava com um
forte abraço. **Eu** perguntei por
que chorava e ele **diz**:
“**tenho saudade** **de mãe**”

Paulo was sitting near the place for making ceramic. He was crying as a friend was trying to kindly comfort him with a hug. I said “Why are you crying” and he answered “I miss my mother”

6/21 9:30- サンパウロ自宅

CESTARIA



この2週間、1日置きに施設に通い、ようやく顔を覚えてもらった。

今回のプロセスは、まったく新しい経験である。もともと木の皮を使ったワークショップを考えていたが、入所者たちは高齢で指先の力がなく、肉体的に限界があるため、過去の話を書くことから始めている。

彼らの話は、幼年時代に日本で暮らしたことか、いまの日常についてであり、開拓時代に苦労した話はすっぱり抜け落ちている。彼らは、家族に捨てられた悩みを隠そうとしていて、施設はまるで姥捨て山のように感じる。しかも、施設はとても寒く、暖房がない。

このような苦労をした人と関わったのは初めての経験だ。話を聞くにつれ、彼らの言葉が自分に同化して、痛みが自分のなかに入ってくる。精神的にも肉体的にもとても打撃を受けた。

この体験を、かたちにしようと考えている。痛みや苦労を重ねてつくり上げる何か。苦労話がひとつの籠になる。1本1本の木の皮が、一人ひとりの人生を表すようなもの。

今回の経験で、自分の弱さを痛感している。何か精神的なアドバイスをもらえないだろうか？

東京 21:30- 3331 Arts Chiyoda

施設に通い始めたが、制作の展開に悩むジュンは、日比野とアートカウンシル東京のメンバー（事務局）とスカイプで面談をし、直接アドバイスを求めた。ここで日比野から発せられたことばに触発され、ジュンは具体的にものをつくることへ向かっていった。

「作品」をつくらなければならないわけではなく、まずは施設での時間を大切にしたい。

人間の力は想像力である。
何歳であろうと、自分の行為によってものがつくられるのは喜びである。違う時間に飛ぶこともできる。
一緒にものをつくってみてはどうだろうか？

Não é necessário fazer uma “obra de arte”. O meu desejo é que as pessoas aproveitem ao máximo o tempo que passarem na instituição.

A força do ser humano é a imaginação.
Qualquer que seja a idade da pessoa, a alegria de produzir algo com as suas próprias mãos é igual. Através desta atividade as pessoas podem realizar até uma viagem no tempo.
Que tal produzirmos juntos?

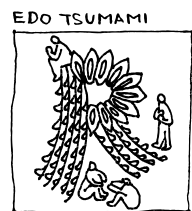
6/22

こどものその



私も、彼が楽しそうにしている様子を見るのが好きだった。
このような情景が、すでに私の日常の一部となっていた。

Eu também gostava de vê-lo fazer as coisas alegremente.
Este tipo de cenário já fazia parte do meu cotidiano.



毎日、運転手が駅まで私を迎えに来ると、支援員のマリア、生徒のクワバラ、デヴィッド、あるいはルイスを迎えに行くために男子棟へと向かった。門を通り過ぎるとすぐに寄宿生(寮生)の日常が目に入ってくる。

ある者は床を掃き、またある者は歩行器を使って散歩をしている。ある寄宿生はあまり衣類を身にまとうのが好きではなく、寒い日にも関わらず彼は下着のパンツと上着とスニーカーのみを身につけていた。そんな彼は幸せそうに見えた。

「Pi」というニックネームの子もいた。彼は車が停車するとすぐに近づいてきてブザーを「ピーーツ」と押す。運転手のロベルトさんは彼を止めたりせずに楽しんでいるようだった。私も、彼が楽しそうにしている様子を見るのが好きだった。このような情景が、すでに私の日常の一部となっていた。



6/23

こどものその

寒く晴れた日。生徒たちと作業を開始して2週間後、女子棟で建物の修復作業が行われるため、男子棟で作業をしなければいけなくなり、つまみの材料を抱えて、満員の車で男子棟へと向かった。

男子棟に着くと、女の子たちも男の子たちもお互いに挨拶を交わした。早朝にほうきで葉っぱを掃いているマリオさんというお年寄りの男性がいて、ときどき、「お名前は？」と日本語でわたしに尋ねてきた。彼は相手の目をすごく間近で見るのが好きで、その動作に始めの頃は少し戸惑ってしまった。私たちが生きているうちに創り上げてしまった想像の壁を飛び越えてくるような感じ。たぶん彼らには、この壁は存在しないのだろう。

作業をしながらおしゃべりをしている間、参加していなかった男の子たちは周りをうろついていた。彼らの手の平につまみを置くと、目をやってすぐに机の上に置いた。ほかのものの探索のほうに興味があったようだ。

みんなが昼食のために食堂へ移動したあと、家のまわりを少し歩いてみることにして、近くの小農園に行ってみた。聞くとところによると、利用者たちはこの場所がとても好きだったが、市の新たな法律に対応するためかなにかで使用停止にしなければいけなかったそう。小農園では静寂が大きな空虚を覆いつくして、それは寮生のなかにとときどき宿る静寂にも似ていた。それは、彼らだけの独特な世界。ときどき風の音が聞こえる。私の知らないあの場所の記憶とともに、静寂が私を飲みこんでしまいそうだった。

散歩を終え食堂に行くと、そこには大勢の人がいた。施設のほぼ全員が集まっていた。昼食中、リラックスした気分の人は私のと

ころに近寄ってきたりして、これらの時間はさまざまなストーリーを知ることのできる時間でもあった。毎日一緒に昼食やおやつを食べていた多くの人たちにとって、私はいつの間にか彼らの日常の一部となっていた。

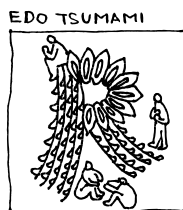
午後、JICAから派遣されて日本からやってきた栄養士のサチコが、「お茶を飲みにおいで、私の家はすぐあそこよ」と誘ってくれた。作業部屋に行くまでの道にあるいくつかの家のうちの一軒が彼女の家だ。

お茶をしながら20分ほど経って、サチコの家へ行くことを誰にも伝えていなかったので少し不安になり、急いでその場を後にした。外に出るとすぐに誰かが叫んでいるのが聞こえた。「タチアナ！ タチ！」陶芸の生徒のアイルトンが私を見るなり心臓に手を当てて、大きな声で叫んだ「見つけた！ よかった！」と日本語で言って、「やれ、やれ」と心臓に手を当てた。何人かで私を探していたようだ。小農園の静寂が私を飲みこんでしまったかのように、いつの間にか彼らからはぐれてしまっていたのだ。

アイルトンは、私を抱擁して言った。「誰かが君を連れて行ってしまったのかと思った」。電話を手にして心配そうにしているコーディネーターのセリーナも見つけた。私は謝って、何をしていたのかを説明し、一緒に笑った。

作業部屋で女の子たちを見つけると、彼女たちは私を見たとき、目に涙を浮かべていた。私たちはつまみの花々のなかで抱擁し合った。

何日か経つと、誰もがわたしの行方不明事件について知っていて、「もうはぐれたらだめだよ」と笑いながら言われたりした。



彼は相手の目をすごく間近で見るのが好きで、その動作に始めの頃は少し戸惑ってしまった。私たちが生きているうちに創り上げてしまった想像の壁を飛び越えてくるような感じ。たぶん彼らには、この壁は存在しないのだろう。

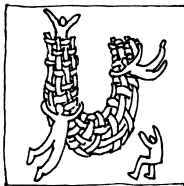
Quando ficamos frente a frente, ele se aproximou e olhou nos meus olhos. No início eu me senti um pouco confuso com esta atitude. Senti como se ele estivesse a transpor a minha barreira da imaginação, que fui criando ao longo dos anos. Dentro dele, talvez este tipo de barreira não exista.

7/1 憩の園



スカイプの面談から10日後。作品制作にとりかかったジュンから日比野と事務局宛にメールが届く。そこにはジュンの施設の人々への想いと作品のコンセプトが綴られていた。

CESTARIA



ジュン・ナカオ

件名：コンセプト

宛先：日比野克彦

日比野さんへ

コンセプトが固まったのでお知らせします。高齢者、遠い国からやってきて孤児になった外国人の人生は、自己否定や自己犠牲で苦しんでいます。同情を買うような話をしながらないし、威厳を保とうとしている。インタビューでは、彼らは子供の頃や現在の話はするが、その間の長い人生がすっぱり抜け落ちています。

彼らの話から感じた様々な価値観に、コンセプトを与えます。威厳、名誉、そして何より彼らと憩の園についての美しい物語の誠実さを守りたい。

憩の園に暮らす一人ひとりを、愛情と尊敬と感謝を持って抱きしめ、そのかたちを大きな花瓶にしようと思うのです。

素材

伝統的なセスタリーアの素材は、野生の植物のつるでとても硬く、籠編みに使うためには、水分を与える必要があります。さらに壊れやすい。これらの特徴は、高齢者が使う素材としては適していないだろうと考えました。

そこで、金網を使ってかたちをつくり、テープと編み合わせることにしました。テープを使うことで、高齢者が参加できるようになるでしょう。

抱きしめることでかたちづくられた金網の構造体に、高齢者たちが柔らかい繊維を使って、アーティストと一緒に編む。編む時間のコミュニケーションで、彼らのぽっかり空いた穴を埋めるのです。

過程

私自身を彼らの生命の連続と捉えて、私の歴史の一部であることを感謝します。日本によってではなく、私は彼らによって日本人となる。愛情、尊敬、感謝を込めた抱擁を与えます。

第一段階として、彼らを金網でそっと包み、ゆっくりと抱きしめます。この癒しの過程で、体全体を包み込み、抱きしめるたびに感謝と愛情を伝えて時間の旅をする。多くの高齢者が、抱きしめることによって子供に戻ることに気づいたのです。この抱擁によって、私は彼らに与えるより多くのものを受け取っている。

第二段階として、彼らが人を型どった金網にテープを編んでいきます。みんな抱きしめられることで、興奮し、元気になった。素材として選んだテープも彼らに喜ばれ、編む作業の間、彼らの目は輝いていた。編むことによって、私たちは融合し、人生の花瓶を共にかたちづくりま

Tokuko e Rosinha foram
costurando com
muito afinho, no formato que
queriam.

With great enthusiasm Tokuko and Rosinha weaved in the way
they wanted.



徳子さんとロシーニャは、根気強く、自分のか
たちを編んでいった。

De vez em quando
a → judavam os outros.

Sometime they would help the others.



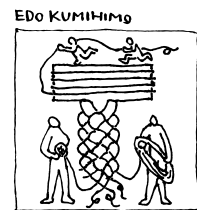
ときどきほかの人たちの編み作業も手伝ってくれた。

7/4 PIPA



Photo by Yasuaki Igarashi

PIPAの1日はランニングから始まる。8時半からの30分は、走ることで精神を安定させる時間。準備ができた子供たちから順に、近くの広場へ集まってきて、左回りでぐるぐると広場を巡回する。五十嵐はこのランニングに、毎日参加した。



走ったり、糸を巻いたりしながら「共に過ごす」「共にいる」という時間の中で、互いに何かを交換しあっていた。人と人の間に見えない流れの交わりがあったように感じた。

Enrolando os fios passamos tempo juntos. Por estar juntos acontece uma troca. Senti que, entre as pessoas, existe algo que não se pode enxergar, uma correnteza carregada de vínculos.



Photo by Yasuaki Igarashi

7/5 Monte Azul



「ルイスの浮き沈みの激しい1時間」

As emoções de Luiz ao longo de uma hora.

「レアンドロの体に流れている変拍子」

O ritmo, sempre em mudança que flui pelo corpo de Leandro.

「タチアナが取っている独特の距離感」

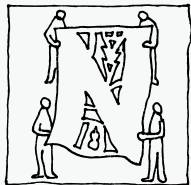
A forma peculiar com que Tatiana não se aproxima, não se abre.

施設の利用者たちと初対面。おでこをくっつけて歓迎してくれたり、目は合わせないし近づくと逃げるけれどもずっといてくれたりと、反応はさまざまだ。
「彼らに会えて、すごくほっとした。知らない言葉の世界で置き去りにされていく不安が、彼らとの時間の中では不要だった。自然に自分の居場所が見つかる。すごく居心地がよい(瀬口)」。

Andar na mesma velocidade, **comer**
no mesmo passo, **pegar algo** da
mesma maneira. Com estes pequenos
gestos sinto que **Somos muito**
próximos. Compreender o tempo do
outro torna tudo mais fácil.

To walk in the same speed, eat at the same pace and grasp something
in the same way. This small gestures make me feel we are very close.
To understand the time of the other makes everything easier.

KIRIKO



同じスピードで歩く、同じテンポで食べる、
同じように握り返す。
それだけでずいぶん近くに感じる。
相手のテンポがわかると楽になる。

Sofrer é acreditar que **algo é**
imutável, se houver momentos
difíceis, também, há tempos **de**
felicidade. Existe **raiva**, **mas**,
por outro lado, **há o carinho** **que**
vem do fundo do coração.

To believe that something is immutable is to suffer. If there are
difficult times there are also happy ones. Rage can be present but
also tenderness comes from the bottom of the heart.

KIRIKO



一定であること、常に変わらないことが求め
られるのが苦しい。
辛いときもあれば、楽しいときもある。
腹が立つときもあれば、心の底から愛しいと
きもある。



誰にでも好きな作業、得意な作業があって、
それぞれがうまく収まっていったときに、走っているような流れが生まれる。
糸巻きをしている間も、隣の人を見たり会話をしたりはしない。
ただ、確実に糸でつながった穏やかな雰囲気がある。

Todos possuímos atividades que gostamos ou somos bons nelas. Quando cada um se encaixa com sucesso, nasce um fluxo muito rápido. Quando tecemos os fios, ficamos tão concentrados que não falamos com os outros nem prestamos atenção ao vizinho. O certo é que penetramos num ambiente de tranquilidade em que os fios nos ligam uns aos outros.

自閉症の子供は、回転するものが好きだ。スタッフミーティングにて、「糸巻き」を授業に取り入れられないかプレゼン。毎朝恒例のランニングの後、さっそく糸巻きの授業が取り入れられる。

5～15才まで、それぞれの年齢ごとに1クラス4名程度が協働し、^{かせ}総糸を糸玉にする作業を、役割を交代しながらやってみる。グーにした両手に糸をかけ、糸をかけた両手をじっと動かさない人、玉をつくっていく人。そのふたりの間には、糸に触れて、隣に受け渡していく人を配置した。

最初は、それぞれの役割がちぐはぐで、噛み合わない。けど、いろいろと試すうちに、ちょうどいい「人と作業の組み合わせ」ができて上がる。普段集中するのが苦手な子が集中して取り組んでいたようで、先生たちも盛り上がって非常に良い雰囲気になった。

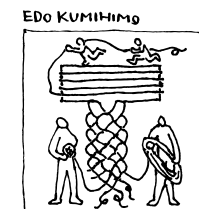
誰にでも好きな作業、得意な作業があって、それぞれがうまく収まっていったときに、走っているような流れが生まれる。糸巻きをしている間も、隣の人を見たり会話をしたりはしない。ただ、確実に糸でつながった穏やかな雰囲気がある。

それぞれが持っているリズムや波長を合わせるのに、糸は向いている素材なのかもしれない。糸だけでは自立できない存在だからこそ、関係性を結びやすい。触れているだけで参加したことになる。

玉になった瞬間、巻き切った人が、嬉しそうに僕のところに持ってきて、「はい」と渡して終わるとき、なんともいえない幸福感があった。

ただ、すべての糸にみんなが触れた跡があると思うと、恐ろしくもある。膨大な時間と想いが込められているのだから。

気持ちや時間が込められているものは、世のなかにたくさんある。でも、受け取る側がちゃんと向き合わないと、その想いは拾い上げることができない。

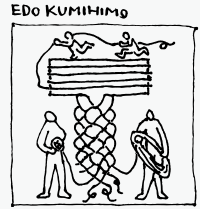


気持ちや時間が
込められているものは、
世のなかにたくさんある。
でも、受け取る側が
ちゃんと向き合わないと、
その想いは
拾い上げることができない。

Há muitas coisas ou objetos no mundo nos quais podemos sentir a emoção e o tempo. Mas para conseguirmos perceber estes sentimentos é preciso encarmos esta coisa ou objeto da forma correta e com muita atenção.

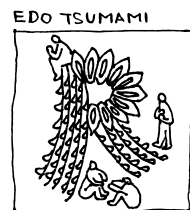
Voltar-se para cada um e construir
uma relação.
Isso faz com que dos poucos
eles mostrem seus talentos.

By turning yourself to each one and building a relationship
makes them show little by little, their inner talents.



一人ひとりに向き合い、関係性を築いていく
と、一人ひとは少しずつ自分らしさという才
能を表に出すようになる。

7/7 こどものその



こどものそのでの滞在もあと1日。3週間のうちにつくったつまみを、晴天の下に並べた。みんなに見てもらえるように、花を芝生まで運んだ。タチを含め、それぞれが目を見合わせながら花を手にとって、一人ひとりに、大きな声で一言ずつ話そうと呼びかけた。「喜び、愛、子供…なんでもいいから(タチ)」。手をつないで、エネルギーが流れていく。



7/7 憩の園



日に日に、ほかのお年寄りたちの興味は高まっていった。お年寄りたちは、作品の進展を見守るために、編み込み作業が行われている庭を歩き回る。園では、TURNプロジェクトとセスタリーアの話でもちきりになった。

制作活動の交流と互いの感情の交換によって、
入所者たちは積極的になり日常の空気が変わっていった。

Essas atividades trouxeram a cooperação e uma troca de sentimentos. Os internos ficaram mais animados e o clima nunca mais foi o mesmo.

人生を籠のように編んでいく。
編みながら互いに近づき、やがて通じ合う。
人生のなかにある空洞を振り返る。

Vai se tecendo a vida como uma gaiola. Ao costurar ficamos próximos, nos entendemos. O vazio que existe dentro da vida é transformado.



Ao preencher o vazio
surgiu um movimento no
espaço onde antes nada
existia.

In the nothingness of space a new
movement appeared once the
emptiness was filled.

空洞を埋めていくと、空っぽの空間のなかに
動きがでてきた。



A lacuna do vazio estava tecida
pelas fitas numa alternância de
em cima e embaixo, curvas e
retas. Erros e acertos. Um
simulacro das nossas próprias
vidas.

The gap of the void was woven by
ribbons in a alternance of ups and
downs, curves and straight lines,
mistakes and successes, a simulacrum
of our own lives.

空白の溝はリボンテープによって編まれていく。
上下に、左右に、曲がったり、まっすぐになったり、間違いや
成功を繰り返して、それが交差しながら、それはまるで私た
ちの人生のようだ。



7/8 Monte Azul



Photo by Sachie Takiguchi

モンチアズールのコーディネーター・ネネッチと、TURN in BRAZIL 現地コーディネーターの高塚さんも同席して打ち合わせ。数日前、はじめてネネッチにプロジェクトについて話したとき、「すてきだけど、障害者のことをわかっていないわね。刃物を使う、型どおりにつくるなんて無理」と言われてしまい、距離が

できていた。信頼関係がない状態では、「障害者だけでなく、モンチアズールに集うほかの人たちとも一緒にやりたい」という想いも、ネガティブに捉えられてしまう。障害者だけでは無理だから、ほかに頼らざるをえないのだと解釈されてしまっていた。



Photo by Sachie Takiguchi



この風景をそのままリオに持っていきたい。

Gostaria de levar esta mesma paisagem ao Rio.

すると、ネネッチの目の色が変わるのがわかった。「キボン！」といって、何度も何度もうなづく。日本語で言えば、「すてき」「いいね」「すごい」の最上級のような表現だ。昨日までできない理由を並べていたネネッチが、すぐさま学童保育の責任者に電話をかけて、呼んでくれた。

結局、その場で週1回、学童保育の子供たちが障害者の制作現場に混ざる機会を持つことが決定。この日から、ネネッチはプロジェクトの一番の理解者になった。彼女と私の関係性も、一気に変わった。

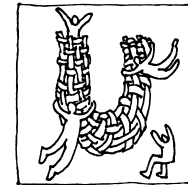
Photo by Sachie Takiguchi



7/8 憩の園



CESTARIA



嬉しい驚きが私を待ち受けていた。お年寄りたちが、いまは作品の編み込みに参加しがっている！

はじめの参加者はたった2人だったので、屋内庭園スペースが作業場所だった。それがいまや、希望者すべてを受け入れるために、施設の集会室へと場所を移すことになった。

活気ある雰囲気なかで、お年寄りたちは互いに助け合いながら作品をつくり上げていき、交流が治癒を促していった。大きな幸せが私たちみんなを包み込み、園全体に広がっていった。愛情、励まし、克服、尊厳の気持ちが施設の集会室とみんなの心を満たしていった。

この日が私たちの共同生活の情緒の織り込み細工「Affect Weaving」において最も印象的な日であった。

Houve aqueles que sempre
consturavam, outros que ensinavam
O ato de costurar se torna um
local para compartilhar a vida

There were those that would always sew,
and others that would teach
The act of sewing become the
sharing of life.



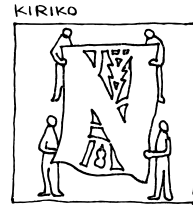
編みを一日中やっている人もいた、ほかの人に教える人もいた。
一緒に編んでいく行為が、今日の人生を共有することになる。

7/14 Monte Azul

14日 この日も午前と午後の2回、きりこのワークショップを行う。作業に入る前に、きりこに関するスライドや映像を見もらうことにしたが、午前のクラスで計画不足を痛感。質問を投げかけたいが、何も言葉が出てこない。そうだ、私はまだポルトガル語が全然しゃべれなかった。様子を見ている先生たちの視線も、「一体何がしたいの」と言っているようだ。一方、利用者たちは動画を喜んでいて、モチベーションが上がったよう。スムーズに切り出し作業に入っていた。

午後の準備をしていると、ナターリャが話しかけてくれた。ナターリャはモンチアズールで、最初にきりこのプロジェクトをおもしろそうといってくれた先生だ。彼女のアドバイスに従って、映像やスライドを構成し直してみると、いい感じに仕上がった。ワークショップ中も先生たちが私の意図を汲んで協力してくれて、午前中以上にいい時間になった。

授業が終わると、ナターリャは「私は幸恵が好きよ。きりこのプロジェクトもすごくいいと思っている。がんばろうね」というようなことを言った。ストレートな表現だから聞き取れた部分もあったが、このときはまだ何を言われたのかよくわかっていなかった。ただ、ナターリャの言葉が頭のなかをぐるぐるまわっていた。



15日 朝から体調が悪い。だけど、元気がなくなったら取り柄がなくなってしまう。コミュニケーションをとる方法がないから、同じテーブルでごはんを食べるしかない。この日の昼食も、よそわれるがままにたくさん食べた。すると、さらに体調は悪化し、トイレにこもった。

ひとりになるといろいろな思いが頭を駆け巡る。そのなかには、昨日ナターリャに言われた言葉もあった。本当は受け取っていたのに、見ないふりをしていた好意。自分の慣習に当てはめて、ゆがんだ見方をしていたもの。モンチアズールに来てから起こっていることが、急に理解できるようになっていた。

目の前のことをやるしかないのだから、心配ごとはおいておいて全部信じよう。そう決めて水を買いに走り、1Lの水を一気飲みしたら、体がすっとして、自分でもびっくりするくらい元気になっていた。

この日からだ、徐々にまわりとの関係性の変化に気づき始め、施設の先生たちとの距離が縮まったのは。ポルトガル語もどんどんわかるようになっていった。

Photo by Sachie Takiguchi



本当は受け取っていたのに、
見ないふりをしていた好意。
自分の慣習に当てはめて、
ゆがんだ見方をしていたもの。
モンチアズールに来てから起こっていることが、
急に理解できるようになっていた。
目の前のことをやるしかないのだから、
心配ごとはおいておいて全部信じよう。

A simpatia e a amabilidade que recebia, mas que fazia de conta que não percebia. Via e sentia as coisas de forma distorcida tentando encaixar nos meus costumes e moldes. Ao chegar em Monte Azul, de repente comecei a perceber tudo que estava acontecendo. Vamos confiar em tudo deixando as preocupações de lado porque o necessário é fazer o que está na nossa frente.

7/15



自分が自然体でいると、無意識に他人を受け入れていると同時に、他人からも受け入れられている。人の価値を測る基準を明確にしようとかだわっているうちは、自然体という身体を得ることはできない。

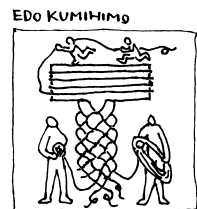
Quando se está com o coração
aberto, podemos aceitar o outro
inconscientemente. E, ao mesmo
tempo, ser aceito. Tentar encontrar
algo palpável, para definir o valor
das pessoas, torna impossível ter um
coração aberto.

To have an open heart at the same
time unconscious accept the other
it is also being accepted. To be bound to the act of ~~feel~~ finding
finding a way to see value in people is to not be able to open
your heart.

7/15 PIPA



五十嵐の発案で、組紐を染めるために用意した藍染めの液を使い、エプロンを染めるワークショップを行った。子供たちそれぞれが、自分用のエプロンを自ら染めた。



黒い宇宙のような藍の染液に共に手を入れ、彼らは何を見て、何を感じていたのだろう。
一人ひとりが異なる空色に染まっていった。
青は、ブラジルでは自閉症の色。

Era com um líquido índigo, profundo como a escuridão do universo que manejavamos. O que será que eles viram, o que será que sentiram? Cada um tingiu seu próprio azul celeste. O azul é a cor do autismo.

7/18 PIPA

Photo by Yasuaki Igarashi



EDO KUMIHIMO



「走ってつながっている」と思っていたが、それはこちらの勝手な思い込みだったのかもしれない。

“Ligados ou entrelaçados correndo” é o que pensava, mas agora percebo que era apenas uma precipitação minha.



Photo by Yasuaki Igarashi



7/19

18日 今日から8月2日までPIPAは冬休みのため、子供たちはいない。そのため、卒業生にあたるヒロシとケント、施設長のヒカルドと4人で作品制作を引き続き行うことになった。ヒロシとケントは現在、PIPAのすぐ近くにある病院の職員として働いており、ヒカルドの計らいで2週間一緒に制作するというのが彼らの仕事になった。

毎朝のランニングも、当然一緒に走る。3人だけで走る広場は広く感じた。今日は走りながら、2人の距離感や雰囲気を感じていた。ヒロシはときどき立ち止まったり動いたりする。少し落ち着きがない。そして、歩いていると、街路樹や花、手すりなどを手で軽く触れる。触感を楽しんでいるのか、そうやって世界を認識しているのか、挨拶をしているのか、とにかく軽く触る癖がある。ケントは逆に物静かで、安定感抜群といった印象。走るのも仕事も黙々とやる。一定のリズムを刻むように高音で「ファツ、ファツ、ファツ、ファツ」と小さな音を発する癖がある。呼吸のリズムなのか、鼓動のリズムなのか、空気に音をぶつけて世界を認識しているのか。

他者を理解しようとするのではなく、どう向き合うか。

Não é tentar compreender o outro, mas sim a forma de o olhar.

19日 朝の気温は5℃。サンパウロに来て一番寒い気がする。今朝のランニングではケントは昨日と同じような感じだったが、ヒロシは何度も立ち止まった。何でだろう？ 何か調子が悪いのだろうか？ 声をかけても、横を通り過ぎても、反応はない。

PIPAに来てから「走ってつながっている」と思っていたが、それはこちらの勝手な思い込みだったのかもしれない。

僕は、同じことをすることで、同じ時間と空間のなかに入り込もうとしていたように思う。毎日一緒に走っていると、「今日は、こういうノリになっていくんだな」と感じるようになる。低学年の子供たちが後からランニングの輪に入ってくると、なんとなくみんなのテンションが上がるのを感じたこともある。

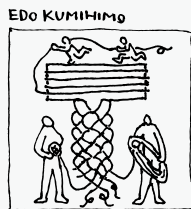
でも、結局、自閉症に限らず、他人のことはわからないのだ。これまではわかった気になりたかったのかもしれない。でも、「わからない」ことがわかった。言葉を使わない彼らと過ごして、他者を理解しようとするのではなく、どう向き合うかがとても大事なのだと思った。

Hiroshi tocava levemente as árvores e
flôres so longo da estrada. Será que
ele observa o mundo através da
ponta dos dedos? Kento as vezes
emitia um diminuto som enquanto
contava. Será que ele checava o mundo
à sua volta através daquele ruído?

As he walked Hiroshi touched the trees and
flowers along the way. Does he see the world
throughout his fingertips? Kento would
emit this small sound in a rhythm as he
worked. Maybe he perceives the world
around by pressing that sound against it.

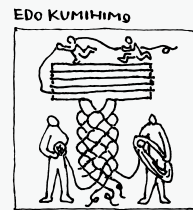
ヒロシは、歩きながら街路樹や花、手すりな
どを手で軽く触れる。彼は手の先から世界を
認識しているのだろうか。
ケントは、時折一定のリズムを刻むように小
さな音を発する。彼は音を周りの空間にぶつ
けて世界を認識しているのだろうか。

本当の気持ちはわからない。
でも気持ちを言葉にできている人の本当の
気持ちも実のところはわからない。



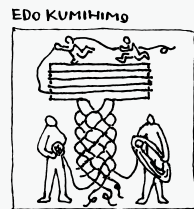
Não se sabe o que o outro está
sentindo de verdade. Por outro
lado, não se tem como enxergar
o coração daqueles capazes de exprimir
seus sentimentos em palavras.

There is no way to really know what others feel.
However we can't even grasp the real feelings of those who
can put them in words.



Hiroshi parava diversas vezes so Info da corrida,
falava algo ou passava o seu lado não produzia
nenhuma reação. Porém durante nas atividades
mesmo no intervalo, ele continuava absorvido,
enrolando a linha. Não entendo por que
isso acontecia. Talvez o importante
seja perceber aquilo que não sabemos.
A partir desse momento é que, pela
primeira vez, se começa a desejar
transmitir, compartilhar algo

HIROSHI pause would stop countless times while running. Talking to him or
passing at his side would produce no reaction. However during the
activities even between the breaks he would roll the thread obstinately
I don't understand why does it happens. May be to perceive what
one does not understand is a very important. That realization is
the starting point of a wish to communicate and to share.



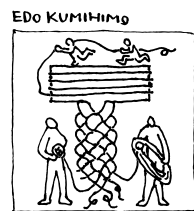
ランニングの最中にヒロシは何度も立ち止まった、声をか
けても、横を通り過ぎてても、反応はない。しかし休憩を挟ん
で、9時から13時まで夢中で糸を巻き続けた。なぜそうな
るのかは、わからない。しかし、大事なことは「わからない、
ということを知ること」なのかもしれない。それを知るとこ
ろから、何かをはじめて伝えたい共有したいと思うのだ。

7/20 PIPA



強引にひっぱるのではなくて、
糸が糸らしく
無理なく行くところに促せば、
自然とまとまる。

Não é preciso forçar, as linhas
se traçam facilmente pelos
seus próprios caminhos criando
uma ligação muito natural.



走りながら見る景色も昨日とは違って、
思わず走りながらシャッターを切った。
何でもない落書きや黄色い花に、
焦点がばっと合うように景色が目に入ってきた。

A paisagem que vejo correndo já não é igual à de
ontem. Mesmo correndo, sem querer até tirei uma
fotografia. A paisagem entrou nos meus olhos como
se fosse um foco instantâneo numa flor amarela ou
até em rabiscos sem sentidos.



Photo by Yasuaki Igarashi



Photo by Yasuaki Igarashi

20日 糸の長さを揃える経尺のプロセス。25mの廊下で糸の長さを合わせ、140本ずつ束にしていく。日中はケントやヒロシもいて賑やかだが、1人で黙々とやっている、ただの作業になってしまう。気がつけば0時を過ぎて、だんだん焦りが出てきた。糸は、日没すると空気中の湿気を吸って伸び、余った部分が絡まる。寒いし、真っ暗だし、イライラしながら絡まりをほぐそうとしたら、糸で指が切れてしまった。

途方に暮れて、糸をなでるように触れていたら、絡まった糸が、ふわふわと行きたいところに整いはじめて、「あ、こういうことかもしれない」と気づいた。強引にひっぱるのではなく、糸が糸らしく無理なく行くところに促せば、自然とまとまる。

そうやって糸との触れ方を変えてみたところ、糸も揃い、自分の気持ちも穏やかになっていった。そして、だんだんPIPAの子供たちと糸が似ていると思うようになった。自分がイライラしたり焦ったりすると、彼らも鏡のように反応する。



Photo by Yasuaki Igarashi

21日 糸に接するように、ヒロシとケントに接しよう。彼らが立ち止まっても歩いても、心にささくれ

ができないように心がけた。常に穏やかな気持ちでいるように。すると不思議なことに、良い感じで走り続けることができた。

走りながら見る景色も昨日とは違って、思わず走りながらシャッターを切った。何でもない落書きや黄色い花に、焦点がばっと合うように景色が目に入ってきた。それは走っている感覚とも連動している。ケントとヒロシは、こういう感覚の世界にいるのかもしれない。

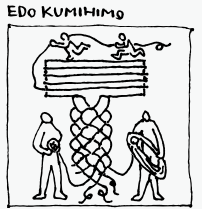
人の心は変化する。人の数だけ世界があるのではなく、人の心の数だけ世界がある。心が変わることで、世界の捉え方が変わり、そして世界も変わっていくのだろう。今日、自分が捉えるこの世界は少し変わったような気がした。

7/21

Voltar-se para o fio e esquecer
todo o resto. Sentir o fio na ponta
dos dedos. O fio se enrola como
os sentimentos daqueles que o tocam,
se desenrola de maneira bela. se
torna Sincero, leve, simples.
A maneira de se voltar para os fios
é a mesma de se voltar para as pessoas, são
como um espelho.

Forgetting everything and, in silence,
face the thread. To feel the thread in
your fingertips. The thread gets mixed
and wound up as the feelings of the ones who touches it, it gets free,
it gets sincere, light, simple. The way of facing the thread is
like the way of facing people. The thread can reflect oneself interior just like a mirror.

すべてを忘れて黙々と糸と向き合う。指先から糸を感じる。糸は糸を触る人の気持ちや向き合い方によってこんがらがって絡まったり、きれいに解けたり、素直になったり、硬くなったり、柔らかくなったりする。
糸との向き合い方は人との向き合い方と同じ。糸は自分自身を投影する鏡のようだ。



7/22

Monte Azul



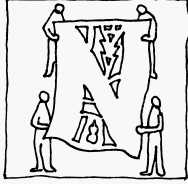
当初、使ったことがない、危ないという理由ではさみの利用は無理だと言われていた。しかし、利用者はそれぞれのやり方ではさみを使いこなした。きりこの切り出し作業は、次第に先生たちへも広がっていった。

「幸恵のプロジェクト」が「私たちのプロジェクト」になっていった。

「あと何枚仕上げればいいのか?」。先生や子供たちが、きりこの枚数を気にし始めた。この日から、合間を見つけては手伝ってくれて、きりこの枚数は日に日に増えていった。

“O Projeto da Sachie” tornou-se o “Nosso Projeto”. “Quanto é que falta?” os professores começaram a se preocupar com o número de “kirikos” acabados. A partir deste dia os professores também começaram a ajudar e o número de “kirikos” aumentou dia após dia.





初めから無理だと決めつけてはいけなく、
みんなが考え始めた。

Todos passaram a acreditar
que não podemos desistir
de algo sem tentar.

Everybody started to believe one should not give up
on something before trying.

7/25 PIPA



日比野が組紐ワークショップの内容を確認。

Photo by Tsukasa Mori



Photo by Tsukasa Mori

7/26 憩の園

ジュンから作品の説明を受け、日比野は交流プログラムの参加者と面会。施設からも歓待を受けた。

日比野がモンチアズールを訪問し、生徒がきりこを切っている様子を見学。完成したきりこを建物の壁面に飾ってみた。リオデジャネイロの展示で使うテーブルクロスを利用者たちとつくることになり、ネネッチを交えて段取りを確認。

Photo by Tsukasa Mori



7/27 Monte Azul



Photo by Tsukasa Mori

日比野がタチのアトリエを訪問し、作品の確認と変更点のアドバイスなどを行う。帰り道の車のなかで、リオデジャネイロの展示のために、サンパウロでアーティストたちがTURNした瞬間の「ことば」を抽出することが決まる。コーディネーターの高塚さんが話した、モンチアズールで、瀧口の想いがネネッチに通じたときの心の変化こそ、伝えるべきことだと判断したからだった。

日比野が朝顔の種らしきものを発見して購入。ブラジルにいる間、育ててみることにする。



Photo by Katsuhiko Hibino

7/28

7/27 Monte Azul

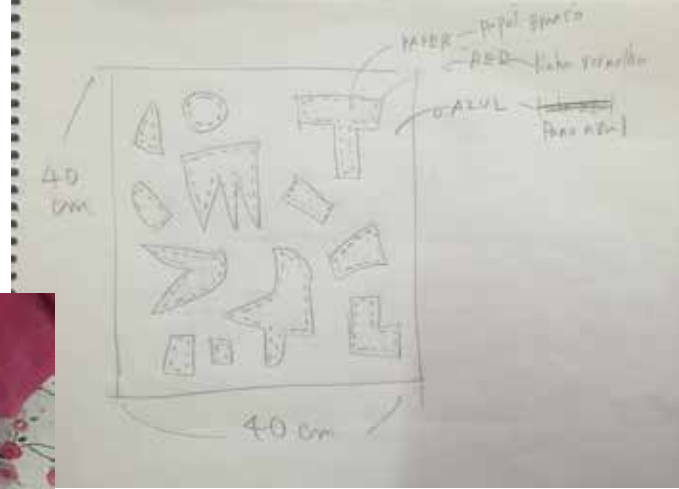


Photo by Katsuhiko Hibino



リオに切れ端を持っていく方法として、テーブルクロスに縫い付けるアイデアが採用された。展示に使うテーブルの大きさから布の大きさを割り出し、日比野がスケッチを描いた。制作は、モンチアズールの縫いもののクラスで行われた。



Photo by Katsuhiko Hibino

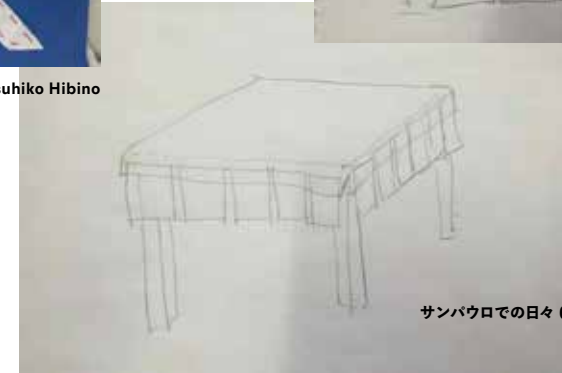
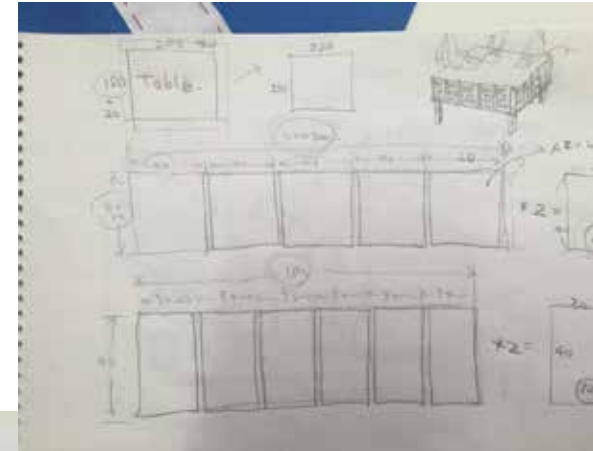


Photo by Katsuhiko Hibino

「みんながきりこにはじめて触れた頃の切れ端は、それだけで愛おしい。切ったあとや線から、一人ひとりの感情が伝わってくる（瀬口）。たとえば、ヴァーギネという男の子は、集中するとどんどん勢いがついて、長くしゅーっとはさみを走らせる。和紙の感触が楽しくて、くしゃくしゃにつかんだ跡がいい味わいになっている切れ端もある。不恰好な切り口も、紙の汚れも、それぞれに個性がある。

Photo by Sachie Takiguchi



7/29



サンパウロのホテルではじめて4人のアーティストたちが揃い、現地スタッフも含めてミーティング。その場で日比野が、1枚の紙にリオでの展示の構想を描いた。今後、展示はこの一枚絵に導かれるようにかたかが決まっていく。

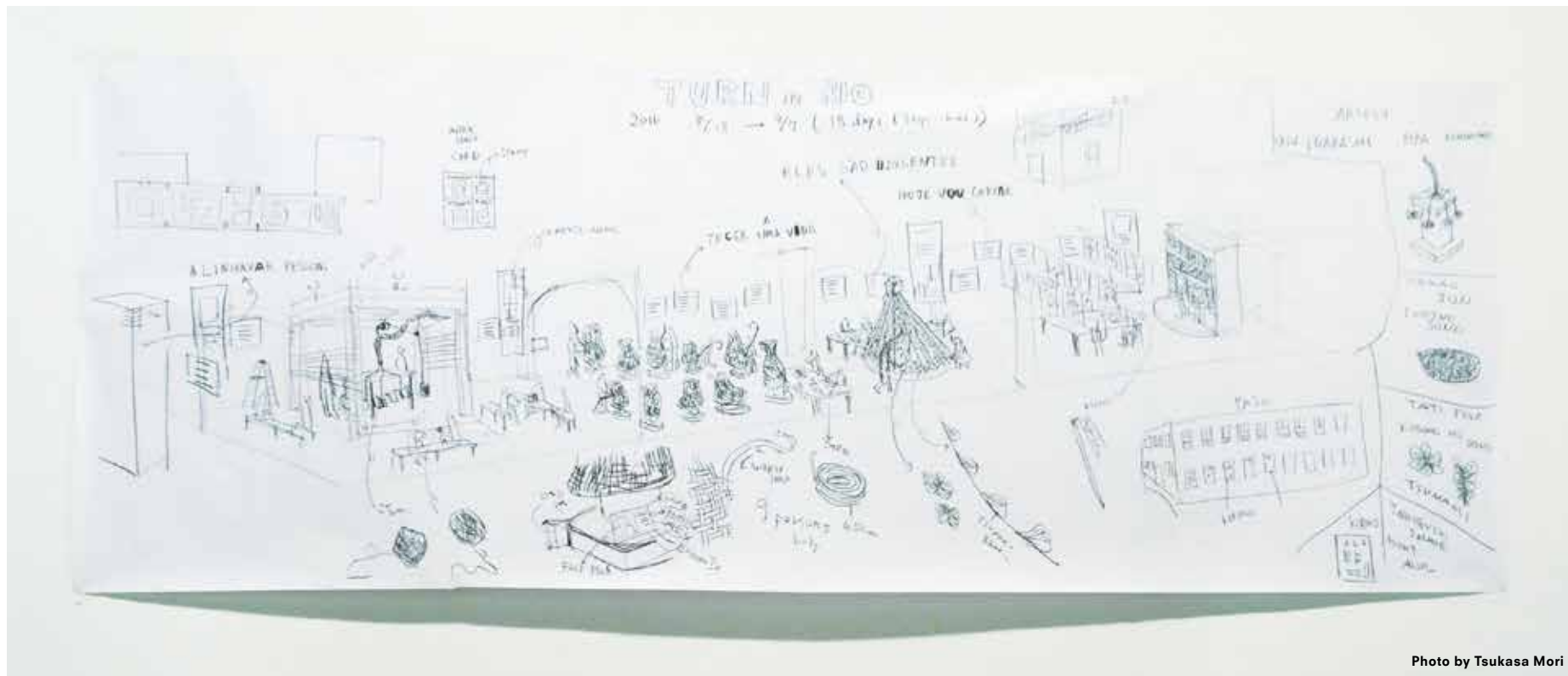


Photo by Tsukasa Mori

7/30

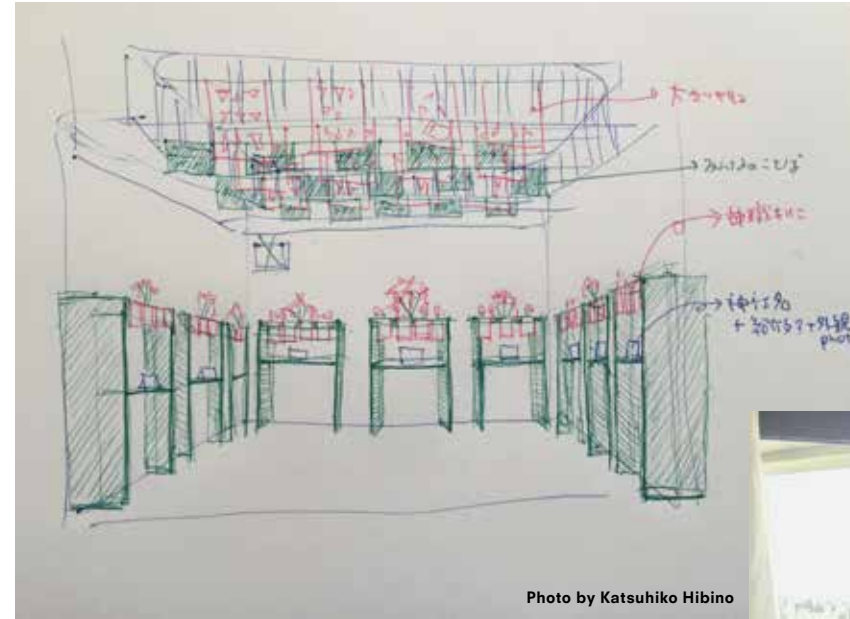
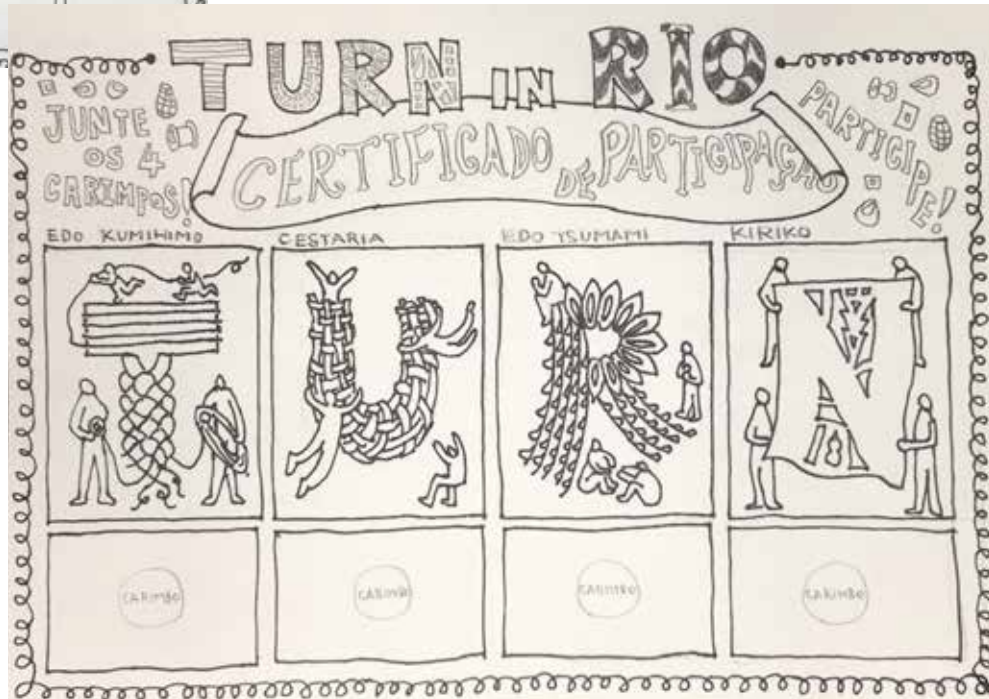
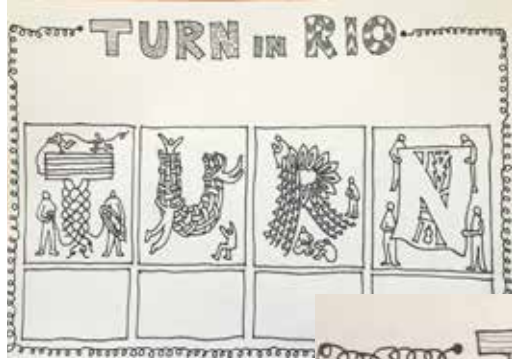


Photo by Katsuhiko Hibino

日比野が滞在先でリオデジャネイロでの展示案をスケッチ。
しかし、2階の天井から吊るす案は採用されなかった。

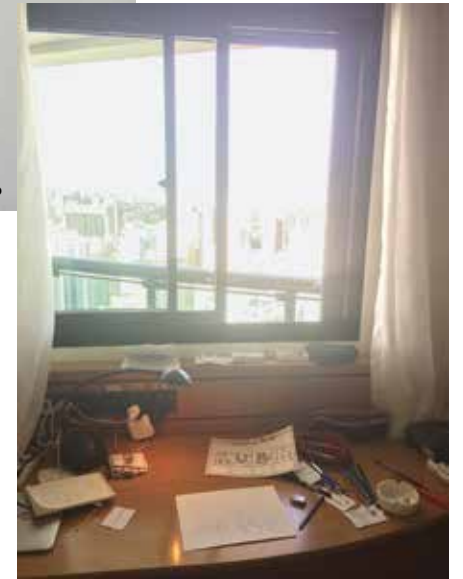


Photo by Katsuhiko Hibino



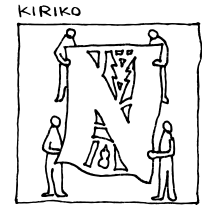
Photo by Katsuhiko Hibino

この日、日比野はスタンプラリーの原稿を仕
上げたり、展示の内容のスケッチを描いたり
で部屋にこもる。数日前に蒔いた、朝顔らしき
種が成長してきた。

8/3 Monte Azul

きりこはもともと、神様の世界と自分の世界の間にあり、2つの世界をつなぐもの。このプロジェクトでこだわったのは、自分がいる世界からまったく違う世界を想像したり、感じたりする時間だった。

「きりこによって、これまで出会ってきた人が、日本とブラジルの距離にあってもつながれるかもしれない」。瀧口の胸には、ブラジルに入る少し前から、そんな考えが浮かんでいた。



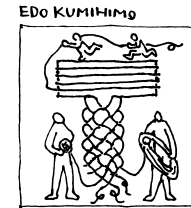
7月下旬から慌ただしく準備して開かれることになった「きりこフェスタ」。きりこの説明や、切り出しの体験のほか、瀧口がつくったどら焼きや親子丼などの和食が振舞われた。



8/4 PIPA

糸に触れていると、心が落ち着いた。
それはPIPAの子供たちと触れ合っているのと、同じ感覚だった。

Quando tecia os fios sentia tranquilidade e paz.
Eram sensações iguais às que sentia quando me relacionava com as
crianças do PIPA.



冬休みに入る前に染めたエプロンを、全員にプレゼントした。エプロンをしたみんなに、この日PIPAに来訪した日比野らも加わり、記念撮影。

8/12 Monte Azul



モンチアズールの広場に初めて立ったとき、
みんなが混ざり合っている様子を眺めて、
いいなあと思った。

最終日、わたしはその混沌のなかにて、
多様性をつくっているひとりになっていると感じていた。

“Que bonito”, foi o que senti quando cheguei na praça de
Monte Azul e vi o entrosamento entre as pessoas.
No último dia eu fazia parte desta confusão e já me sentia parte
deste grupo que criava a diversidade.

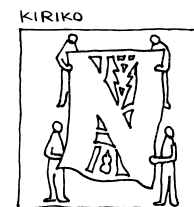


Photo by Sachie Takiguchi

Só estar ali é muito
importante. O tempo
transforma as relações.

Just being is very important. TIME changes relationships.

そこだけでいい。
時間が関係性を変える。



5/15－6/13

宮城県本吉郡南三陸町



サンパウロの施設での交流・制作以前、日本で工芸の研修をした3人。五十嵐とタチはそれぞれ、東京の職人のもとへ通い、「組紐」と「江戸つまみ」の基礎を学んだ。瀧口は、約1ヵ月間、宮城

県南三陸町に滞在しながらきりを習い、地域の人々とのワークショップをコーディネートし、ブラジルに持ち込むきりの制作に励んだ。

1ヵ月間、南三陸町に滞在した瀧口が、南三陸で迎えた初めての朝は、宿泊先である「まなびの里いやど」の理事・阿部忠義氏と南三陸の散歩からスタート。滞在前半は、地域でのネットワークづくりと近隣の神社への協力要請のため、精力的に南三陸、近隣の市町を回った。

きりこの背景や精神性についての理解を深め、技術を習得するための拠点となったのは、上山八幡宮。神職の工藤真弓氏が、南三陸での案内役を務めてくれ、神社のなかに練習拠点も用意してくれた。

初日から、工藤氏をはじめという「鯛飾り」などのつくり方を宮司から習った。上山八幡宮の前宮司は、20分で切り出しから展開まで行っていたと聞かす、瀧口のはじめての制作所要時間は、切り出し70分、展開20分。今後の練習用の紙や型紙を預かった。

周辺の神社に通い、TURNへの理解を求めながらきりこの使用許諾を得ていくのは、簡単な作業ではない。旧来から神性を帯び、先の東日本大震災からの復興の過程でも大事な役割を担ってきたきりこ。それだけに、これまでのあり方を逸脱し、型紙を拡大してワークショップというかたちで展開していくことへのハードルは高かった。

しかし、地道に理解を求めていった結果、さまざまなかたちで7神社が協力してくれることに。かたちも大事だが、「真摯に伝えていくこと」への瀧口の姿勢が伝わっていくにつれて、きりこがブラジルへ旅することが前向きに捉えられるようになっていった。

6月3日は、日比野、アーツカウンシル東京一行が南三陸を訪ね、協力神社にあいさつ回りをし、瀧口はじめてのワークショップとなった志津川中学校でのワークショップに立ち会った。その日を皮切りに、瀧口による連日のワークショップがスタート。南三陸に来てから紡いでいった縁を生かし、約250人も地域の人々ときりこづくりをした。

また、ブラジル帰国後も南三陸に数日間滞在し、各地へあいさつに行ったり報告会を開いたりするなど、現在も交流を続けている。



Photo by Takanori Sato

協力神社

- ・南三陸町：上山八幡宮／入谷八幡神社／二渡神社／荒澤神社
- ・気仙沼市：北野神社／小泉八幡神社
- ・大船渡市：中森熊野神社

WS開催実績

6/3	南三陸町立志津川中学校	16人
6/4	あくていぶ！ vol.3 ～フィンランド式野球体験会～	約10人
6/6	南三陸きりこくらぶ	8人
	宮城県立志津川高等学校	34人
	入谷の伝承きりこ 特別体験会	10人
6/7	気仙沼市立小泉中学校	44人
6/8	志津川高校仮設住宅	7人
6/9	南三陸復興ダコの会 入谷Yes工房（翌日も開催）	12人
	南三陸町移住者の会	7人
6/10	南三陸町立戸倉小学校	68人
	かもめの虹色会議	5人
6/11	伝承きりこワークショップ	約27人
総参加者数		約250人

5/11-6/8 龍工房

師匠となるのは、龍工房の代表で伝統工芸士の福田隆氏をはじめ、息子である福田隆太氏と甥の林茂樹氏。伝統を重んじ、代々受け継がれ、守られてきた組紐の技術を教えることに、当初不安と難色を示したが、五十嵐の立ちふるまいを気に入り、快諾。熱心な指導による研修が始まった。

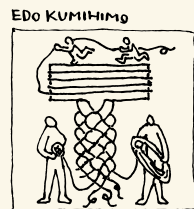
1回目の研修では、組紐の歴史と現在、思想や考え方などを学んだ。基本的には門外不出の技術の手ほどき。宿題として組紐を組むことを課せられ、他の仕事の現場に組み台を持っていき、合間には組む作業をして過ごしていた。

2回目は、宿題のミニ丸台で組んだ組紐を確認してもらうことからスタート。続いて、角台の組み方の指導を受け、新たな宿題を持ち帰った。五十嵐は、組む筋がいいという評価を得、取り組みにはずみがついた。

最終回では、角台の宿題提出後、ブラジルでの展示プラン及びワークショップ内容やアイデア提案。具体的な道具類を龍工房の方々と検討した。スタッフのひとりに「組紐の新しい見せ方や伝え方を考えてはいるが、どうしても職人的な常識に捉われてしまう。そこを飛び越えてもらえる嬉しい」と励ましをもらう。

技術だけでなく、組紐に込められた精神性にも造詣を深めた五十嵐。「組紐は空気を組む」という教えに触発され、空間としての空気や、空間と対峙する自分や居合わせた誰かとの関係性といった意味での「空気」も組んでみたいと考えようになった。この想いが、複数人で組む構想へつながっていった。

プロジェクトには、大きな組み台が必要なことに加えて、一番の課題は糸。本来の組紐では絹糸が必須だが、五十嵐にはこれまで交流してきた『クラフト工房La Mano』の木綿の糸を使いたい想いがあった。その後の打ち合わせで、巨大な組紐を複数人でつくること、La Manoの木綿の糸を使うことを想定した実験を行い、経験豊かな福田氏に具体的なアドバイスを得るに至った。



5/9-6/1 つまみ堂



丸つまみ、剣つまみという2種類のつまみの方法を重点的に学び、つまみへの理解を深めていったタチ。接着に必要なのりを練るのに力とコツが必要で、つまむのも細かい作業の連続。専門用語が多い指導に通訳も手を焼き、苦労^{たけやり}の多い研修のすべりだしとなった。そのため、講師を務めたつまみ作家、武鍬早苗氏には、「毎日100個はつまみなさい」と課題を与えられ、研修がない日もつまみの練習に忙しい日々を送った。当初は滞在していたホテルで宿題をしていたが、スペースが限られるため、途中からは日比野の事務所があるアーツ千代田3331のスペースを借りて作業を行った。

TURNのプロジェクトとして、江戸つまみが紹介されるのであれば、きちんと勉強したつまみをブラジルに持って行ってほしいとの想いから、指導はときに厳しかったが、全7回の研修を終える頃には「つまみ堂」の店主高橋正侑氏と武鍬氏に、つまみ技術について太鼓判を押されて研修を終えた。

また滞在中には、高橋氏の計らいで、歌舞伎のかつらを制作する床山に連れて行ってもらい、歌舞伎役者と触れ合う機会が設けられた。かつらには、つまみが施されたかんざしが使われているほか、すべてが手づくりの職人技。タチは、伝統技術の優美さに感動したほか、後継者不足の悩みに触れ、ブラジルでつまみを伝えることの使命感を新たにした。



サンパウロからの便り

高塚由美／PIPA／Monte Azul／こどものその／憩の園

心を交わす体験

Text | 高塚由美 (TURN in BRAZIL 現地コーディネーター)

協働制作への挑戦

TURN in BRAZILではアーティストの五十嵐さん、ワークショップファシリテーターの瀧口さんの通訳兼サポートとして関わらせていただき、その間私が見て感じたことなどについてお話ししたいと思います。

瀧口さんは障害者と健常者が同じ施設を共有するモンチアズールで障害を持った生徒たちと東北切り紙「きりこ」の制作を開始しました。

生徒たちはハサミを上手に使えず、切れたとしても和紙を切り刻んでしまい、作業はなかなか進まない状況でした。そこで瀧口さんは、みんな楽しみながら制作ができる方法はないかと考え、学童保育の子供たちとの合同作業を提案。すると、コーディネーターのネネッチは、ただ作業人数を増やすために健常者の子供たちを参加させたいだけなのではないかと受けとめてしまいます。

このことをきっかけに、どのように作業を進めていくのか少し不安を抱えていたネネッチや先生たちとしっかり話し合うこ

とになりました。

瀧口さんは、「健常者の子供たちの参加を希望するのは、障害を持った生徒たちだけでは無理で、作業人数を増やしたいという理由からではありません。初めてモンチアズールに来たとき、障害者と健常者が何の違和感もなく同じスペースを共有している環境を見て、とても感動しました。こちらでは普通のことかもしれませんが、日本では障害者と健常者が同じ空間を共有することは珍しく、この場所のように自然にみんなが交流している心地よい環境で制作ができれば素敵だと思ったからです」と話しました。そのとき、何かが少し変化しました。ネネッチは目に軽く涙を浮かべて「わかりました。そういう考えを持っていてくれて嬉しい」と受け入れてくれました。

その日からみんなが一体となって、本当の意味でのプロジェクト開始となりました。そして結果的に障害を持った生徒たちは、独自の方法で和紙を切ることができるようになりました。瀧口さんは、挑戦し新しい扉を開けていくことの大切さをみんなに伝えることができたのだと思います。

次に、江戸組紐の作業を通じてPIPAの自閉症の子供たちと交流を深めた五十嵐さんについてお話ししたいと思います。

五十嵐さんはどうすれば自閉症の子供たちの世界観を感じ取り、彼らのやり方で考えることができるのかを常に模索しているようでした。五十嵐さんは、「特に子供たちと言葉を交わすわけでもなくただ黙々と走っているだけだけど、何周も走っているうちに子供たちの世界観の渦のなかに入り込んでいき、少し彼らの世界に自分自身を置く事ができるような気がするんだ」と語り、PIPAの日課である早朝マラソンに欠かさず参加しました。

ある日、施設長のヒカルドが「実は、五十嵐さんが来て組紐作業を始めるまですごく不安でした。障害を持った子供たちを、この子はできる、この子はあまりできないというように識別したりしないだろうか、と。でも彼は一人ひとりをよく観察し、

理解しようと努力し、この子にはこの作業は難しいけどほかの作業は上手にできる、というように個々の特徴や個性を尊重して進めてくれました。私たち同様一人ひとりの可能性を見つけ出すことの大切さを理解してくれていて、彼への信頼も高まりました」と話してくれました。

五十嵐さんは、すぐに消えてしまいそうな感情の繊細な動きをできるだけ見逃さないように、そして大切にしながら、言葉を使ってうまく感情表現できない自閉症の子供たちと糸を通して触れ合うことにより、彼らの言葉を聞き出していたように思います。

こうした現場に立ち会ってみて、人と心で関わり合うことを可能にするプロジェクトは素晴らしく、継続されていくべきだと思っています。

指先に宿る態度

Text | PIPA 和嶋・実・ヒカルド(施設長)

包括的な療法芸術

アーティスト・五十嵐靖晃さんの「PIPA青空学級(以下、PIPA)」来訪には、大きな期待を寄せるとともに、「PIPAの子供たちの現実を理解してくれるだろうか?」「子供たちが適切な応答ができなかったら、彼はいらいらするのではないか?」と不安もありました。

当初、私は、彼は作品をうまくつくるために優秀な子を選び、厳しい状況にある子は放って置かれるのではないかと感じていました。そのため、療法士から子供たちが全員参加して、みんな楽しんだと聞いたときの驚きと喜びをいまもはっきりと覚えています。そしてさらに驚くことに、糸巻きの作業の際は、みんな落ち着いて静かだったということです。

五十嵐さんによると、それぞれの子供にとって一番適切な役割を見つけるのは喜びだったそうです。その話を聞いて、アートを最優先にしないアーティストを迎えたのだということがわかりました。まず、優先すべきは「人」。子供たち一人ひとりの興味とできることを発見していく彼と共にいるのは、私たちにとっても喜びでした。

PIPAの子供たちは、ブラジルでは、たいてい学校でも自宅で

も脇に置いて置かれることが多い。なぜなら、自閉症の症状の重さが、目の前に存在する人間性を覆い隠してしまうからです。「病気」という概念から抜けだして子供を理解するというのは、PIPAの生活療法が目指すことです。五十嵐さんの芸術的な姿勢は、私たちの姿勢と同列に並ぶものでした。つまり、人間の不完全性を不満に思うことなく、正確な形状を求めず、一人ひとりができることで豊かになる芸術。すべての参加者の取り組みの軌跡を積極的に受け入れ、個々の活動の貢献の記録の美しさを示す、包括的な芸術だと思います。

五十嵐さんは、正確な形状をつくらせようと子供たちを指導したりコントロールしたりしようとしませんでした。糸巻きや染色をしながら、子供たちがどのような反応をするか興味を持っているように見えました。子供たちの唯一無二の反応こそを、自分の芸術に取り込もうとしていて、かたちの調和などは気にしていない。また、あらかじめ何かを期待をしてはいないようにも見えました。それぞれができる表現のかたちを求めている。あまりにも特異な方向にいく子供たちの能力を見て、その独自性をおもしろがっているようにすら感じました。

五十嵐さんと子供たちは、たった1ヵ月という短い期間でも親密になりました。たとえば自閉症に対しての恐怖心を乗

り越え、心理社会的な発展を促す療法士になるにはあまりにも短い時間です。五十嵐さんは、これらを学び、適応していくのにそれほど時間は必要としないようでした。もしかしたら、みんなでつくる彼のアートが、こうした変革に機能したのかもしれませんが。参加者は貢献すると同時に、自ら変容するのです。これは「療法芸術」だと言えます。現実の悲惨さを反映することはせず、無名の人々が一緒に行うプロセスで個々の力を表現することによって、変容を促す芸術です。

私自身の変化

今回のプロジェクトは、私自身にも大きな変化をもたらしました。私は作品完成の締め切りが気になって、施設の若い園生2人と手伝うことにしました。

私は役に立ちたかったのですが、糸が終始絡まっていらいりました。いらいらして、からまった部分をハサミで切って問題を取り除こうとしました。そのほうが早いし、気持ちも良いから。しかし、五十嵐さんは私を手伝って、絡まった糸をまるで生き物のようにそっと気をつけながら解きほぐしてくれました。糸に触れる彼の指先には愛情がありました。私にとって、糸は言うことをきかないものだった。

彼の態度を見ているうちに、敬意をもって糸に触れると絡まらなくなり、作業の効率が上がりました。私は完成を急ぐのをやめ、作品をつくること自体に喜びを感じはじめ、最終的な結果に気をとられすぎることはありませんでした。最初はストレスばかり感じていたのに、一日過ごすうちに、糸を手繰るのは、気持ちが落ち着く作業となったのです。ある意味で、糸を通して「天啓を受け」、悟りの境地に達したのです。

私と五十嵐さんは、この豊かな学びについて話して大笑いしました。そして、作業を通して一日中話をしたことで、彼の芸術的意図がどのようなものか理解することができたのです。

五十嵐さんは糸を通して人々となつなりたいと願っていた。糸が媒介となって、自閉症者のようになかなかコミュニケーションできない人たちと交流したかったのです。糸が人と人を結び、その人たちを全体の一部とする。糸巻き作業の体験は、まさにそれを表しています。つまり、子供が糸を巻いている間は、ほかの子供たちは、かせの動きの邪魔にならないよう糸を握らず、休みなく手で送り出さねばなりません。

子供たちにとっての挑戦は、糸に自由を与え、自分の所有物とせず、糸巻きになるための道を辿るように糸を送り出すということでした。最初のうちはうまくできない子もいましたが、すぐに、糸を自由に流れるままにさせてあげることを楽しみはじめました。「譲る」「ほかの者に通り道を与える」ということをみんなが学んだときに、変化が起こりました。

動いていると、糸は子供たちの手のなかで生きているように見えました。糸をぎゅっと握ってしまうと、糸の動きと生命を邪魔してしまうことになります。すると糸はモノとなり、命のない物質となってしまふ。美しさも失う。なんという深い学びが、こんなに合理的で、単純で、楽しいやり方で伝えられているのでしょうか! この遊びを通して、子供たちは、おそらく団体で生きるということの重要性和楽しさを少し学びとったと思います。そしてそれは、私たちの療法すべての、基本的なゴールなのです。

五十嵐さんの存在は、自閉症児を効果的に刺激する視野を広げてくれ、療法士たちには、療法においてももっとクリエイティブになるべきだと教えてくれました。そして何よりも、あらゆる人間の表現のかたちを敬い、「現実が常に変化する可能性を愛すること」を私たちに教えてくれたのです。

それぞれが固有に持つ、本質的な世界

Text | Monte Azul ネネッチ・マリエン・アウメイダ(カミニャンド・ジュントス コーディネーター)

命のなかに刻み込まれたかたち

TURNはすばらしい経験で、気高く、精神的な内容に私たちは魅了されました。ファシリテーターの瀧口幸恵は、きりこがどのような背景を持って生まれたのか、その精神的な基盤について語ってくれたため、地球の反対側の文化・芸術であっても、人間として普遍的なものからつくられたのだと理解することができました。

きりこのワークショップを通して、自然の命、人類の生命、そして精神でつながっていることを感じました。私たちは、人種、国籍の違い、あるいはハンディキャップの有無に関わらず共同体であるということを感じ、人生の移り変わりのなかでときを経て学ぶこと、命のなかに刻み込まれたかたちを学びました。

紙の繊細さ、ハサミやカッターで切り抜くときの注意力、絵を展示するために吊るすこと、空気、光、熱、感情、思考、そして関係者すべての気持ちたちが相まって、ひとつの美しい作品に結実したのです。

支援を目に見えるかたちへ

作業は、和紙を4つに分割したり、より障害が重い人たちに、彼らに適した絵柄を用意したりと条件に応じて割り振られました。この体験は関わる全員を動機づけ、積極的に関与、連帯させるために大変重要なものでした。幸恵はいつも温かく愛情ある態度で接してくれ、それがコミュニケーションをスムーズにし、彼女がポルトガル語をまったく話せなくても、教育者などほかの協力者の積極的な関わりにつながりました。言い換えれば、彼女の機敏さ、実行力、明るさ、そしてやささがみんなを惹きつけていったのです。

障害がある人もない人も、数時間同じ目的のためにひとつになることができました。

私たちは、知的障害者たちと作業を行うため、彼らの注意力と記憶力、連携力の限度を考慮して、量的な目標は設定しませんでした。それは全員に緊張を強いることになると思ったからです。非常にたくさんのきりこを制作するという提案を受けて、困難であるということはわかっていたましたが、教師たちの

強い連携と、幸恵の大きな努力によって、意義あることを成し遂げることができました。園生たちは自分たちもやればできるのだと実感し、作品が展示されたときはとても誇らしそうでした。注意力が散漫な園生たちも落ち着きや集中力を養い、自分たちが貢献できるという喜びを得ていました。誰もがワークショップに参加できる機会を設けた際には親御さんたちも参加し、園生、協力者たちとひとつになって、一緒に過ごすことができました。

「できる」ということは、美しくすばらしいものです。その過程にも、結果にも意味がありました。リオデジャネイロのバソ・インペリアル窓にきりこが飾られている様子や、オリンピック期間中の幸恵によるワークショップをビデオで観て、彼女と園生たちが一緒にいる映像が出てきたときは、みなとても嬉しい気持ちになりました。障害者たちへの支援を目に見えるかたちで表すという目的は達成されたのです。しかも、それをアートを通して行ったことでさらに意義深いものとなりました。

創造的空間で生まれる絆

モンチアズールコミュニティ協会では、芸術作品を大事にしています。芸術は、人間の本質的なもの、内面を表現できる手段であり、それぞれが固有に持つ、本質的な世界を知ることができるものとして考えています。その意味でも、今回のプロジェクトは成功したと言えるのではないかと思います。

私たちは同じ言語を持ち、目的を達成することができました。知性を越える創造的空間をひらきました。そこは、思考、感情、欲求に命をもたらし、私たちを兄弟愛という絆でつないでくれました。

共に過ごした時間

Text | こどものその セリーナ・カワモリタ(管理マネージャー)
ジェシカ・ポリ・スギモト・シラベ(ソーシャルワーカー)
マルシア・ウチムラ(聴覚専門医師)
マリア・ケイコ・ナカムラ(教育者)
カミーラ・カリヤ・ベゼーラ(支援員)
マリア・アパレシーダ・ダ・シウヴァ・リマ(支援員)

目覚めた感情

造形芸術家、タチ・ポロは、すぐに支援員にも園生にも馴染み、それぞれができることに理解を示してくれ、その人にとって適切な教え方を模索してくれました。それまでの経験を私たちに一生懸命伝え、そのカリスマ性と飾らない人柄で、最初の瞬間からわたしたちの心を掴みました。

タチと園生との触れ合いのお陰で、みんなで特別な時間を共有することができました。共同作業を通じて、園生たちは楽しく、温かさや友情に満ちた時間を過ごし、日々の制作を続けて、少しずつ作品ができ上がっていきました。そしてチームワークを養い、団結や達成感を味わうことができました。暖かさや愛情、友情が結びつき、ひとつの芸術に変化する協働創作に携わることができ、嬉しく思います。

共に過ごした時間は、双方にとってとても重要なものでした。作業を近くで見っていた支援員たちは観察し、感じ、学ぶことができ、全員がすばらしい学びを得ることができました。

支援員たちによると、チーム全体の行動に変化が見られましたが、それはとても良いもので、また思いもかけぬものだったそうです。いつもは団体行動が苦手だったり、同じ場所に決まった時間じっとしていることができなかったり、もしくは他人に対して攻撃になることもある一部の園生は、数日経った頃には落ち着き、完成させるために協力したいという気持ちが生じたのが見られました。

今回は、普段攻撃的な衝動をなかなか抑えることができない人や、日常の簡単なルールに従うことに激しく抵抗する人など、自分の感情をうまく表現したり、感情の自制が効かず、共同生活を営むことができない園生たちも参加しました。最初の活動が始まったあと、彼らのそうしたふるまいが和らぎ、雰囲気もより生産的で楽し気になった様子が見受けられました。すべての園生たちのなかに参加したいという欲求が見られ、これまでやったことのないことに対して恐怖心を示す人たちですら、活動の続けながら一つひとつの段階を経て、自分たちにもできるんだということを発見したのです。

それぞれ他人と違う点や困難があるけれど、このプロジェクトに参加した人たちは、みんなでひとつの真の芸術作品をつくることができました。作品ができていくにつれて、園生たちは一層熱心で楽しげになり、彼らのまなざしには誇りと満足感が溢れていました。それまで眠っていた、あるいは、もしかしたら感じたことのなかった感情が、ひとつの目標に向かっていくことで目覚めたのだと思います。

「克服」によって育まれたもの

園最大の行事である「こどものその祭り」の準備で多忙な頃だったので、なかなかタチの制作を集中して手伝うことができないことを、職員たちは当初心配をしていました。ところがそれは杞憂に終わり、みんながタチの努力を知り、すばらしい作品を盛り立てていきたいという思いで一致団結しました。園生たちはタチと一緒にいる時間を精一杯有効に使うことができ、熱心さと責任感をもって、穏やかで優しい気持ちと友情を感じながら作品に取り組んでいました。

職員たちが完全には園生たちのために時間を割くことができなかったため、タチの存在は誰にとっても重要なものとなりました。作品が完成するころには、グループに力強さが生まれ、園生の一人ひとりが幸福感と達成感を表わし、いまどんな気持ちでいるかを言葉にして表現しました。それぞれのまなざしと微笑みを見れば、どれほど誇り高く、幸福で、満足し、平穏で、静かで、平和な気持ちに満ちていたのかがわかりました。タチは園での作業を、園生と職員たちからの盛大な拍手に包まれながら終了し、展覧会に持って行くべき染料と布を手に入れました。

今回の私たちのプロジェクトでは、「克服」が最も重要なものとして観察されました。タチは、たとえ園生たちに限界があったとしても、彼らにもできることをつくり、実現できることを見

せてくれた。それによって、園生たちのあいだには自尊心が高まり、信頼、可能性、忍耐力、友愛、友情が育まれました。

私たちは、オリンピックという世界的なイベントに関連し両国を結ぶ、美しく偉大なプロジェクトに参加したことに、大きな幸せと満足を感じています。

*セリーナ・カワモリタさんが執筆を開始し、支援員がそれぞれ報告書のようなかたちで文章を用意し、施設の専門家らが観察したこと、感じたことなどを付け加えながら職員が共同執筆を行った。

人として最も美しいもの

Text | 穂の園 スザーナ・ミュキ・ナリタ・ミズシマ(作業療法士)
タチアネ・マユミ・ムロハシ・ニシムラ(技術コーディネーター)

協働制作への挑戦

「抱擁を通して創り上げられていく、これほど素晴らしく有意義な作品に関われるとは思っていませんでした。この作品に関わることができたことを、神様に感謝せねばなりません(トクコ・ベレイラ・マルチンスさん 78歳)」

「達成感を得ました。とても大変でしたが、どんどん編んでいくうちに成功が見えてきました(ホーザ・イトウさん 67歳)」

「日本の人たちに、ブラジルに渡った移民が現在どのように過ごしているかを見てもらえるよい機会となるので、とても嬉しく思います(チルシ・ナカムラさん 86歳)」

「オリンピック(期間中)に展示されたこの作品に参加できてとても良かったです。こんな年齢で、こんなことに参加できるとは思ってもありませんでした。だってもうすぐ80歳なんですよ！(ミヤコ・ムラタ・アイカワさん 77歳)」

こうした感想が参加者のみなさんから出てきたのは、アーティストのジュン・ナカオの抱擁によるものです。彼は、その気取らない人柄と豊かな感受性でみなさんの心を掴み、そのお陰で、みなさんは芸術作品をつくることができたのです。

初めての顔合わせのとき、ジュンは今回のアートについて、必要となる技術や素材などについて、丁寧かつ詳細に説明をしてくれました。また、それぞれの人生経験を踏まえ、身体的、精神的に無理なくできることを考慮しつつ作品をつくっていくということについてもきちんと説明がなされました。

「とても楽しかったです。私にとってとても貴重な体験となりました。作品をつくっている最中は脚がとても痛かったのですが、そういうときには少し休んで、また作業に戻りました(ヨシコ・アキヤマさん 90歳)」

「自分でできそうなことならば、なんでもやってみたい。参加できてよかったです(テイコ・スガさん 84歳)」

自身の作品を編むように誘われた高齢者たちは、ジュンと一緒に作品をつくりながら、共同生活を営むなかで得た体験についても話しました。多くの高齢者たちは、好奇心とともに、互いに関わり合いたいという気持ちから参加することを決め、その結果、気持ちを通い合わせることにつながりました。

「貴重な体験でした。編むのをお手伝いしましたが、ほんの少しだけです。難しかったので(エミコ・カワカミ 85歳)」

「感謝の気持ちを表すひとつの方法と思って、参加し、編むのを

少し手伝いました。とても嬉しかったです(ヤエコ・タケダ 92歳)」

「とても楽しかったです。全部、習ってみたいと思いました(ヨシオ・サイトウさん 88歳)」

高齢者たちの挑戦する能力は、学び続けることの大切さ、そして、感情面であったとしても、成功のためには「成長」が重要だということをわたしたちに示してくれました。

作品の完成にいたるまでには、高齢者たちが挑戦し、学び続ける姿勢がありました。そして彼らが「成長」することが成功のためには重要だと明らかになったのです。

勝利の証

また、作品制作のために選ばれた場所も、接触をスムーズにしました。あまり他人と関わりを持とうとしないお年寄りでも、どんな作業をしているか、しっかり見ていました。近くまで来て、何をしているか理解しようと興味深げに観察をしていたのです。自分の姿を見て感銘を受け、自分やほかの人たちの生活の動きを理解しお年寄りがよくいらっしゃいました。

作品の一つひとつが、全員の勝利の証となりました。また次の作品がつくれ始め、よりたくさんのお年寄りたちが自ら編むのを手伝うようになりました。少しずつすべての作品がかたちを成していき、ひとりずつの姿となっていました。

作品が完成すると、みんな一番いい服を着て、感謝の気持ちでいっぱいになりながら自分の作品の隣で写真を撮ってもらいました。作品が自分たちのルーツである日本に持って行ってもらえるということも、みなさんはよく知っています。

「作品は日本に持って行かれるの？ そのことは忘れていました。あっちにいる親戚がその展覧会に行くようなことがあれば、きっと驚きますね。手紙を書いて知らせておくことにしましょう。それは嬉しいですねえ(マサ・ミノウラさん 91歳)」

このプロジェクトによって、全員がそれぞれの自尊心を高め

アイデンティティを確立することができました。ジュンの作品もまた、幼少時の記憶を引き出しました。

「彼の作品はいいですね。先生が編み方を教えてくれた小学校のときを思い出しましたよ(マリオ・クワエさん 71歳)」

子供の頃の記憶というのは大事です。そうした記憶によって、過去と現在が融合しやすくなって人生を連続したものと捉え、さらにこれまでの経験をふりかえって吟味するきっかけになることもあるからです。

自らの人生を表している作品を前にしたときの高齢者の誇らしげなまなざしは、“高齢化に伴い、お年寄りにどんな障害が現れても各自に認められ愛され、その可能性を活かして最後までその人らしく生きられるよう、良い環境づくりと良いお世話に専念する”という私たちのミッションを継続するモチベーションを、技術チームに与えてくれました。

リオデジャネイロ・オリンピック期間中の展覧会の成功は、展覧会について詳細に伝えるビデオを通して、ジュンから高齢者のみなさんに伝えられました。高齢者のみなさんも、技術チームも、数万人という観光客も同じように作品を編む機会があったということを知り、感動していました。

「よかったです、とてもうれしい！(レイコ・ハセガワさん 87歳)」

「こんなにたくさんの方が作品を見に来るとは思わなかったの、とても感動しました。お客さんのひとりが私にプレゼントを贈ってくれたできごとは、とても信じられませんでした(トクコ・ベレイラ・マルチンスさん)」

「プロジェクトが成功したのを見て、感激しました。もっとたくさんの場所で展示して、たくさんの人たちに見てほしいと思います。日本での展覧会の様子をジュンが教えてくれるのが待ちきれません(ホーザ・イトウさん)」

TURNへの感謝は尽きることはありません。このプロジェクトによって、人として最も美しいもの、つまり愛と、優しさと、抱擁が喚起されたからです。

TURN in BRAZIL in Rio de Janeiro

リオデジャネイロについて

リオデジャネイロは、サンパウロから東へ400kmほど、空路なら1時間弱の距離にある。リオデジャネイロ州の州都であり、かつて1763年～1960年まではブラジルの首都であった。

政治・経済・文化の中心地としての機能は、首都がブラジリアに移ったのちも健在。人口も600万人を超え、サンパウロに次ぐ規模を誇っている。国内最大の観光都市として知られ、特にサンバとカーニバルは世界的にも有名だ。

まちは、海と山に挟まれた独特な景観を持つ。白い砂浜とき

りたった岩山、植民地時代のコロニアル建築の調和は、世界文化遺産にも登録されている。

TURN in BRAZILの展示は、古くからのまちの中心部セントロ地区のバソ・インペリアルを会場とし、この周辺はオリンピック時には、外周がマラソンコースに採用され、隣接する広場はパブリックビューイングの会場になった。周辺はビジネス街でもあるため、仕事の昼休みや帰り道に展示会場へ通う、常連の姿もあった。



TURN in BRAZIL会場 Paço Imperial

バソ・インペリアルは、1743年に建設された、リオデジャネイロを代表する歴史的建造物。ポルトガル王室がポルトガルからブラジルへ遷都した19世紀初頭には、ポルトガル王の王立宮殿となり、1888年に、王女イザベルが宮殿の階段から奴隷解放を宣言した場所としても知られる。

その後、ブラジル初の郵便局として約100年間活用され、1985年からはリオデジャネイロ市における主要な文化センターのひとつとして様々な展覧会やコンサート等を展開。また、レストランやカフェも併設するなどの要素も取り入れ、市民に親しまれている。

生きていると形が生まれる。

木々が作る枝葉の形、アリが作る蟻塚の形、
川の流れが作る石の形、風がつくる砂紋の形。

そして人も生きていると形をつくる。
人が生きてきた地域から生まれたその地域ならではの形がある。

長い時間の中で生まれたその地域の形に人が携わった時に、
人は、自己の中に流れる生きる力を再び実感する。

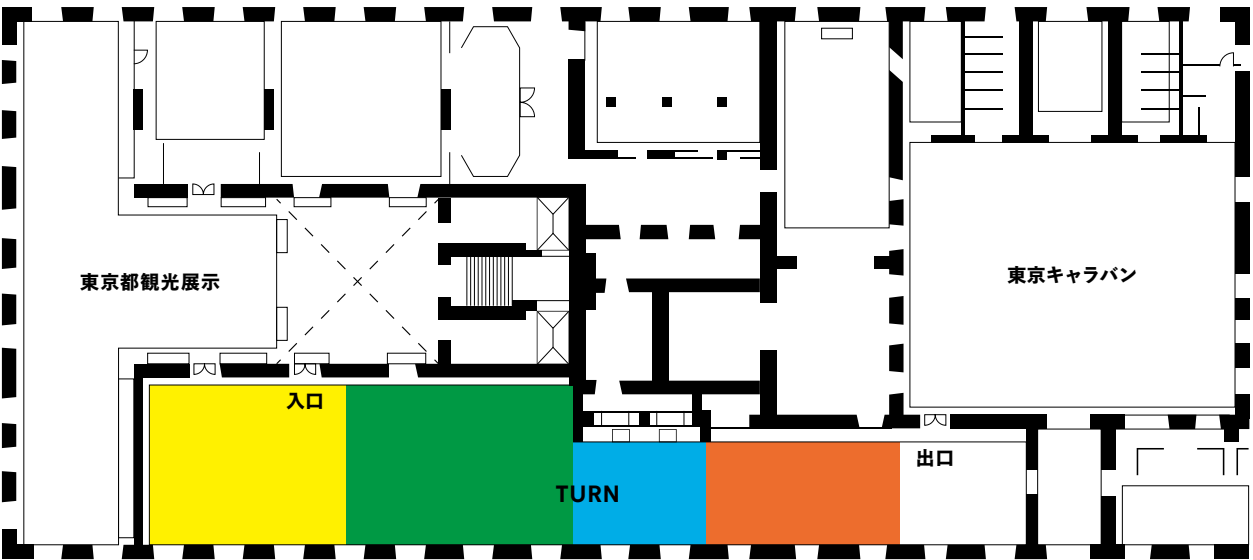
時間を超えて地域がつながる。地域を超えて時間がつながる。

日比野克彦

A vida cria formas.
As árvores criam formas de galhos e folhas, as formigas criam formas de formigueiro, o fluxo do rio cria forma das rochas, o vento cria formas de ondulações na areia.
Da mesma forma, a vida das pessoas também cria formas. A forma da região criada pelas pessoas que aí vivem é exclusiva dela.
Quando as pessoas se envolvem na forma da região, criada durante longo período de tempo, elas poderão sentir novamente a força da vida que flui dentro de si.
A região nos conecta além do tempo. O tempo nos conecta além da região.

Katsuhiko Hibino

パソ・インペリアル会場図



- 黄色 = 江戸組紐 × PIPA × 五十嵐靖晃
- 緑色 = セスタリーア × 憩の園 × ジュン・ナカオ
- 青色 = 江戸つまみ × こどものその × タチ・ポロ
- オレンジ = きりこ × Monte Azul × 瀧口幸恵

会期: 2016年8月18日(木) - 9月7日(水)
開館時間: 12:00 - 19:00 (月曜休館)
入場: 無料
監修: 日比野克彦
(アーティスト、東京藝術大学美術学部長・美術学部先端芸術表現科教授)
主催: 東京都
アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)
※本事業は、「CULTURE & TOKYO in RIO」のプログラムのひとつとして実施した。

「CULTURE & TOKYO in RIO」について
東京2020オリンピック・パラリンピックの文化プログラムを先導する東京都のリーディングプロジェクト。
TURN in BRAZILとともに、「東京キャラバン」、東京都の観光展示を実施した。

8/11

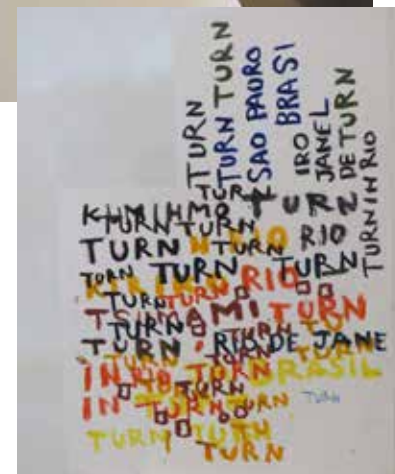


室内準備に先がけ、会場となるバソ・インベリアルの外壁すべての窓に東北とモンチアズールの人々とともにつくったきりこを飾った。日本とサンパウロで制作したきりこの総枚数は421枚にのぼる。その後の微調整は連日深夜に行われた。

8/17



展覧会のタイトルのほかに、「ソーシャルインクルージョン」のプログラムだということを明記することにした。

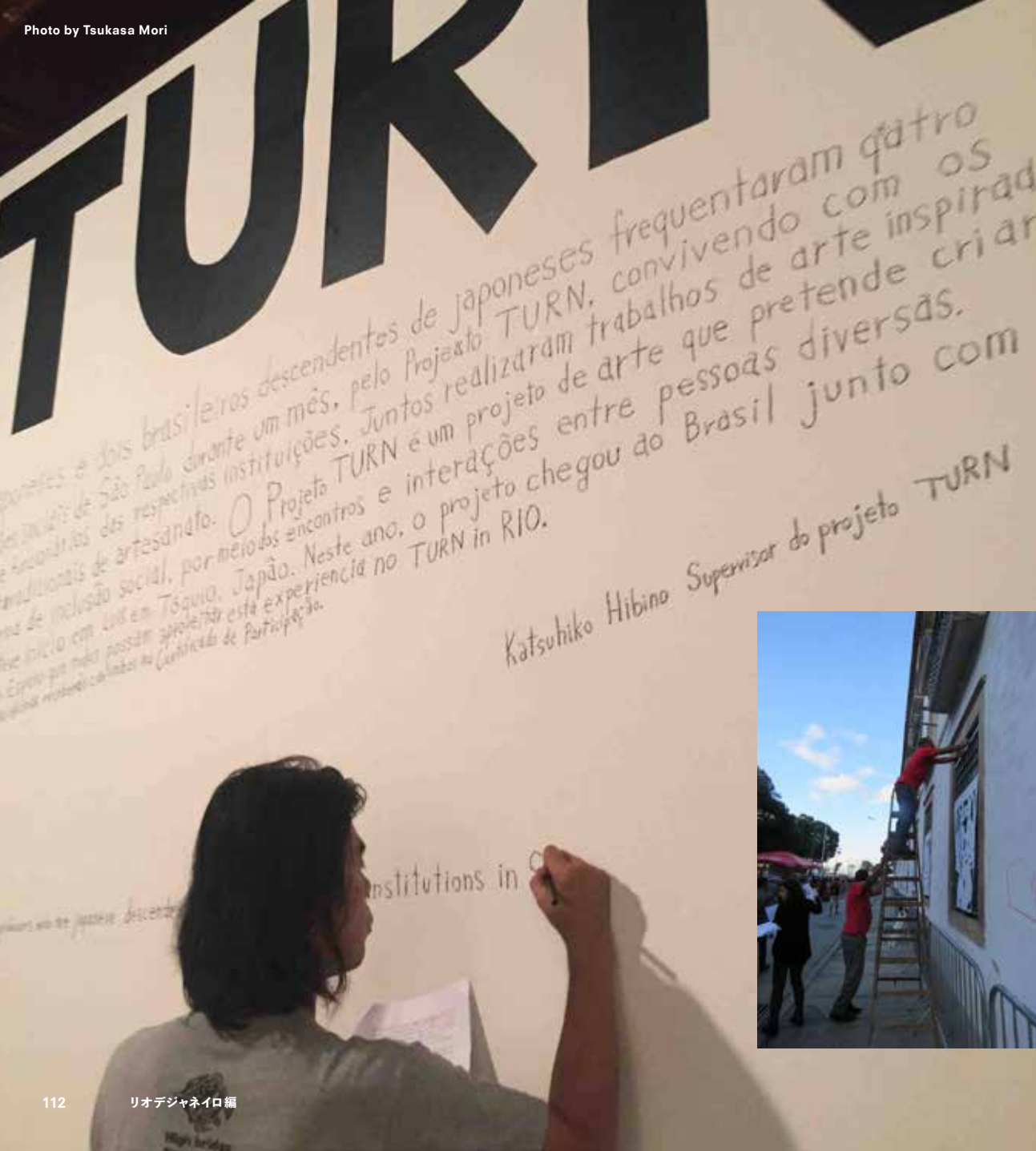


日比野は、展示全体のディレクションのかたわら、会場内に展示するアーティストの言葉のほか、会場入り口に掲げる言葉やサインなどの制作を進めた。

アーティストの言葉を描くために、リオの画材屋で見つけたクレパス。当初想定していた「新潟十日町で農家が使っていた黒板用のチョーク」は、リオには届かなかった。

Photo by Tsukasa Mori





8/18



初日は2,815人が来場。ワークショップ(WS)参加者は1,305人だった。

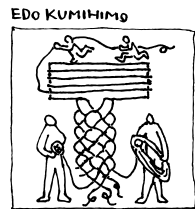
PROGRAMA DE INCLUSÃO SOCIAL
PROJETO ARTÍSTICO

TURN

JAPÃO→BRASIL

8/19

来場者数は5,208人、WS参加者数は1,637人。



糸＝人 (FIO = PESSOA)

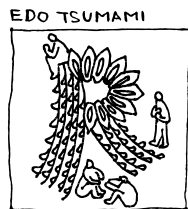
たくさんの人が関わる作品にするため、組紐を巨大化するアイデアを実現した。町田市の福祉施設「クラフト工房 La Mano」とPIPAで藍染した木綿糸を使用し、サンパウロ滞在中にPIPAにて25mの糸を240本合わせた「玉」を8個制作。リオでは、両手にかけて総糸を玉にする「糸巻き」と、「組み」の作業を体験してもらうワークショップを中心に展開した。



感性織 (Tecitura do Afeto)

憩の園の入所者をそっと抱きしめて型をつかった「籠」。素材を柔らかいテープにすることで、握力の弱い入所者だけでなく、リオ会場への来場者の多くが編む作業に参加できた。はじめは適当な長さのテープを編み込むだけだったが、会期中盤からは、来客者それぞれが自分の身体の一部をテープで測り、そのテープを未完成の籠に織り込んでいくワークショップに変化した。





共有する時...花開く瞬間

(Tempo de Partilhar....momento de florescer)

伝統のつまみに用いる「羽二重」に加えて、「シタ」と呼ばれるブラジルの布を使用し、大小さまざまな花をサンパウロのこどものそで制作。施設では、つまみの花の種になる部分も陶芸で制作した。ブラジルの女神をモチーフにした人形はつまみを連ねた「さがり」を縫い付け、自身のアトリエにてリオ行き直前に完成。リオでは、1時間ずつ交代でつまみを制作し、人形の周りにつけていくワークショップを行った。





来場者を迎えたのはモンチアズールでつくったテーブルクロスがかかった大きなテーブル。切り貼りしてつくったきりが天井から吊りさがる空間で、きりこのストーリーを語った。南三陸4神社20種のきりこの型の中から1つを選び、ひとりひとつきりこを作成するもの、子供を対象に、気仙沼に伝わる赤い「鯛飾り」をつくるものの2種類のワークショップを実施。伝統の形を刻みながら、それぞれが何かと向き合う時間を過ごした。



2階では神棚に見立てたスペースに全協力神社から預かった本来のきりこを神社ごとに展示し、映像で神職の言葉と東北の様子を届けた。また、会期終盤のカンファレンスは、この会場で催された。





Mundo parece diferente, como se fosse diferente.
Falar algo ou fazer algo não produz nada.
nenhuma reação. Fazer durante as atividades
mesmo os interesses. Fazer durante as atividades
enrolando a língua. Fazer durante as atividades
isto é, o que é importante.
Deja perceber que se sabe, que se sabe.
A partir de agora, que pela primeira vez
transmitem.

Voltar-se para o fio e esquecer
tudo o resto. Sentir o fio na ponta
dos dedos. O fio se enrola como
os sentimentos daqueles que o tocam.
Se desenrola de maneira bela, se
torna Sincero, leve, simples.
A maneira de se volta para os fios
é a mesma de se voltar para as pessoas, são
como um e mesmo.

Não se sabe o que o outro está
sentindo de verdade. Por outro
lado, não se tem como enxergar
o coração daqueles capazes de exprimir
seus sentimentos em palavras.

There is no other way to see the world.
There is no other way to see the world.
There is no other way to see the world.
There is no other way to see the world.

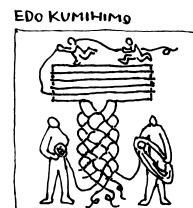
来場者数は6,937人、WS参加者数は1,504人。

8/21

来場者数は3,638人、WS参加者数は1,262人。



糸巻きのワークショップをやる人数が次第に多くなり、30人、2重の輪になって行ようになっていた。この日は、目の不自由なカップルが来場。参加者みな、糸を介してそれぞれが持っている呼吸やリズムを合わせるようになる。



8/23



各作品をモチーフにしたスタンプを集めるスタンプラリーが大人気。用紙があったという間になくなり、ブラジルで増刷するのは金額が折り合わず、この日で一旦スタンプラリーは終了。どうしてもやりたい人は用紙をトレースしてもらうことに決まる。最終週に日本から印刷した用紙が届けば再開。



来場者数は1,018人、WS参加者数は528人。

8/24



来場者数は1,234人、WS参加者数は584人。

8/27

来場者数は2,960人、WS参加者数は1,049人。



EDO KUMIHIMO



サンパウロからPIPA卒業生のケントが家族と共にリオデジャネイロまでやってきた。五十嵐と久しぶりに糸巻きをする。カンファレンスにも参加してくれ、両親からコメントももらった。



つくったきりこを、中庭で風にそよがせるワークショップを行うことにした。風にそよぐきりこに向き合うことを通して、きりこの意味をより伝えようとした。

9/1

来場者数は1,121人、WS参加者数は363人。



当初から毎日きりこをつくりにきてくれる職場が近所のヘナト。みんなに会いたいからと通うペースが朝夕の1日2回になる。彼の常連間のあだ名はプロフェッサー(先生)。新しいお客さんには、切り方を指導してくれる。常連になると、みなで大きなきりこを切り出すことにも挑戦するようになった。



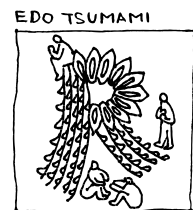
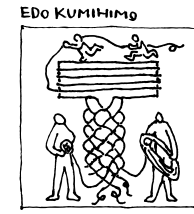
9/4



もともとは同じ長さのテープが用意されていたが、一人ひとりに向けて切る方法に変更。さらに、参加者が腕や頭の長さなど自分の身体の一部を測り、その長さに合わせて切ったテープを作品に編み込むという方法に変化していった。



来場者数は1,428人、WS参加者数は800人。



来場者数は1,036人、WS参加者数は514人。



9/7



最終日は2,728人が来場。WS参加者は1,305人だった。
のべ来場者数は、40,134人、のべWS参加者数は14,591人を記録した。



会場の声

来場者から直接寄せられた声と、アンケートに書かれた感想を紹介する。

糸は、人を起動させる。
わたしはしばらく絵を描けなくなりましたが、
組紐に接して、
また描くことができそうな気がします。

50代男性

私はもともと心臓に関わるケアを専門とした医師でしたが、
病院のディレクターを務めていたこともあり、
自閉症や生活が困難な人とも深く関わってきました。
PIPAの映像では、
子供が五十嵐さんにハグしているように見えました。
自閉症の人は大抵の場合、
自分だけのテリトリーや世界を持っているため、
そこに誰かが入ってくるのを望みません。
どうやって子供たちが体に触れることを許したのですか？

70代女性

私たちは人から与えられること、
人に要求することばかり
気にかけていることに気づかされました。
必要としている人のために心をひらいて
愛情や幸せを与え、
友情の手を差し伸べていくべきだと思いました。

30歳

私は精神科医で、
リオデジャネイロ州立大学で教鞭を執っています。
高齢者やアルツハイマーの人に携わっていますが、
一般的な活動や科学は、人に行動を促したり、
その人を改善させたりしようとするけれど、
その人そのものは見ようとしない。
自閉症の人は、通常よりも、
感情の表出の仕方にタイムラグがあります。
感情は動いているけれど、それを頭で考え、
さらに表に出すにはズレがある。
組紐は、人と向かいあって目の前の人を
感じ取りながら行うような仕組みになっています。
自閉症の人にとって非常によくできている。
PIPAにも行ってみようと思います。

50代男性



普段、同時に多くのことをしようとする自分がいるため、
とてもストレスを感じています。
今回、組紐プロジェクトを通して、
改めて自身や生活について考えさせられました。
一つひとつに、時間をかけて向き合いたい。
「わからないことを知る」ということばを通して、
知らないことを知り、
少しずつ学んでいくことの大切さに気づかされました。

20代男性

ブラジルには、アンケートを書くという習慣はないのに、
こんなに来場者が書いてくれるということに驚いた。
通常、美術館などの施設では受身で終わりますが、
さまざまな刺激を受けて、
それを出したいという思いがあるのではないのでしょうか。

30代男性／会場スタッフ

花をつくるワークショップに参加して、
手仕事のよさを思い出しました。
その場に自分の存在を感じ、心が安らぎ、
ワークショップに参加した人たちと
つながることができたような気がしました。

37歳

それぞれがこの新しい人生のかたちを、
自身の家庭内や地域に
植えつけていくことは可能で、
それがブラジルで継続していけば
すばらしいことだと思います。

53歳

ある12歳の少年は、企画の説明を聞きながら携帯をいじっていて、
わたしの説明が終わったあとに
「この企画は何なの？」という質問をしてくれました。
「もう一度説明するから、
知りたいのであれば聞いてほしい」と答えると、
携帯をポケットに入れ、集中して聞きはじめました。
ふたつのことを同時に行おうとしていたことに、
彼自身が気がついた瞬間だと思います。
TURNは、それぞれが気づきを持つことが根幹にあると思うので、
こうした現場に立ち会えたことを嬉しく思います。

30代男性／会場スタッフ

このプロジェクトが世界中で継続されていき、
人生に変化をもたらしていくことを願っています。
小さな活動は、大きな結果をもたらさないようにも思いますが、
大きな結果をもたらすためには、
このように小さくても何か
変化しはじめる必要があるのだと思います。

20歳

私は、自閉症やダウン症など専門施設で働いていて、
21歳の息子は自閉症です。息子がギターを弾いて、
それに合わせて盲目で自閉症の子供が歌う楽しそうな様子を見て、
さまざまなかたちで交感することができる可能性を感じました。
いろいろな人が共に活動できることが非常に大事で、
TURNの活動にとっても共感します。
彼らをめぐる問題は、その人を巡る人との関係性。
家族も含め、人との関係性について考えることが大事だと思います。

40代女性

TURNとは何？

25歳

いまいち。

13歳

はじめはもどかしい気持ちで
「たったそれだけ？」「どのように機能するの？」
などと考えていたのですが、
次第にリラックスしはじめ、そして最後には、
この作業が人にどのような影響を与えるのかを
理解しようとしていました。

41歳

TURN in RIOカンファレンス

日程：8月27日(土)－28日(日)／時間：14:00－17:00／会場：パソ・インペリアル

Text | 畑まりあ(アーツカウンシル東京)

1日目

「私があなたにTURNするとき／本来私たちが持っている人の力を」

登壇者：五十嵐靖晃、ジュン・ナカオ、タチ・ポロ、瀧口幸恵

ファシリテーター：日比野克彦



第1部では、参加アーティストおよびワークショップファシリテーターが、日本での研修期間、サンパウロでの交流プログラム、そして開催中のリオでの展示やワークショップの経験について報告と感想を発表。TURN in BRAZILを通して出会った人々のこと、そこで抱いた感情の機微などを、具体的な事例を挙げて語った。

サンパウロでの交流プログラムでは、きりこを通してコミュニケーションが生まれたことを経験した瀧口。一人ひとりが表現する方法を持つために、言語表現が不得意な人やできない人の、体や目線の動きによるデリケートな表現を認知していくことが必要だと感じたタチ。参加者たちに教えるよりも、自身が教わったのではないかという考えにいたったジュン。言葉が通じないからこそ、子供たちとお互いの小さな変化を確認するようになった五十嵐。さまざまな人が参加するようになったことで、互いに知り合うプロセスが生まれたり、周囲との関係性が少しずつ変化し、それぞれに新たな気づきが生まれたことが語られた。

第2部のクロストークでは、日比野が、アーティストを含め、一人ひとりが異なるということに言及。4人が考えているTURNは異なるのではないかという考えのもと、それぞれに「TURNプロジェクトを通して何を得たか」という質問を投げかけた。

瀧口は、多くの人との心が近づいていく体験を通して、お互いを知り、関係性が変わっていくことを経験したという。それは、ポルトガル語が話せず、言葉が通じない不自由な状況でこそ知り得たことなのではないかとふりかえった。

タチは、ブラジル生まれで、日本人の父とボリビア人の母の元に生まれ、「差」があるなかで他者をリスペクトするようになった生い立ちを語った上で、「交流すること、マインドを

オープンすることによって、壁がない協働制作が生まれた。壁とは、固定概念や自分で名前をつけて安心してしまうもの。表現の方法は無数にあり、本来バリアは存在しないはずだ」と語った。

日系3世であるジュンは、憩の園へ赴いた当初は、日本にルーツを持つ入居者たちが抱える傷の扱いに困惑したことを明かした。そこで日比野から、アートが治癒になるのではないかというアドバイスを受け、「傷」を埋めていくことが大事だと強く感じたと言う。

五十嵐は、自身が自閉症の傾向があるのではと考えたとともに、世界中に自閉症の人がいて、誰もが問題を抱えながら、無秩序と秩序を抱えていると言及。また、「弱者に戻る」という感覚もあると語った。自身が言葉でコミュニケーションがとれない環境に身を置いていたので、PIPAのケントとは言葉ができないもの同士。だからこそ、ともにいられたのではないかとふりかえった。

日比野からの問いかけのなかで、ジュンが、「コントロールできないもの」「予見できないもの」が多くあるブラジルの情勢について語った。その不安定の最中にいるからこそ、どのような状況にあっても立ち回れるような柔軟性がブラジルの人に備わっているのではないかと意見した。日比野は、ブラジルの寛容性はTURNにフィットしているのではないかと言及した。

トーク終盤では、TURNを社会のなかで意味のあるものに育てていきたいと語った日比野。五十嵐の「ことば」を引用して、『人の数だけでなく、心の数だけ世界がある』ということになると相当『無秩序』の世界になるが、編んだりする行為のなかで、秩序ある瞬間も生まれる。TURNはアートの本来持っている力を引き出し、次の社会を創っていくのではないだろうか」と投げかけ、トークを締めくくった。

「五輪の役割がTURNするとき／新たな文化の基礎づくりへ」

登壇者：平田・アンジェラ・多美子（ジャパンハウス サンパウロ プレジデント）

吉本光宏（ニッセイ基礎研究所研究理事）

太下義之（三菱UFJリサーチ&コンサルティング芸術・文化政策センター主席研究員／センター長）

森司

ファシリテーター：日比野克彦



第1部では、文化活動や文化政策における実践者・専門家から、自らの実践と照らし合わせたTURNの可能性について意見交換を行った。

平田・アンジェラ・多美子氏は、自身が経営しているビーチサンダル会社を通して展開されてきた活動を紹介。例えば、どのような人も差別しないことを大切な方針としながら、所得のみならず、知識が少ない子供や障害者を対象にさまざまなプログラムを実施。そうした活動を、都市部のみならず地域の人たちも巻き込みながら展開してきた。自らの経験に基づくビジネスを通じた実践を語り、文化や教育に伴う手間暇や時間、そして地域でのTURNの可能性を示唆した。

太下義之氏は、TURNと日本の伝統との共通性を指摘。その共通性が、今後の国際的な文化プログラムにとって重要なことだと発表し、4つの特徴を挙げた。

1. 参加と共有… 障害者や高齢者、来場者に、参加のみならず、主体的な関わりが求められている。
2. 余白と未完成… 人々の参加によって作品が日々変化している。
3. 歪みやずれ… 参加者によって異なるものができても、それを受け入れている。
4. レジリエンスとしなやかさ… 大きな力や権力に対抗する姿勢が内包されている。

TURNがすでに、日本の文化として根付いていたのではなかという仮説を展開した。

吉本光宏氏は、リオデジャネイロから東京オリンピック・パラリンピックに向けて、どのような文化プログラムを行うべきかを問うた。キーワードとなったのは、「文化と地方都市の関係性」。2020年に向けて、全国で文化プログラムを実施するにあたり、人口減少などの地方における課題と向き合っていかなければならない。小さなまちや農山村から、文化の新しいチャレンジの例として、日比野の『種は船プロジェクト』『明後日朝顔プロ

ジェクト』や、アーティスト・イン・レジデンスやインターネット環境を整備しての企業誘致に早くから取り組む、徳島県神山町を紹介。「スポーツと文化には、世界と未来を変える力がある」とし、オリンピック・パラリンピックを契機に活発になる文化プログラムに期待を寄せた。

第2部では、ゲスト3人と日比野、プロジェクトディレクターである森がクロストークを実施。森は冒頭で、このカンファレンスのように、TURNに対する言説や語る場が今後も生まれていくことを期待していると述べた。その後、今後のTURNの展開において、何が重要になってくるかの議論が続いた。

日比野は、リオデジャネイロでのTURNにおいては、情報を共有する場として毎日スタッフと参加アーティストと行っていた反省会が核だったとふりかえった。一方、吉本氏はTURNが、「福祉的なアート」という解釈になってしまう可能性を危惧。『「結果として、福祉的な効果があった」という解釈になってほしい。アートを中心にもってこることから外れないということが大事』と発言した。平田氏は、将来的にジャパンハウスにTURNコーナーをつくりたいという抱負を語り、その取り組みを通して日本やブラジルのみならず、南米諸国や世界中の国が歩み寄れるようになるのではないかと期待を寄せた。

「TURNはとても日本的だが、東京だけでなく、地域のまなざしを大切にすること。日本だけではなく、紛争があったり貧困があったりする場でも、日本的なTURNの歪みやずれの価値観が共有されていきながら、世界を平和につないでいきたい。東京オリンピック・パラリンピックが、東京や日本だけのためではなく、地域、そして世界のためになることが大事」と日比野が語り、2日間のカンファレンスを締めくくった。

TURN in BRAZILカレンダー 6/1-9/9

※ WS=ワークショップの略

month	date	五十嵐	瀧口	タチ	ジュン
5		5/11より、『龍工房』にて、はじめての組紐研修	5/15より、南三陸滞在	5/9より、日本に滞在し、江戸つまみの研修を受ける	5/25に憩の園事務所で施設について説明を受ける
	1 Wed	東京都町田市にある『クラフト工房 La Mano』へ、ブラジルで藍染めができないか相談しに行く		つまみ堂にて最後の研修	
6	2 Thu				
	3 Fri		日比野が南三陸視察。各神社へあいさつまわりし、南三陸町立志津川中学校有志16人とWS		TURNの担当者と打ち合わせ。材料の手配を開始。セスタリアの原材料はアマゾン地域のもので届くまでに何週間もかかる
	4 Sat		月1で開催しているスポーツイベント「あくていぶ!」に参加しWS。未就学児から30代まで約10人が参加		
	5 Sun			ブラジルに帰国	
	6 Mon		南方仮設集会所にて南三陸きりこくらぶと、志津川高校の有志34人、まなびの里いりやどにて、入谷の伝承きりこ特別体験WSを行う		
	7 Tue		気仙沼市立小泉中学校にて、全校生徒44人とWS		
	8 Wed	研修先の龍工房にて、La Manoの糸で組紐を組む実験を行う。通常の組紐は絹糸を使用するのに対し、綿糸を使うことの可否と技術的な難しさに直面した	志津川高校仮設住宅有志のみなさんとWS		
	9 Thu		南三陸復興ダコの会 入谷Yes工房と、南三陸町移住若者有志のみなさんとWS		
	10 Fri		南三陸町立戸倉小学校にて、全校生徒68人、南三陸復興ダコの会 入谷Yes工房、かもめの虹色会議のみなさんとWS		
	11 Sat		さんさん商店街・ポータルセンターにて、伝承きりこWS		
	12 Sun		きりこ発送作業		

month	date	五十嵐	瀧口	タチ	ジュン
	13 Mon		帰京	こどものそのでの活動開始。バスや電車を乗り継いで、自宅から2時間強かけて通う	
	14 Tue			利用者にTURNプロジェクトについて話し、つまみのWS。すぐに興味をもってやりたがってくれた	
	15 Wed			WSが楽しみで、タチの到着を待っている利用者がいた P20	憩の園初訪問。自宅から施設までは車で1時間以上。移動中にスザーナ(妻)とプロジェクトについてプレスト
	16 Thu				
	17 Fri			全員で施設内の掃除をする日。これまでの作業をふりかえり、新しい素材の選択肢などを検討	原材料の注文をキャンセル。野生のつるは、硬くて高齢者には適していなかった
	18 Sat				
	19 Sun	宮城県多賀城市を訪れた際、縄文土器の縄模様のなかには組紐でつくられた文様があることを知る			
	20 Mon				協働制作のためのインタビューを開始。長い時間をかけて入居者の空虚さが明らかになる
	21 Tue	日比野、アーツカウンシル東京メンバー(事務局)と打ち合わせ。展示イメージがおおまかにまとまる			日比野+アーツカウンシル東京メンバー(事務局)とスカイプ会議 P24
	22 Wed			La Manoの冊子を紹介すると、みんな興味津々	高齢者に適したセスタリアの技術や材料について調べ始める
	23 Thu	トークシリーズ『私があなたにTURNする7日間』に参加。これまでの組紐研修の成果とブラジルでの活動プランを発表 P157	五十嵐と同じくトークに参加し、南三陸の話と、ブラジルでの展開について話す P157	行方不明事件 P28	材料の供給業者を訪問し、サンプルを採集
	24 Fri				複数の技術や素材をテスト。どのように空虚をかたちづくるか、情を物質化すればよいかが課題
	25 Sat				

month	date	五十嵐	瀧口	タチ	ジュン
7	26 Sun			ブラジルの伝統的な布「シタ」を、つまみWSで試してみる。従来より大きいサイズつまみができた	
	27 Mon	角台、La Manoの糸、藍染め道具を、ブラジルへの発送準備			
	28 Tue	21:20 成田発	21:20 成田発		技術と材料を決定。供給業者から原材料を仕入れる
	29 Wed	16:30 サンパウロ着 現地関係者、展示のための組み台を製作を担当する「谷口木工」の谷口さんと打ち合わせ	16:30 サンパウロ着 現地関係者と顔合わせ		金網を使って抱擁をしながら憩の園のお年寄りの体を取り型、編む作業を開始
	30 Thu	午前中にモンチアズールと憩の園を訪問し、午後、初めてPIPAを訪問。その後、谷口木工にて打ち合わせ	モンチアズール初日。火災で施設が休業中と知る。再開の目処は不明だが、職員は出勤しており、授業の準備を手伝って過ごす		
	1 Fri	滞在目的のプレゼンと組紐パフォーマンスを行い、興味を持ってもらった。施設長ヒカルド氏と藍染め用の90ℓのパケツなどを買い出し	TURN in BRAZIL現地コーディネーターの高塚さんを介して、モンチアズールのコーディネーターネネッチらに企画の相談。「できないと思う」と率直な意見をもらう		作品コンセプトが固まり、メールにて日比野・事務局に構想を報告 P30
	2 Sat		ポルトガル語が話せず、食べることが最大のコミュニケーションと思い、食べ過ぎで体調不良		
3 Sun					
4 Mon		PIPAでの交流が本格的にスタート。谷口木工に組台の玉のサイズを発注するため、実際に組む紐の長さとお本数を経尺(25mの糸を240本経尺)	カッターで指を切り、10針縫う。PIPAを見学、五十嵐さんからアドバイスをもらう	みんながすでにできることを通して、つまみに興味を持ってもらうことを日比野から提案されていた。陶芸のリーダーと話し、つまみの花の種を制作してもらうと決定	
5 Tue		PIPA内での組台仮設置場所を選定し採寸。玉のサンプルに昨日経尺した240本の糸25mを玉付け(巻きつける)作業	施設が再開し交流がスタート。高塚さんを交えて先生たちと打ち合わせ。中サイズのきりこを分割してつくり、貼り合わせることにする		総介助を必要とする入居者のハセガワさんが参加を決意。彼は車椅子に乗り庭までやってきた
6 Wed		谷口木工に、6日前に発注した組台の試作品の確認へ。前日にPIPAで実験した玉のサンプルも持っていくと、当日中に組み台と玉の試作品が完成			
7 Thu		初めてのWS。総糸を糸玉にするプロセスを行う P40 。谷口木工から組台試作品と玉12個が納品	午前と午後、2つのクラスできりこWS	3週間の成果を見るために、晴天の下につまみの花を並べる P44	園内がTURNプロジェクトと作品の話題でもちきりになる P46

month	date	五十嵐	瀧口	タチ	ジュン
	8 Fri	スタッフミーティングにて、糸に触れることで子供たちに落ち着きや集中力の向上がみられたという報告を受ける	学童保育をしているグループ「ノッサ・シランダ」との共同授業が決定 P50 。きりこ用の和紙を使い、紙を切って楽しむWSを実施	こどものその最終日	参加希望者が増え、作業場所を中庭から集会室へ変更 P52
	9 Sat	藍染めで使う寸胴鍋とガス台をPIPAの倉庫で発見			
	10 Sun	「日本祭り」にPIPA親の会として参加。焼き鳥300kgを焼き続ける。約5万人の集客は、日本がテーマのイベントで南半球最大規模			
	11 Mon	灰汁をつくり、藍染めの準備開始			
	12 Tue	日本から持ってきたすくもを練り灰汁と混ぜ、発酵を待つ(藍建て)	ノッサ・シランダの授業見学		
	13 Wed	藍建て2日目。子供にプレゼントするエプロンの買い出し	午後、ノッサ・シランダから14歳前後の年上の3人を迎えて、きりこWSと紙遊び		編むことが女性的な作業だと考えていた男性が、息子に勧められて作業に参加するようになる
	14 Thu	藍の液で、子供たちの人数分のエプロンと、組紐の糸を染める P60	日本でのきりこの写真、みんなの制作風景などをスクリーンで見てもらった後にWS P56	PIPAへ藍染めWSの見学に行く	9体の彫刻が完成
15 Fri					
16 Sat		PIPAは、ポルトガル語で風を意味すると知る。風のように糸でゆるやかにつながる関係について考える	きりこ補強用のテープなどの買い出し		
	17 Sun			「こどものそのフェスティバル」開催日。つまみを展示するスペースがありWSも行われた	
18 Mon		PIPAの冬休みスタート。PIPAの卒業生ヒロシとケントが、作業を手伝ってくれることになる P62	午前、午後ともきりこWS。利用者は午前午後とも5人ほどになり、職員も交代で休みを取り始める		
19 Tue					
20 Wed		1日中、組紐に使う糸の長さ(25m)とお本数(240本)を揃える「経尺」の作業。夜中までかかる P66	午後はノッサ・シランダと初の共同授業で、障害者5人に子供2人を迎える		
21 Thu		経尺と玉付け作業	1週間かけて1枚のきりこを完成させた人が現れる		
22 Wed		経尺と玉付け作業	職員も、空いている時間に制作に参加してくれるようになる P70		

month	date	プロジェクト全体+日比野	五十嵐	瀧口	タチ	ジュン
7	23 Thu		休みなのにヒカルドが手伝いに来てくれ「経尺をして指先で糸に触れていると心が穏やかで自分と向き合う時間だから好き」と言う			
	24 Fri	羽田空港発	経尺と玉づけと組台セッティング。経尺は、1本の糸を持って25mのPIPAの廊下を行ったり来たりで240本を1束にする。合計すると廊下48km歩いたことになる			
	25 Sat	早朝、サンパウロに到着。PIPAを訪問し、打ち合わせ P74 。夜は、交流プログラムの記録映像をチェックし、現地カメラマンへ修正などを指示	リオの展示で使う実際の組み台をセッティングして、組紐を組んでみるWSの実験と検証をし、日比野にプレゼン			
	26 Sun	憩の圖を訪問し、作品の確認と打ち合わせ P74			日比野とリオでの展示について打ち合わせ ・参加者が作品にテープを追加していくWSを実施 ・作品は天井から吊るさずに支えを入れて自立型にする ・今後、谷口木工が台と支柱をサンパウロで作成し、リオに運送	
	27 Mon	モンチアズールを訪問し、完成したきりこの確認。生徒がきりこを切っている様子も見学する P75 。その後、五十嵐とリオでの展示打ち合わせ	日比野と展示プラン打ち合わせ ・リオでは完成した作品を披露するのではなく、サンパウロでのプロセスを再展開することを共有 ・トラス（骨組み）を覆うものや滑車、重りを入れる升は台と同じ素材(MDF)で制作 ・組紐は、「組む作業が2割、準備8割」。準備の様子が展示で見えるよう考え、作業をWSで展開することも検討	日比野と残りのサンパウロでの活動を確認 ・8/2まできりこの切り出しを行い、それ以降はリオでのワークショップ用テーブルクロスの作成 P76 ・8/3に敷地内のあちこちにきりこを展示し、生徒や親たちにお披露目する会を企画		
	28 Tue	タチのアトリエにて、リオでの展示とWSについての打ち合わせ P75 ・アーティストやコーディネーターが今回のTURNに関わり、「TURNした瞬間」についての言葉を集め、会場の壁に展示することが決定 ・WSそれぞれにスタンプを置き、ブラジルでは馴染みのないスタンプラリー方式を採用 ・2階のきりこ展示では、東日本大震災についての言葉も展示		音楽学校の生徒18人を迎え、合同WS	日比野と、作品の変更点やWSについて決定する ・頭の部分に顔を入れる（巨大人形祭のイメージ） ・しぼりの布を増やし、縫い付けたつまみは一体感をだす ・高さ10cmの円状の台を制作し、そこに作品を置く ・WSは、紐に丸つまみを一つずつ付けていく「さがり」をつくり、作品の顔下部分から床まで、円状に取り付けていく。事前に20本ほどつけておく	
	29 Wed	全体会議にて、作品展示やWSについての打ち合わせ P78	全体会議にて作品展示やWSについて打ち合わせ ・展示スペースに長椅子4本を置く ・組み台の頭上にあるトラスに、糸が巻けるように2センチ刻みで切り込みを入れる ・WSは、経尺、糸巻きなど。角台の使用は1日に数回	全体会議にて作品展示やWSについて打ち合わせ	全体会議にて作品展示やWSについて打ち合わせ ・展示スペースが狭いので、作品だけの設置とし、全体の配置をずらす案を考える ・WSは、糸に丸つまみをつける「下がり」を制作し、作品の頭下部分から、床に向かって取り付けていく	全体会議にて、作品展示方法やWSについて打ち合わせ ・金網の作品9体を丸い台に置く ・型となった人の顔写真、以前の職業などを提示で入れる ・WSは、作品に使用しているテープを好きな長さに切り、作品に差し込んでもらう
30	Thu	日比野、スタンプラリー原稿制作 P80				
31	Web	きりこ展示について、瀧口と打ち合わせ。4施設の交流映像を細かくチェックし、現地カメラマンのラファエルさんに修正点を伝える		2階の展示方法について、日比野と打ち合わせ ・2階のきりこ展示方法について、棚の形状を変更し、神棚のような神聖さを再現する工夫をする ・立体の展示方法を検討。箱をつくり、砂鉄と粘土で固定する。穴を開けたL字型の板を取り付け、斜めに棒を通す ・2階手摺りなどに、大きりこや言葉などを吊り下げる提案 ・WSは、小きりこや鯛飾りをつくり持ち帰ってもらう ・2階に吊り下げ展示するための大きりこ15枚を、モンチアズールにて追加制作する		

month	date	プロジェクト全体+日比野	五十嵐	瀧口	タチ	ジュン
8	1 Mon	谷口木工に、五十嵐の展示以外の什器も発注し、ミリ単位の打ち合わせ。ほかにも使用する台座や展示台、物置台なども相談。また、リオでの展示、スタンプラリーのカードについて、事務局で打ち合わせ	谷口さんにプレゼンし、組み台の最終調整	夏休みが終了し、午前4クラス、午後4クラスの授業が再開		
	2 Tue	リオでの展示、WS、スケジュールを事務局内で確認 •WS終了については、流れを見ながら各アーティストが決める •スタッフはシフト制で、常時5〜7人。ローテーションですべてのWSのサポートができるようにする •ネームプレートは、TURN独自のものを作成(アーティスト、ファシリテーター、WSアシスタント) •来場者の繁忙期やそうでない時期を想定して、それぞれのパターンを再検討	親の会に参加し、PIPAで過ごした1ヵ月で学んだことを伝える	週に2回の空手の授業が始まり、空手をやらない人たちと一緒にきりこをつくり始める。南三陸の神主のみなさんに、リオの展示用に御幣束を送ってもらえないか依頼の電話		
	3 Wed	きりこフェスタに設営から参加 P82	冬休みが明け、久しぶりに大勢でランニング。PIPAを支援しているJAICAに、PIPAから学んだことを伝える	「きりこフェスタ」を開催。東北のきりこのストーリーの紹介、リオへ持っていくことなどを正式に紹介する		
	4 Thu	PIPAにて朝のランニング、WSに参加する。そのあと、タチのアトリエにて作品の確認	冬休み前に藍染めしたエプロンを、一人ひとりに手渡し、記念撮影 P84	これまで参加したことのない利用者がきりこづくりに参加。また、モンチアズールコミュニティの寄り合いでWSを実施	日比野と作品を確認しながら、展示について打ち合わせ •さがり(最大60本)と花(最大10本)の2種類をつくる •さがり作成時に下に敷く板を作成(120cm×30cmを6枚) •板ごと移動させ、一晚、糊を乾燥させる •1WS1時間とし、制作する花びらの数は自由にする	
	5 Fri	リオデジャネイロに移動し、TOKYO2020ジャパンハウスの各ブース展示を調査。「マラカナン競技場」にて、オリンピック開会式を視察・調査	余った藍で自分用に白いシャツを藍染め			
	6 Sat	現地にて展示について最終調整。施工チームと打合せ。サンパウロに戻る				
	7 Sun	瀧口と打ち合わせ		日比野と打ち合わせ		
	8 Mon	サンパウロのジャパン・ハウス建築現場訪問。美術館ビナコテッカ見学。事務局長の平田・アンジェラ・多美子氏の仮オフィスにて、カンファレンス打ち合わせ。夜は、交流映像の確認			こどものその最終日	
	9 Tue	在サンパウロ日本国総領事館にて、各アーティストが活動を報告。ラファエル氏が作成した映像と組紐、きりこを持参。各アーティストの「ことば」を展示する構想をはじめて対外的に話す。各アーティストと打ち合わせ				
	10 Wed	交流映像の最終確認。再度修正が入る。リオ会場の外壁に飾るきりこの枚数が不足していることが分かり、昨日、柳澤領事に渡したきりこを受け取りに行く				
	11 Thu	完成映像をチェック	ヒカルドと交流をふりかえり作品タイトルを決める			
	12 Fri	リオデジャネイロに移動。早速、パソ・インペリアルで展示準備開始	PIPA最終日。子供たちのカラフルな手形が押された紙をプレゼントされる	モンチアズール最終日 P86 リオで2、3階部分に展示するきりこは、天蚕糸と両面テープにて固定、結束バンドははみ出した部分を切る想定		WSは、1人1本、好きな長さにテープを切ってもらい、編む前に簡単な説明を行うことにする
	13 Sat	会場に展示する、各アーティストのことばの選定作業を行う				
	14 Sun	会場に展示する、各アーティストのことばに関する作業 •建物正面以外から入ってくる来場者を想定して、カットイングシートサイン追加 •スタンプラリーシートを両サイドに設置	リオ到着後、組み台の最終設置			

month	date	プロジェクト全体+日比野	五十嵐	瀧口	タチ	ジュン
8	15 Mon	アーティストら4人と関係者でスケジュール確認。会場に展示する、各アーティストのことはに関する作業。TURN入口の導入部分を制作	一度設置した組み台をばらし、深夜にニス塗り。La Manoに追加でお願いしていた糸が日本から届く	カンファレンスルームにきりこ台を設置。きりこの数を確認し、バルコニー分はぎりぎり		
	16 Tue	会場設営		不足分のきりこ制作。会場建物外周のきりこを深夜に調整		
	17 Wed	会場設営 P110 。日比野、4人のアーティストたちが地元テレビ局の取材を受ける。現地スタッフ(TURN現地ディレクター2人、現地アシスタント5人)に向けた、各作家によるワークショップレクチャーを実施。各30人程度を予定していたが、空気感を伝えたり実際にワークショップを体験してもらい、7時間かかった	WSレクチャーにて「上手く、また早くやるのが大事なのではなく、じっくり焦らずにやるのが大事」「2人や3人でやる作業の時に、ほかの人のリズムを考えつつ、相手と向き合いながらやる」というポイントを話す	フォトスポット用のきりこが足りないので、きりこを作成。外周きりこについて最終調整		WSレクチャーにて「かたちよりも、どう向き合うかが大事」と強調。参加者には、「どのようにそれぞれの人をテープで包みこみたいか、どうすると良くなるか」を考えながら、好きな長さのテープを切り、差し込んでもらう
	18 Thu	TURN in BRAZIL開幕(9/7まで) 開幕まで、基本的に、日比野、アーティスト、アーツカウンシル東京メンバー、運営統括とともに朝ミーティングを実施。ときおり、現地スタッフも参加 ・開館前、200人以上の行列。18時入場締切で2,815人入場 ・スタンプをもらうことに集中し、WSの意図が伝わらない来場者が多数 ・作家は、過程や思いを伝えたいが、WSをするに追われてしまう 駐ブラジル日本国大使および在リオデジャネイロ日本国総領事来館	みんなが糸に触れながら巻いていく経験ができるよう、糸巻きの過程を増やすことに。総糸を持つ人、糸を出す人、巻く人に加え、糸を中間地点でパスしていく人を増加。10〜25人が輪になって、ひとつの総糸巻きを行う。「待つて」「回して」という五十嵐によるポルトガル語による掛け声も、自然と隣の人に伝言するかたちになった	参加希望の列ができる鯛のきりこを、4人同時に制作するWSを実施。どのように切れば良いのか戸惑う人も多かったが、子供から大人まで約15分かかりながら集中して切っていた。切り方がわからない場合は、見本を見せるか、手伝うかのどちらかを行った		1日で500人ものWSに対応
19	Fri	スタンプラリーとWSとは別にして、スタンプは出口に設置し無人で対応。スタッフは、なるべく毎回同じスタッフがつくようにして試してみる ・開場前は、100人程度の行列。来場5,208人 ・入場を待つ人には、TURNの意味などを説明して理解を促してから入場してもらう ・日本テレビの取材あり。日比野のインタビュー撮り、ほかはWS内容を撮影	30人ほどの大糸巻きWSを複数回実施。糸玉を隣の人に回していき、複数の人で玉を巻くパターンや、糸出しの人と糸をパスしていく人が入れ替わりながら行うパターンなど。約30分に及ぶ糸巻きWSで、途中で抜ける人は少なく、みんなが最後の玉を見届けている。五十嵐が場を離れる際は、現地スタッフが映像を使って約10分に及ぶ企画説明		日比野から「WSをこなすことに集中することを避け、一人ひとりに時間を割く」「大きなつまみを30人でつくるなどのWSをやってみてはどうか?」と提案を受ける	WS材料が不足し、発注
20	Sat	小池百合子都知事が来場。開館前、300人強の行列。一気に200人を会場に入れ、なかで回遊してもらうようにする。WSの回数を増やした ・来場者6,937人	角台の組紐が4〜5m伸長	鯛のきりこの棒が不足し、発注	日比野が「〔教える／教えられるという関係が固定し、技術のやりとりを行う〕工作教室を脱するため、来週以降調整が必要だ」と指摘	
21	Sun	アンケートは、回答されたものを、壁に毎日貼り足していくように指示を行う。来週から、非常に少ない来場者が予想されるので、集客も具体的に考える。少人数ならではのWSも現場で実施することを検討。バン・インベリアル館長クラウド氏が会場を訪れ、NHKのインタビュー撮影。「TURNについてどう思ったか?」という質問に対して、「とても洗練されている良い企画」という内容をポルトガル語で語る ・来場者3,638人	目が不自由な2人組と糸巻きWSを実施。糸に触れながら参加できるため、とても喜んでくれる P130 。 日比野から、「来場者が少なくなることを想定し、組み方の色々なパターンを本日実験しておいたほうが良い」と提案。2人組か4人組で行っていたが、8人組にトライして、ひとり一本を担当する。結果、人が増える分互いに口を出したり、手伝ったりとコミュニケーションが生まれる			
22	Mon	休館日				
23	Tue	開場前の行列はなし。スタンプラリーの増刷金額合わず、一旦終了 P131 。カンファレンスの打ち合わせをして、NHKBSの取材を受ける ・来場者1,018人				
24	Wed	オリンピックが閉会直後で、これまでで最も少ない来場者。 スチールカメラと映像カメラの撮影状況について確認。どのようなカットを撮ってほしいか、日比野から直接指示 ・来場者1,234人	角台周りに椅子を置き来場者が休憩したり、ゆっくりと場を過ごすようにするために、長椅子を映像前に囲むように配置し、団欒を可能にした			あらかじめ切られたテープが用意されていたが、来場者一人ひとりに向けて切るような当初のやり方に戻す。その後、来場者の身体の部分(頭の周囲、腕の長さ)に合わせて切り、「身体の一部を作品に編み込む」というコンセプトが完成
25	Thu	オープン時の来場者は10人。スチール、映像ともに日比野により方向性を確認。在サンパウロ日本国総領事が来場 ・来場者1,375人		勤務先の学校でもきりこをやりたいという先生が現れる		
26	Fri	前日同様、10人の来場者でスタート ・来場者1,599人				

month	date	プロジェクト全体+日比野	五十嵐・瀧口・タチ・ジュン
9	27 Sat	カンファレンス初日。週末につき、2,960 人の来場者	PIPAのケントが、家族と一緒に来場（五十嵐） P133
	28 Sun	カンファレンス2日目。 日比野を交えたミーティング最終日。「今後もミーティングは毎日実施し、スタッフの意見も取り入れ、アーティストだけではなく全員とつくり上げて行く展覧会だ」と強調 ・来場者 2,635 人	
	29 Mon	休館日。日比野帰国	
	30 Tue	スタッフは、気になった来場者を見つけたら、WSが終わったところで感想を聞くようにする。集客が芳しくなく、対策を考える ・来場者 907 人	ミーティングで、「事務局含めて、この場にいる全員がTURNしなくてはおもしろくないのではないか」と意見を出す（五十嵐）
	31 Wed	朝ミーティングでは、各スタッフの声を具体的に聞く。アーティストもスタッフも、ほかのWSに参加してみるように調整 ・来場者 562 人	
	1 Thu	・来場者 1,112 人	常連のヘナトが1日2回来るようになる（瀧口） P134
	2 Fri	不足していたスタンプ台紙が到着 ・来場者 939 人	組紐作品重量は、作品自体は26kg程度。容積も90cm×60cm×60cm程度（五十嵐）
	3 Sat	サンパウロのジャパン・ハウスのキュレーター、マルチェロ・ダントス氏来館。来年秋頃にプエノスアイレスで開催予定の現代アートビエンナーレ『BIENALSUR』について説明を受ける。総合ディレクター、アニバル・ホサミ氏が、TURNや日比野に非常に関心をいだいているとのこと。 日本のオリンピック組織委員会の方や、オリンピック・パラリンピックの技術スタッフマネージャーとして雇用されているマレーシア人など、オリンピック関係者が多数来場し、スタッフ5人で対応するのは困難 ・来場者 1,994 人	
	4 Sun	来場者1,400人超。最近 スタンプラリーのはげがあまり良くなかったので、積極的に配ってみる。映像撮影、写真撮影実施 ・来場者 1,428 人	
	5 Mon	休館日	
	6 Tue	山本隆副知事が来場し、それぞれのワークショップを体験。 パソ・インペリアル館長クラウディア氏来館 ・来場者 1,036 人	五十嵐が瀧口・タチ・ジュンのWSに参加 瀧口・タチが五十嵐のWSに参加
	7 Wed	TURN in BRAZIL 最終日 （独立記念日、パラリンピック開会式） 日比野から電話があり、各アーティストにメッセージ。開場前に50人の行列。来場者 2,700 人	リオデジャネイロ発（五十嵐・瀧口）
	8 Thu	終日撤去作業	東京着（五十嵐・瀧口） 龍工房とLa Manoに帰国報告電話（五十嵐）
	9 Fri	11:00 撤去完了	

6月17日-23日

トークシリーズ 『私があなたにTURNする 7日間』開催

ブラジルでの展開に先駆け、監修者である日比野克彦が、1週間にわたって多彩なゲストと共にトークセッションを開催。障害、福祉、移民、震災、文化、創造、オリンピックをキーワードにTURNならではの多様な視点から、対話を通じて思考を深めた。

日程:2016年6月17日(金)–23日(木)

時間:19:00–21:00

会場:アーツカウンシル東京 ROOM302(アーツ千代田3331)

参加費:無料



❶ ×日比野和雅
(NHKブラネット近畿エグゼクティブプロデューサー)
テーマ:「バリアフリーバラエティ」から考える
障害とイメージ

❷ ×ドミニク・チェン
(情報学研究者、IT起業家、
『シンギュラリティ:人工知能から超知能へ』翻訳者)
テーマ:「情報科学」から考える人間の可能性

❸ ×小貫大輔(東海大学教養学部国際学科教授)
テーマ:「学びの場」から考える固有性と多様性

❹ ×アンジェロ・イシ
(武蔵大学社会学部メディア社会学科教授)
テーマ:「メディア社会学」から考える当事者性

❺ ×西川勝(臨床哲学者)
テーマ:「臨床哲学」から考える対話のあり方

❻ ×太下義之
(三菱UFJリサーチ&コンサルティング芸術・
文化政策センター主席研究員/センター長)
テーマ:「TURN」から考える文化プログラム論

❼ ×五十嵐靖晃×瀧口幸恵
(ともにTURN in BRAZILに参加)
テーマ:「ブラジル」でTURNする



ブラジルの旅を終えて

TURN in BRAZIL 帰国報告

地球の裏側でTURNする

Text | 畑まりあ (アーツカウンシル東京)

文化庁主催『ここから—アート・デザイン・障害を考える3日間—』展の連携事業として、TURN in BRAZILの帰国報告を実施。ブラジルで展開した交流プログラムや展覧会の成果を映像などを通して紹介するとともに、アート、福祉の実践者をゲストに迎え、プロジェクトメンバーが語り合った。

日程：2016年10月21日(金)－23日(日) 全6回

会場：国立新美術館 企画展示室2E『TURN in BRAZIL』展示室内

参加費：無料

※各回のファシリテーターは、日比野克彦、森司(アーツカウンシル東京リーディングプロジェクトディレクター)、奥山理子(アーツカウンシル東京TURNコーディネーター、みずのき美術館キュレーター)いずれかが務めた。

1 レポート：TURN in BRAZIL

日比野克彦／五十嵐靖晃／瀧口幸恵
畑まりあ

日比野克彦、五十嵐靖晃、瀧口幸恵、畑まりあが、それぞれの立場からブラジルでの体験を語った。

言葉が通じず、負荷が大きかったサンパウロでの交流プログラム。最初から好意的に受け入れられていたわけではなかった瀧口は、周囲との関係において転換点を経ながら、進んでいった。きりこを切ることが日常になるなか、紙の感触を確かめる人、個性的なテープの張り方など、それぞれの向き合い方を通して、一人ひとりの多様な在り方と感受性に出会う。五十嵐は、毎日一緒に走ることで少しずつ関係性が変わること気づいた。また、施設の子供たちと糸の先で互いの心の機微を確認しあうなかで、扱う素材の特性やモノと人の性質に共通項を見出す。日々施設に通うことで、時間と場を共有し、自身の時間を押し付けるのではなく、相手のリズムを取り込むという相互作用を通してつながりが生み出されていった。

また、リオデジャネイロの会場では、ブラジルの人の新しいものを受け入れようとする寛容なマインドにも出会った。

完成形をつくるのではなく、互いに影響を受け、変化の過程を繰り返しながら、TURNとは何かを探求していく。真っ白な状態から、現地で組み立てる。そうした「プロセス」を通して少しずつ豊かになったことをふりかえった。

2 AutistaとArtista ～自閉症児療育施設「PIPA」で糸と向き合う～

高野賢二(クラフト工房 La Mano 施設長)
五十嵐靖晃

ブラジルでの江戸組紐制作にあたり木綿の糸を提供した「クラフト工房La Mano」(以下、La Mano)の施設長・高野賢二と五十嵐が対談。

ブラジルに赴く前の年より、交流してきた五十嵐とLa Mano。五十嵐は、微細な変化に気づきながら一人ひとりに接する高野のふるまいに影響を受け、人との過ごし方を示唆するパスポートのようなものを携えるに至った。

五十嵐は、身体的にみんなと共有するための手がかりとして、藍染という糸をつくるプロセスをPIPAで行った。La Manoでの活動の仕方と共通する、好きなことや得意なことから作業の役割分担が自然と生まれていく状況にも出会う。

五十嵐は、「Autista(自閉症)だからArtista(アーティスト)なのかもね」とPIPAの施設長にふと言われたことをふりかえる。以前、「自閉症の傾向がある」と高野に言われたことと重なった。また、PIPAに通うケントに糸巻きをしてもらうと、La Manoのある利用者と同じ「ダイヤ型」ができたエピソードが語られた。

対談の後半部では、La Mano とPIPA双方の活動から学び合い、ともに成長していくことができる可能性について言及した。また、普段何気なく行ってるものづくりの一つひとつの所作が、「対話」としても自然と成り立っているのではないかと意見し合う。そして五十嵐がPIPAで考えた、ものごとに対して、身の捉え方が変わることで一人ひとりの世界も変わるということをつりかえりながら、固定観念や自身のルールを押し通すのではなく、むしろ「チャンネルを合わせていく」という姿勢が、学びや新たな状況を生み出していく可能性について語られた。

3 参加と共有 ～伝統工芸に集まった新しい人々～

太下義之(三菱UFJリサーチ&コンサルティング芸術・文化センター主席研究員／センター長)
西山マルセーロ(竹中大工道具館主任研究員)
James Jack(TURN 参加アーティスト)

リオデジャネイロでのカンファレンス(P144参照)でTURNと日本の伝統文化との共通性について言及した太下義之氏、伝統のものづくりに造詣が深い西山マルセーロ氏、人や状況との関係を作品化し、また人との協働を通して、想像する領域の拡張を試みるJames Jack(ジェームズ・ジャック)氏とともに、伝統工芸とアートの営みの親和性について語った。

今回、4人の交流の前提となった伝統工芸とは、常にそれまでのスタイル、様式、格式といったものを超えようとするものから生まれてきたプロセスがあると西山氏が指摘。「破格」という言葉が示すように、一つの格付けがつくられると、いつの時代にもそれを超えようとする動きが起こってきた。生み出された当初は必ずしも認められていたものとは限らない。アヴァンギャルドな存在から、複数の人による模倣・継承を通して、伝統へとつながっていく。また、伝統的な技術をもつ人たちが、綿密な技術や手間プロセスを通してモノをつくっていくのに対し、アーティストも手間の部分を蓄積していきながら作品をつくる。Jack氏自身も、作品をつくるにあたり地域に入っていく際に、必ず地元の話聞くことから始めるという。

役に立つかわからないプロセスを遂行しながら、一つひとつの出来事と向き合おうとするアーティストの姿は、伝統工芸に携わる人の姿とも重なることではないか。伝統工芸やアートおよびアーティストへのまなざしの交差点について、異なるフィールドで活動する専門家とともに語り合った。

4 余白と未完 ～異なる他者との過ごし方～

佐藤慎也(日本大学教授・建築家)
福森伸(知的障害者支援施設しょうぶ学園統括施設長／工房しょうぶ主宰)
日比野克彦

TURNにおいて重要な、他者と「過ごす場所」と「過ごし方」について、新しい福祉施設のあり方を試みる福森伸氏と、芸術文化施設とアートの新たな関係の構築について研究する佐藤慎也氏と、日比野克彦とともに考察。

佐藤氏はまず、美術館という建築の歴史的な変遷を、第1世代から第3世代に分けて解説。その上で、第4世代となるような動向に言及。「人が入って何か活動をする事」をもとに、場所の設計を思考することで、美術館の新しいかたちを考えられないかということ投げかけた。福森氏は、しょうぶ学園の風景写真とともに朗読を披露。障害者にとっての「普通」と、多数派である健常者にとっての「普通」は誰が決めるのか。ノーマライゼーションの意味を問い直したいと投げかけた。

そして、日比野は、福森氏が鷺田清一氏の著書から引用した「メソッド」と「ランドネ」において、TURNはランドネのような性質があるのではないかと言及。目的地に向かって最短距離を取る方法を示唆する「メソッド」に対し、風景と折り合いをつけながら、ときに、その風景の襞のなかに紛れ込んだり、森を迂回したり、別の道に通じたりして、うねうね進んでいく「ランドネ」の姿にTURNを重ね合わせた。

5 小さなまちと福祉施設 ～地域に寄り添う、人に寄り添うアートプロジェクト～

芹沢高志(P3art and environment統括ディレクター)
山野真吾(黄金町バザールディレクター)
吉本光宏(ニッセイ基礎研究所研究理事)

アーティストの関わりによって地域の新たな価値を見出すアートプロジェクトを推進してきた芹沢高志氏と山野真悟氏、吉本光宏氏とともに、持続可能性があり、ミクロな単位で生活のなかに必要なものとしてあり得るプロジェクトの在り方を検証。

吉本氏は、TURNを含めたアートプロジェクトを「芸術文化のインパクト拡張モデル」「創造産業の同心円モデル」「ロジック・モデル」「芸術の自律×手段モデル」「TURNモデル BRAZIL」として図解で説明。芹沢氏は、アートプロジェクトは、「原因と結果」ではなく「挑戦と応答」を地域社会に投げかけ続けているのではないだろうかと考察。山野氏は、これまでのアートプロジェクトの実践をふりかえりながら、NPOを介さずに、アーティストが自主的に活動を始めるケースも増えているという今日の動向に言及した。

日比野を交えたクロストークでは、「プロジェクト型」の意味、プロセス型の開示方法や記録の仕方など、それぞれの実践を踏まえて語った。また日比野は、1970年代から今日に至るまでの社会とアートシーンおよびアートプロジェクトの変遷を見ながら、TURNの位置付け方を考察していく必要性を投げかけた。

6 クロージングトーク：言葉にする、言葉に残す

日比野克彦
奥山理子

2014年、障害者支援施設に日比野がショートステイする体験から始まったTURNは、TURN in BRAZILを経験し、さらなる展開の可能性を見出した。日比野と奥山が、帰国報告会の総括として、「これまでのTURNとこれからのTURN」について考えた。

トークは、来場者の方々、登壇者、参加アーティストの五十嵐とともに糸巻きをしながら開始。伝統的な技術や言語を通してコミュニケーションを行うことが不自由であったことなどプロジェクトのキーとなった側面について話しながら、ブラジルへ赴く前後の実感について語り合った。

サンパウロでは、アーティストが1対1で障害を持っている人たちと、非常に丁寧な時間を持った。帰国後の気づきの一つとしてあげられるのは、さまざまな「交流」の在り方があるということ。そこには「交流」という一言では描くことができない情景が生まれていた。

また、社会の不都合があるからこそ、それぞれの人間力が試され、ある種の寛容性としなやかさを兼ね備えるブラジルの人たちからの学びもあった。日本での福祉を巡る昨今の状況にも言及しながら、今後のTURNにおいて、障害者だけでなく異なる背景を持つすべての人とTURNを行うことができるという前提を共有。まだ気づいていない障害や障壁に意識的に出会っていくという、プロセスの意義と抱負を改めて語り合った。

不自由の先にある可能性

Text | 五十嵐靖晃

TURN in BRAZILは新しい旅の手法であり、人との、そして自分自身との新たな出会い方だった。

旅では人は弱者となる。自分のことなど誰も知らない不慣れな環境に身を置くからだ。これは、普段の役割から離れ自由になり、ある意味で裸になることとも言える。そして、より遠くへと旅をするとき、人は不自由なコミュニケーションを強いられる。たとえるならば、言葉が通じないということは、使い慣れたコミュニケーション方法から離れ、ほかの感覚を開いて、より本能的な部分で他者と向き合うこととも言える。

今回の旅では、そこに“技法と素材を手に入れた福祉施設と交流する”という要素が加わる。私は日本の『龍工房』で組紐の研修を受け、『La Mano』で藍染した糸を持って、ブラジルの自閉症児療育施設『PIPA』へと旅立った。現地では、“技法と素材”はコミュニケーションにおける“プロセスとメディア”として、それぞれの機能を果たした。

全74日間のブラジル滞在は、サンパウロに47日、リオに27日。まずは、サンパウロのPIPAでの時間をふりかえる。33人の自閉症児は言葉でコミュニケーションすることができない。そして、私はポルトガル語を話すことができない。それがスタートラインだった。

それでも何かを交換したくて、使い慣れた「言葉」を捨て、“仕込み八割、組み二割”と学んだ組紐の仕込みの工程を協働しながら、つまんだ「糸」の向こうに心の存在を感じようとしていた。今思えば、そこでのすべきこととふるまひは、龍工房とLa Manoから、しっかりと学んでいたため、現場で迷わず前

に進むことができた。

PIPAでは、無言で糸を頼りに人と出会い、心のあり方を純粹に問われる時間だった。言い訳も説明も通じない子供たちに試されたのは自分自身の人間力だった。

TURN in BRAZILで紡ぎ出された「ことば」は、そんな現場から生まれたものだ。身体的経験の最中に起きた、自分のなかでの気づきである。いわば、自身がTURNした瞬間に見出した“まなざし”そのものである。あるときは、絡んだ糸を何時間も解いていた夜の瞬間。あるときは、子供たちと走っていた朝の瞬間。

私は毎日、黙々と糸と向き合うことで、指に伝わる糸の質感から湿度の変化を感じるようになった。自閉症の彼らと共に過ごすことで場に交わっていく空気感を読み取るようになった。彼らの表情や行動をよく観察することで、昨日と今日のちょっとした心境の変化に気がつくようになった。

これらの発見は、普段通りに言葉を交わして何不自由なく情報交換することができていたら、きっと見落としていた。不自由だからこそ見出したものである。この小さな気づきの積み重ねがTURNのことばへとつながっていく。そして、同じ経験をして、そこから見出すものは一人ひとり違うはずである。

ゆえにTURNというプロジェクトにおいて最も重要なことは、その気づきを自分で見つけることにあり、私は思う。今度は、あなた自身がTURNしてみるということだ。その挑戦こそがリオデジャネイロで開催した参加型展覧会『TURN in RIO』であった。

18日間にわたる展覧会の来場者は、延べ40,134人。うちワークショップ参加者はのべ14,591人。ときに1日のべ1,600人を超えて入場規制がかかるほどで、毎日通う人がいて、涙を流し感動する人もいた。

それらの理由は、ブラジル人は「わからないことを怖がらない」という点にあると思う。頭で理解する前にまずはやってみて感じてみる。それがさまざまな人種を受け入れてきた、この多様性国家のやり方なのだろう。日本人はその逆で「わからない」ことを怖がり、やって感じてみる前に頭で理解しようとする。日本でのTURNにあったいわゆる「福祉」や「障害とアート」といったイメージは、ブラジルにはなかった。

ブラジルでTURNが受け入れられたもう一つの理由は、日本文化に対するリスペクトがあるということ。これは約100年前にブラジルに渡った日本人の先輩たちが築いてきた功績にほかならないのだが、そこにあるTURNの特徴である「ズレや歪みを愛する美意識」「参加型で完成させず余白を残す空間づくり」は、古来より続く日本特有の美意識そのものとも言える。これはTURNを国外に出してみないと見えてこなかったことだ。

こうして、日本とブラジル、2ヵ国で開催したことでTURNの機能の仕方の違いが見えてきた。リオの展覧会場では、ある種、無秩序にその空間を楽しむブラジル人に対して、4つの参加型作品は一時的に秩序をつくり出していた。ブラジル社会を象徴するような、自然と無秩序になる状況に対して、ちょっとした秩序を組み込むことで機能を果たしたのだ。日本でやったらかうはならないだろう。秩序的な社会である日本でTURN

を機能させるならば、むしろもっと無秩序的な仕組みが必要なのだろうと思う。そう考えると、開催する国によって、その役割やバランスは変わると考える。

TURNの役割は国によって違う。TURNの仕方は一人ひとり違う。人の数だけTURNはある。

最後にTURN in BRAZILを通して、わたしがTURNしたときの「ことば」を以下に記す。

「人の心は変化する。人の数だけ世界があるのではなく、人の心の数だけ世界がある。心が変わることで、世界の捉え方が変わり、そして世界も変わっていくのだろう。今日、自分が捉えるこの世界は少し変わったような気がした」。

アートの可能性は、人の心の可能性である。それは、同時にこの世界の可能性でもある。TURNは、その可能性を日本特有の美意識をベースに引き出すことができる日本発信の概念だと考える。

今、豊かさをを感じる

Text | 瀧口幸恵

約4ヵ月の「きりこ」との旅を終えた。この一夏でいったいどれほどの人たちと出会ったのだろうか。

東北。ここで受け取ったのは、きりこの知識や技術だけでなく、その土地に生きることを決めた人の想いの集積だった。長い歴史のなかで津波や飢饉に幾度となく襲われ、築いてきたものがすべてなくなってしまう経験をしてきた土地で、どんなことがあっても繰り返しつくり続けてきたきりこには、幸せや平和を願う強い想いが毎年重なっている。神職が代々守ってきた“いつの時代も変わらない大切なもの”の象徴的存在を、わたしに伝えるのはさぞ勇気のいる決断だったろう。許可を得てからも、戸惑う神職の方々の姿を忘れられない。

それでも実現できたのは、日比野さんが示した「オリンピック・パラリンピックの地でわたしたちのきりこを世界中の人々に見てもらう」という夢があったからだ。TURNという新しい共通概念のなかで、つながらなかったものがつながって、見えなかったものが見えて、外れなかったものが解けた。祭りの後にはもと通りになっているように見えるけれど、確かにその夢はあって、前とは違う世界が生まれている。私が南三陸に通えるようになったのがその証拠だ。

モンチアズール。子供たちの笑い声が響き渡る広場。小人のようなサイズの食堂のお姉さんが人々をうまくすり抜けて食堂と教室をいったりきたりしている。刺青いっぱいのお兄ちゃんが近所の老人と世間話をしている。利用者のパウロがみんなに声をかける「パッパイ、シェゴ―！ ヒーヒッヒッヒッヒ」(パウロ、シェゴ―…パウロが来たよと言いたいようだ)。子供たちは笑いながら

答える「パッパイ、シェゴ―！」そして彼に近づいてそっと握手して、キスをする。その様子を見て、私も真似をする。独特の三拍子を体に宿すレアンドロという利用者の男の子がいた。天気の良いある日、彼の三拍子に合わせて隣を歩いてみた。すると突然こちらをくると向き、手にキスをくれた。これまでわたしを認識した素振りを見せたことがなかったが、その日以来レアンドロと視線を交わせるようになる。この感覚は何だろう。同じスピードで歩く、同じリズムで食べる、同じように握り返す、一人ひとりとそんな風に過ごすだけで、お互いのことをすごく近くに感じるようになった。別に互いを理解し合ったわけじゃない。ただ相手のふるまいを愛おしく思い、自分ももっと楽に、好きに、動けるようになったのだ。

リオですっかり友達になったヘナトという紳士がいる。彼がある日彼氏を連れてきた。「え、彼氏ってその…」あまりにも自然な紹介に動揺した。その翌日、今度は女の子と3人でやってきた。なんと彼氏の前妻との間の娘だという。そして次の週末は、彼氏の娘の彼氏も一緒だった。ちょうど日本では一橋大学の学生が同性愛者であることをバラされたことを苦に自殺した事件が話題になっていた頃。最初は戸惑ったが、すぐにヘナトたちの立ちふるまいをなんて自然で気持ち良い姿なんだろうと思った。

「自分が自然体でいると、無意識に他人を受け入れていると同時に、他人からも受け入れられている。人の価値を測る基準を明確にしようとこだわっているうちは、自然体という身体を得

ることはできない」。

滞在中に浮かんだ「ことば」だ。互いが自然体でいると、比較する必要も、排除する必要も一切ない。ものさしはあればあるほど豊かになる。そうブラジルの景色が教えてくれた。

私にとってTURNは、東北では夢が関係性を再構築することであり、ブラジルでは自然体である個人が起こしていく日常の営みだった。一度人がつくったシステムによって見えにくくなってしまった一人ひとりにも、TURNによって、また出会えるのかもしれない。きりこの旅で出会えた一人ひとりの存在が私の一部になっていることを、今、確かに感じている。

新たな花盛り

Text | タチアナ・ポロ・ツボウチ

初めて日本を訪れたのは2001年のことで、祖父の故郷である石川県人会の奨学生として来日しました。私は加賀友禅染の奨学生で、鶴見保次先生とその息子さんに師事しました。

このときの経験は、私の人生のなかでも非常に強く印象に残るもので、また日本に戻り、その文化と美を目にしたいとずっと願っていました。

私は、1998年から布でできた手製の作品をつくっています。2002年からは、作品にあえて友禅や絞りを取り入れています。毎年粘り強く続けてきた取り組みがTURNプロジェクトに関わるきっかけとなったのだと思います。「粘り強く」という言葉を使いましたが、ブラジルのような国で手工芸や芸術で生きていくには、愛と勇気が必要なのです。こうしたことに対しては、近年まであまり価値を認めてもらえなかったから。

2016年5月8日、抑えきれぬ喜びを胸に、私は再び日本に戻ってきました。今回は、江戸つまみを習い、それを「こどものその」のみなさんと分かち合って作品にするためです。

1ヵ月余りの間、私は江戸つまみのエッセンスと基本的な技術を一生懸命覚えました。あっという間に過ぎ去ったこの期間、日本は以前と変わったように思いましたが、だからといってその魅力やインスピレーションの源が少なくなったというわけではありません。

6月13日、寒く、冬の日差しが強い日に、私はサンパウロのこどものそのに到着しました。施設には、1958年の創立当時のように大勢の子供はいません。現在、施設は男女別に分かれており、必要とする支援のレベルはさまざま。それぞれの適

応性に応じてある程度の自立ができるように、さらにちょっとした家事に協力できるように、日常的な活動を行います。こうした状況にある方々と近しく接するのは、私にとっては初めての体験でした。

初日、男性は、好奇心のある数人が私に近づいて頬にキスをしようしたり(ブラジルでは普通の行為)、抱擁して挨拶しようとしていました。初めのうちは、やや怯えてしまいましたが、やがて慣れました。そのあと、女性の施設に向かいました。そこは、緑に囲まれたたいへんすばらしい施設でした。大きな仏壇があり、私は毎日ここで仏様に感謝し、この家で過ごす許しを乞い、みなさんとできるだけよいかたちで協力し合えるよう祈りました。

大食堂での昼食では、不信そうに私のことを見る人、微笑んでいる人、まったく興味を示さない人がいました。食後の休憩時間には園内を見て回り、作業をする部屋を見に行きました。そのとき、ここは小学校のようだけれども、子供の代わりに大人が生徒をやっているようなところだと感じました。人形を抱っこして部屋の隅にいる人や、子供っぽい柄の毛布の下に隠れている人もいました。その日から、早速数人の園生が楽しそうに部屋にやってきて「つまみ」がどんなものか見にきました。

少しずつ、私はみなさんにとって、また、みなさんが私にとって、日常の一部となっていきました。つまみをやってみたいと関心を持った人たちですぐに小さなグループができました。参加しなかった人たちは、部屋で何をやっているのか見にきたり、自分も小さな花をつくってもいいかと聞いてきたりしました。手作業が得意な人が来たり、昔から施設で行われている

陶芸のアトリエに通っている人たちもやってきました。私が子供の頃、祖母の家で見た陶器とよく似たものが、ここでつくられていると知ったときの驚きといたらありません。人生とは、ほんとうにおもしろいものです！

最初のうちは、日本で使われている伝統的な素材を使って、小さな布きれを折ってできるだけ本物に近いものをつくろうとしました。「もしかしたら、みなさんのご先祖様のものを再利用しているかもしれませんね」。そう声をかけてみると、その場の集中力がぐっと高まったのがわかりました。ほかの人のお手伝いをする人もいました。そうやって毎日おしゃべりをし、布を折ったりしながら、いつのまにかそれぞれが自分の話をしたり、冗談を言い合ったり、歌を歌ったり、お祈りもともにするようになりました。私たちはみんなで一緒に、子供のように楽しい時間を過ごしたのです。

しかし、悲しい話を聞くこともありました。自分の口から少しだけ話してくれたり、職員から聞いたりすることもありました。ときどき泣き声や喚き声が聞こえてくることがあっても、慣れている人は「ああ、またあの人ね」と言っていました。

作品をつくりながら、私たちの間の違いは消えてなくなり、信頼が生まれ、友達になりました。そしてブラジルでとても一般的な色とりどりの「シタ(ブラジルを代表する綿布)」が作品に使われるようになったのも偶然ではありませんでした。つまり、あの場で私たちは文化も分かち合っていたのだと思います。私たちの手の動き、声が混じり合ったのは、あのときだった。それはまるで、一人ひとりが布を折ることに没頭しながら、同じ物語

を一緒につくっているかのようでした。

私たちは何日間もかけてたくさんの葉っぱや小さい花、大きい花を、日本とブラジルの布でつくり、色彩のハーモニーを生み出しました。私たちは、プロメリアやヘリコニアなどブラジルの花からもインスピレーションをもらいました。陶芸部の友達がこの場で芽吹いた過程を象徴するために、たくさんの種をつくってくれました。参加できなかった人は、観に来て楽しんでいました。喜びとそわそわした気持ちとが、悲しみに混じりました。「月曜にあなたは来るの？ え、来ないの？ ああ、残念」という言葉を聞きながら、私はみなさんと抱き合い、別れを惜しみました。泣いてくれる人もいました。

TURN in BRAZILでは、ブラジル人の一般的なイメージからインスピレーションを受けてつくった、大きな口をして夢見がちな目をした若い女性像を、私たちの花が飾りました。

髪の毛の間を縫って、ときは過ぎていきます。髪は伸び、切って、また伸びて、生まれ変わります。夢想家の透明で繊細な髪の毛、ときによって結わえられ束ねられた髪の毛です。いろいろな人たちの心と手から新たな花盛りが生まれ、生態系の一部へ。それは、リオでの展覧会や、凝縮して感動的な会期中もずっとそうでした。プロジェクトのことを知ったり、ワークショップに参加したりすることを通して、そうした人たちもまた、展覧会の時間や作品の一部となったのです。

治癒と変化としての芸術

Text | ジュン・ナカオ

憩の園のお年寄りの多くは日本からブラジルに移民してきた1世の方々です。つまるところ、私のなかにある日本というものは、彼らの存在なくしてはありえない。この川を遡り、その源流に出会うことは、日本のルーツを辿る道のりとなる。私は、教えるよりも多く学ぶことになるだろうと思いました。

空のコップは空気でいっぱいなのだと思いますのは、いつでもよいものです。私たちが最初に憩の園に訪問したときは期待に満ちていました。お年寄りのみなさんは、どんな物語を分かち合ってくれるだろうか？ 私たちは何を発見することになるだろうか？ 奥まで潜っていくことは大事です。そうでなければ、私たちが一緒につくるものは表面的で、機械的につくられた手工芸品になってしまうからです。

私たちは手始めに毎日お年寄りを訪ね、おしゃべりをしました。彼らは遥か昔の子供の頃の話をしてくれました。当時の彼らには、親と一緒にいられるという幸せがあり、現在は、憩の園でよくケアをされているという幸せがあります。

遠い国に外国人として暮らし、祖国から遠く離れ寂しい思いをするお年寄りたちの人生に共通するのは、自己犠牲、献身、苦労の話でした。人生のなかでぽっかりと空いた期間については、お年寄りたちは沈黙と、底なしの空虚さを保っていました。お年寄りたちの持つ価値を敬うということ。それは尊厳を持たせ、誇りを持たせ、そして何よりも、お年寄りたち、そして憩の園のいきいきとした美しい物語の高貴さを守ること。すると、

次のような問いに行き当たりました。

空虚の型をどう取るか？
存在にどう形を与えるか？
情をどう物質化するか？

こうした人生をすべて集め、その尊厳を保つために、私たちはお年寄り一人ひとりを、友情、尊敬、感謝、愛情という「抱擁」で型をとった大きな花瓶、という着想を得ました。

お年寄りたちには、舞台上上がって私の抱擁を受けてほしいとお願いしました。それから、みなさんを金属の網で包み、この作業を通して全身をゆっくりと抱擁しました。抱擁するごとに、彼らにありがとうと言い、友情、尊敬、感謝と愛情を伝えました。私たちは一緒に時間を旅したのです。たくさんのお年寄りが子供のように抱擁を受け入れたのを感じました。

それから次の編む段階を始めました。みなさんが抱擁によって心が動き、元気になっていました。網の間に通すために選ばれた素材は柔軟性のあるテープで、これはお年寄りたちにすんなりと受け入れられました。テープを通していく度に、目には光が宿りました。

数人のお年寄りが参加することによって始まった日々の習慣は、すぐに園全体に広がりました。たくさんのお年寄りたちが好奇心を持って近づいてきて、ワークショップに参加するよ

うになりました。ハセガワさんというとても弱々しい車いすの女性が参加したいと意思表示をされ、展覧会に出した9つ目の型を完成させてくれました。

特にホジーニャさんとトクコさんは、自分たちの型を編むだけでなく、ほかのお年寄りたちの型を編むのを手伝ってくれました。トクコさんは自分が学んだことをほかのお年寄りたちに教えたりもしてくれました。

憩の園での日常は変化しました。閉じ籠っていたお年寄りたちは積極的になり、病気の症状が消え、相互に関わり、交情を深めることが起こりはじめたのです。

お年寄りたちが編んでいる間、それぞれの人生の物語が語られ、通していく一本のテープは、一つの人生のようで、お年寄りたちが作品にテープを通し終えると、そこに芸術作品としての彼らの人生ができたのでした。

最後には、9体の編んだ彫刻がみんなで分かち合った時間を凝縮して表していました。隙間隙間にはテープが通され、上から下に、曲がったり真っ直ぐだったり、間違ったり正しかったり、それは私たち自身の人生の偶像のようでした。

お年寄りたちは、自分たちの作品の隣で誇らしさと自尊心を露わにしていました。「作品」にある彼らの人生は、彼らの「人生の作品」となったのです。彼らは新たな光を放っていました。一人ひとりの顔つきから、みなさんが人生を再び編みはじめようとしているのを感じました。

今回のプロジェクトは、芸術作品としてのお年寄りの人生であることに加え、「情緒の織り込み細工 Affect Weaving」と名づけました。これは人生の価値を表現したアートプロジェクトです。年齢も人種も関係なく、人生には値段はつけられないのです。

Affect Weaving-TURN-日本-ブラジル
芸術の役割と人生の価値についての相互作用を促すアートプロジェクト

憩の園で完成した作品は、2016年オリンピックの開催期間中、リオデジャネイロのパソ・インペリアルで展示されるために旅をしました。世界中から来た人たちがワークショップに参加してお年寄りたちの作品に手を加え、友情を編み込み、絆を深め、オリンピックの精神を再確認しました。

TURNは、私にとって2020年東京オリンピック・パラリンピックへの旋回を意味し、彼らのような日系移民が祖国へと還ることを意味します。治癒と変化としての芸術であると考えます。

2016年秋、旅の途中で考えたこと

Interviewee | 日比野克彦 Interviewer | 奥山理子

伝統工芸の持つ力

2016年の夏は、日本にはずっといなくて、ブラジルの冬を味わいました。39日間、地球の裏側に滞在したことになります。

TURNは、まだ日本でも走り始めたばかりで、施設にアーティストが入っていくということに対する理解を少しずつ深めていたところだったので、海外での展開がどのようなものになるのかまったく未知数でしたね。

そこで、今回は日本の伝統工芸を用いて展開することにしました。江戸組紐と江戸つまみ、東北のきりこ、そしてジュン・ナカオさんはブラジルの伝統工芸である籠編みの技術です。海外でアーティストが活動をするにあたって、パスポートのようなものが欲しかったんだよね。「これは、日本の伝統的な技術です」という前提があると、「このアーティストは一体何をやるんだろう？」というところからのスタートじゃなくて、距離が一步近づくと感じたから。それをきっかけに、アーティストックに展開していくことができるんじゃないかと考えました。

最初は、アクシデントばかり。きりこの場合は、障害者の人たちにカッターを使わせるということに対して施設側に抵抗があった。白い和紙のような紙を切っていくんだけど、障害を持った子供たちは鮮やかな色が好きだから、「何で白なの？」という意見が出てきたりもする。ほかにも作業場所が使えなくなったり、7月になると施設が冬休みになるので、その前に交流して制作に入らないといけないという焦りもありました。

しかし実際に進んで行くと、伝統工芸の持つ力のようなもの

を感じましたね。たとえば、切り取られた魚や鏡餅、徳利などのきりこが、風になびく。瀧口さんが切っている様子を見てみると、「わたしもやってみたい」という気持ちにふつとなってくる。それはやはりこれまでの時間のなかで、先人たちが築いてきたものだと思う。最終的には、180枚のきりこができました。

アートプロジェクトとしての役割

TURNが来たことによって、ブラジル側の人々にとって自分たちの暮らしを再発見する機会になったという話はいくつも聞きました。

たとえばPIPAは、投薬ではなくて生活療法を通じて自閉症と付き合っている施設で、糸巻きの作業をすると子供たちの精神が落ち着いて、とても効果的だと受け入れてもらえました。「このままブラジルに五十嵐さんにいてほしい」とまで言われたぐらい。今後、PIPAの生活療法をブラジル国内で展開していく際に、糸巻きの作業をプログラムのひとつにしていきたいという声もありました。

モンチアズールは、障害者だけでなく、施設近隣の子供たちなどいろいろな人たちが集う場なのですが、コーディネーターからしてみれば、本当は障害者だけの施設にしたいけれど、近所の子供たちが遊び場がなくてやって来るもんだから、仕方なく混ざっているという認識だった。その状況について瀧口さんが「それがすごくいい」と伝えたら、「え、そうなの？」とすごく驚かれた。彼らにしてみれば、日本のようにちゃんと

障害者と健常者がわかれているのが良いと思っていたようなんですね。でも、日本ではいまその両者を重ねようとしている場合もあると言う。「もしかしたら、私たちのほうが進んでいるの？」という感じになって、それまで申し訳のなさがあった雰囲気、ぐっと前向きになったという出来事がありました。

でもTURNは療育方法でもないし、日本の伝統を紹介するものでもない。リオでは、あくまで「アートプロジェクトである」ということをきちんと見せていかなければいけないとも同時に思いましたね。

そこでアーティストたちの日誌をもう一度見返したときに、一番大切なのは、ものをつくることじゃなくて「時間を共有すること」だと思ったんですね。すると、人間って生きていともものをつくっちゃう生き物だから、結果的に何かできちゃう。そのできたものを見せることによって、共有した時間を来場者と再生することができる。過去をふりかえったり、互いの時間を交換するということにTURNの意味があるので、その時間をどうやって会場で展開するかということについて考えました。

お国柄の違い

最初はちょっと大変かなと思ったけれど、すぐに受け入れて、いっきに吸収してくれる。これは、ブラジルというお国柄によるものだったと思います。日系人もいればヨーロッパ系の人たちもいる、移民によってつくられた国だから。

日本におけるTURNは、障害者や高齢者など異なる背景の

人たちが、社会のなかで良かれと思って区分されている現状をもう少し重ねていこうという試みだった。逆にブラジルではもともと混ざった状態なので、そこから学ぶところが随分ありましたね。

たとえばリオは、オリンピックが始まってからも依然としてまちが工事中なんですよ。ちっとも間に合ってなくて、工事の人が道路で寝ている横を観光客が通る。でも、それで成り立っている。日本だったら絶対あり得ないよね。

日本の場合は、工事中は塀を建てて、しっかり安全に行って、オリンピックが始まる前に間に合わせる。日本は、きっちり次の段階に移る技を持っているんだけど、ブラジルは町中つぎはぎだらけでも成り立つ。そういうところにいると「締め切りを守るのってつらいよね」という気持ちになってくる(笑)。だんだん「TURNを“きちんと”やろう」というのは、ちょっと文法的な間違いがあるような気がしてきたんです。

日本人って、計画して、打ち合わせして、ちゃんとチェックしながら進めて終わったらふりかえりをして次に活かしますよね。そういう几帳面さは良いところだけど、ブラジルのなある種、ゆるやかなやり方というものもTURNにとっては必要なんだろうなと思いました。

異邦人としての可能性

帰国して思ったのは、TURNは、アーティストが異邦人として施設に入っていくプロセスが重要なんじゃないかというこ

とです。たとえば、日本人が日本の施設に入っていくというよりは、日本にいる外国人アーティストが施設に行く。そうすると言葉は通じにくかったりするのだけれど、もともと不自由さがあるところに行くわけなので、その不自由さを確実にフォローし合える。「日本語が喋れないから、何とかしてコミュニケーションをとろう」というような気持ちが自然と湧く。自閉症の子は、言葉でのコミュニケーションが苦手な傾向がありますよね。なので、同じような地平に立つわけです。

だから、ヨーロッパにアジアのアーティストが行く。アフリカのアーティストが北米に行くといったことを、積極的に仕掛けていきたい。日本で育成してから外国に向かうのではなくて、同時多発的に、地球のあちこちで展開していくという方法もある。そのほうがTURNの姿が見えてくるのかなと思いました。

よくよく考えると、1ヵ月以上ひとつの国にいたというのは、30代半ば以来、約20年ぶりの出来事でした。長期間日本を離れて、その国のなかをあちこち動き回ったことは何年か前にあったんだけど、こんなに長いことひとつの国に滞在したことはなかった。なので、じっくり細かいところまで気を配らせながらできたというのは、自分のアート活動においてもいい経験になりましたね。

現地に行ってみないとわからないところが多かったので、現場で時間を過ごして、アーティストと「ああしよう」「こうしよう」と話しながら展覧会やワークショップの進め方を詰めていった。そうしたプロセスを経ないとTURNはかたちにならないという実感があるし、それだけの時間を費やす意味あるプロ

ジェクトになってきていると思います。

TURNの成立条件

今回、ほんとうによく4人のアーティストたちが4つの色を出していると思うのね。一番個人的な作品になっているのは、自分の籠編みの技法を使ったジュンさんです。一番作品というよりは工芸に近いのが、瀧口さんのきりこ。その次にタチさんの江戸つまみがあって、五十嵐さんの組紐がある。

では、どの存在が最もTURN的かというと、誰かひとりではなくて、こうした異なるものが同時にあること。それはこれからも起きると思います。その作家によって、持っている癖というか特徴があるので、いろいろなかたちに表れてよかったと思います。2016年に開催した『TURNフェス』においても、個人的な作品になっていくものもあれば、工芸的なもの、ワークショップ的なものとさまざまだった。

共通しているのは、施設のなかの活動だけで終わらずに、展覧会というかたちで遠くに目標があったからこそがんばれたという点だと思います。発表の場があるからこそ、状況判断ができる。そうじゃないとルーティンワークだけで終わっちゃって、どこを目指すべきか迷っちゃうような気がするんだよね。なので、それは1年後でも3年後でもいいんだけど、最終的に外にそれを持ち出す発表の場があるというのは、作家にとって結構大きなことだと思います。

今回のブラジルは、サンパウロとリオのふたつの時間によ

ってTURNが成立していたんだなということを感じました。

地域ではなく「人」に寄り添う

2014年にショートステイをさせてもらったことで、アーティストが施設に滞在するというTURNの骨組みができました。それが、今度は障害者だけでなく、いろいろなマイノリティのコミュニティに行って、それを『TURNフェス』という場で紹介した。そして、今回、アーティストにとってやっぱり発表の場があるというのは大事だなというのが、改めてわかりました。

リオのカンファレンスでは、対談相手の吉本光宏さんと太下義之さんと話しているなかで、いま日本各地では、国際芸術祭やアートプロジェクトが行われているけれど、「これも大きく言えばTURNだよ」という話が出てきました。こうした地域は、ある意味マイノリティな地域とも言えるわけなんですよ。つまり、人がいなくなっていく、ある種まちとして障害を持っているといえるかもしれないと。

改めてTURNの活動を考えると、世のなかの中心と思われるところから少し外れたところにアーティストが行って、そこを再発見・再評価しに発信していく動き。これを地域という「場」ではなくてより「人」に焦点を当てていく。その人たちがいる空間に入っていきその人たちと時間を共有する、ローカルな場からローカルな人へというのが次の段階なんじゃないかと思います。

というのも、土地に入っていくよりも、人に寄り添う方が

やっぱり高度なんだよね。廃屋や廃校になった場所に滞在すれば、土地に寄り添うことになる場合もあるけれど、人に寄り添うには時間をかけて関係をつくっていくしかない。異なる背景を持ったコミュニティ入っていったって、そこにいる「人」に寄り添うというのは、次のステージなのではないでしょうか。

スポーツが身体表現を介して異なる地域の人と人をつないでくれるようにTURNを通して、ぼくが昔からアートの魅力だと感じている「いろいろな人をつないでくれるおもしろさ」をもっともっと広げていきたいと思いますね。

国によって、マイノリティの人々の置かれている状況や価値観は全然違う。「全然違う」ということを知るためにも、いろいろな国でやった方がいい。日本だけでやっていると、それがスタンダードになってしまうから。ひとつのものさしではなくて、いろいろなものさしで測っていくためにもいろんな国境を越えて、それぞれの場所にTURNを持っていくことによって、より在るべき姿が見えてくるのではないかと思います。

A ATITUDE QUE VIGORA NOS DEDOS

Text | PIPA Ricardo Minoru Wazima (comprimento Facility)

A ABRANGÊNCIA DA ARTE QUE CURA

A vinda do artista plástico Yasuaki Igarashi ao Pipa foi cercada de muitas expectativas e questionamentos: "será que ele compreenderá a realidade das nossas crianças?", "e se ele se frustrar ao perceber que elas não respondem adequadamente?"

A princípio pensei que ele iria selecionar as melhores crianças para desenvolver seu trabalho, deixando as mais severas de lado. Qual não foi minha surpresa quando ouvi pelos terapeutas que todas as crianças participaram, gostaram e, para o meu espanto, se acalmaram com a atividade de enrolar o novelo de fios. Segundo o Sr. Igarashi, foi uma satisfação encontrar a função que mais agradava cada criança. A partir daí, comecei a perceber que tínhamos um artista na

instituição que não colocava a arte como prioridade final. As pessoas vinham na frente! Foi com alegria que acompanhei sua descoberta dos interesses e potencialidades de cada criança que, de modo geral no Brasil, são deixadas de lado na escola ou mesmo em casa, porque o peso do diagnóstico de Autismo encobre o Ser que está ali presente.

Tirar o foco na "doença" e descobrir a criança é o objetivo terapêutico do Pipa. A atitude artística do Sr. Igarashi se alinhava perfeitamente com nossa atitude terapêutica: Uma arte que não se frustra com a imperfeição humana, que não procura as formas precisas, mas que, ao contrário, se alimenta do que é provisório e possível a cada pessoa. Uma arte inclusiva que acolhe com alegria as digitais de todos os participantes, re-

velando a beleza do registro da contribuição de cada ação individual. O Sr. Igarashi não estava preocupado em orientar e controlar as crianças para que elas fizessem a forma correta. Me parecia que, dentro de uma atividade com fios ou de tingimento deles, ele estava interessado na reação de cada criança diante do estímulo. É esta resposta única e individual que ele parecia querer imprimir na sua arte, não se importando com a harmonia das formas. Em nenhum momento o Sr. Igarashi se mostrou frustrado ou irritado com alguma criança. Parecia não criar expectativas. Estava perfeita a forma de expressão possível de cada uma. Parecia até mesmo se divertir com o inusitado, com a capacidade das crianças em tomar direções tão singulares.

A MINHA PRÓPRIA TRANSFORMAÇÃO

Particularmente, eu me transformei. Preocupado com os prazos para finalizar a obra, resolvi ajudar no processo, junto com dois adolescentes da instituição.

Apesar de querer ser útil, os fios se embaraçavam continuamente, me deixando frustrado. Irritado, queria eliminar o problema cortando a parte embaraçada com a tesoura, o que seria rápido e confortável. Igarashi me ajudava sempre, cuidando em desembaraçar os fios como se estivesse cuidando de um ser vivo. Havia afeto no seu toque com os fios. Para mim, era um objeto que não respondia às minhas

A intensidade da proximidade do artista com as crianças foi estabelecida em um curto período de um mês. Um tempo muito pequeno para superar os medos com relação ao Autismo e se tornar um terapeuta que promove desenvolvimento psicossocial. O Sr. Igarashi parece que não necessitou deste período de aprendizagem e adaptação. Ou sua arte coletiva tem esta função transformadora: Quem participa, contribui e se modifica ao mesmo tempo. Uma arte terapêutica. Uma arte que não está interessada em refletir as misérias da realidade, mas está envolvida em promover mudanças, ao revelar o poder individual em uma ação coletiva e anônima.

expectativas. Não tinha amor algum pelos fios. Vendo sua atitude, comecei a tocar os fios com respeito, o que se tornou uma medida produtiva porque os fios não se embaraçavam mais. Já não tinha pressa em finalizar o trabalho. Ao contrário, comecei a sentir prazer em realizar o trabalho com os fios, sem expectativas com o resultado final. Se o começo foi estressante, lidar com os fios se tornou uma atividade relaxante ao longo do dia. De uma certa forma, através dos fios, me "iluminei", atingindo o satori! Eu e o Igarashi conversamos e rimos muito sobre esta minha rica aprendizagem. Aliás, as nossas conversas depois de um longo dia

de trabalho, me ajudaram a compreender sua intenção artística. Através dos fios, Igarashi queria conectar pessoas, queria que o fio fosse o veículo de comunicação de pessoas que não se comunicam, como é o caso das crianças autistas. Fios que unem pessoas, tornando-as parte de um todo. A experiência de fazer novos representava justamente isso:

Enquanto uma criança enrolava o fio, as outras tinham que deixar o fio correr pelas mãos sem reter, sem segurar para si o fio, interrompendo a confecção do novelo. O desafio para as crianças era dar a liberdade ao fio, não ter a posse dele, deixando ele seguir seu destino que era se tornar novelo. Algumas crianças tiveram dificuldade na atividade a princípio, mas logo se divertiram ao simplesmente deixar o fio fluir livremente. A diversão ocorreu quando todos aprenderam a ceder, a dar passagem. Em movimento, o fio parecia ter vida nas mãos delas. Segurar o fio firmemente, interrompia o movimento e sua vida. O fio se tornava coisa, objeto morto. Perdia sua beleza. Que lição profunda estava sendo transmitida de forma prática, simples e prazerosa! Através desta brincadeira, as crianças talvez tenham aprendido um pouco a importância e o prazer de se viver em grupo, objetivo que fundamenta todo o nosso tratamento!

A presença do Sr. Igarashi no PIPA nos ajudou a ampliar os horizontes das atividades que podem estimular efetivamente as crianças au-

tistas, ensinando os terapeutas a se tornarem mais criativos no tratamento. Mas, acima de tudo, nos ensinou a respeitar todas as formas expressivas humanas e a amar a realidade e sua contínua possibilidade de transformação.

A ESSÊNCIA HUMANA EM CADA UM DE NÓS

Text | Monte Azul Nenete Marien Almeida (Coordenadora do Caminhando Juntos)

UMA FORMA ESCULPIDA DENTRO DA VIDA

Foi uma experiência de vida maravilhosa , com conteúdo espiritual precioso que muito nos encantou. Sachie contou-nos sobre o KIRIKO, o contexto em que surgiu, sua fundamentação espiritual, uma arte do outro lado do mundo, de outra cultura, criada a partir de algo essencialmente humano, universal. Através da prática do kiriko nos sentimos unidos à vida da natureza, à vida humana, e à espiritualidade; nos sentimos unidos como comunidade independente de raça, nacionalidade ou deficiência, para

além do tempo, aprendendo com as vicissitudes da vida e aprendendo a ver, nas formas, a vida nela inscrita.

A delicadeza do papel, a atenção ao cortar as formas com o estilete, o dependurar do desenho para exposição, a interrelação com o ar, a luz , o calor, sentimentos, pensamentos e intenções de todos os atores envolvidos resultaram numa bela criação .

TORNAR OS APOIOS MAIS VISÍVEIS

A experiência de adaptar o trabalho à condição dos jovens com deficiência, dividindo o painel

em quatro partes, fazendo desenhos adequados para aqueles que tem maior dificuldade,

foi importante para a motivação , engajamento e vinculação de todos com a proposta. A disposição afetiva, amorosa de Sachie facilitou a comunicação e, mesmo sem falar uma palavra de português, conseguiu o engajamento das educadoras e outros colaboradores; em outras palavras a agilidade, praticidade, alegria e doçura dela nos contagiou. Também chamamos coordenadora, professoras e colaboradores de outras áreas, de maneira que pessoas com e sem deficiência estiveram algumas horas unidas no mesmo propósito. Trabalhando com pessoas com deficiência intelectual aqui no Caminhando Juntos , não estabelecemos metas quantitativas devido a limitação na atenção, memória e coordenação motora dos atendidos; percebemos que isso tensionou a todos, pois a proposta era um enorme número de kirikos e sabíamos que por parte dos alunos seria muito difícil atingi-la, mas as educadoras foram super solidárias e com a ajuda de todos e muiiito trabalho da Sachie, conseguimos algo muito significativo. Os

LAÇOS QUE NASCEM NO ESPAÇO CRIATIVO

Aqui na Associação Comunitária Monte Azul valorizamos o trabalho artístico como aquele que fala à essência humana, aquele que possibilita a expressão a partir de dentro e que também possibilita conhecer o mundo nas suas qualidades intrínsecas essenciais. Neste sentido esta

alunos foram percebendo que eram capazes, que conseguiam terminar o trabalho e ficavam orgulhosos ao dependura-los para ficarem expostos e serem compartilhados. Mesmo aquele que estava mais agitado ou dispersos, ficavam concentrados, ganhavam calma, segurança e o prazer de contribuir. Os pais também puderam realizar a oficina durante uma oficina que integrou a todos, alunos, pais e colaboradores com ou sem deficiência, unidos nesta causa.

E o possível foi bom e belo. Valeu o processo e valeu o resultado. Acompanhar nos vídeos o Paço Municipal do Rio de Janeiro com todos aqueles kirikos nas janelas, a oficina conduzida pela Sachie durante a Paralimpíada, a imagem dela com os nossos alunos aqui no Centro Cultural da Monte Azul circulando pelo face trouxe-nos grande alegria. O objetivo de darmos uma contribuição para a visibilidade à causa da deficiência foi atingido e fazê-lo através da arte foi mais significativo ainda!

parceria deu certo: falamos a mesma linguagem e atingimos o nosso objetivo, abrimos um espaço criativo que foi além da intelectualidade, que trouxe vida aos nossos pensamentos, ao sentimentos e quereres, unindo-nos numa comunhão fraterna.

AS HORAS DE CONVÍVIO

Text | Kodomo-no-Sono Celina Kawamorita (Gerente administrativa)
Jessica Poli Suguimoto Shirabe (Assistente Social)
Márcia Uchimura (Fonoaudióloga)
Maria Keiko Nakamura (pedagoga)
Camila Caria Bezerra (monitora)
Maria Aparecida da Silva Lima (monitaora)

O DESPERTAR DAS EMOÇÕES

Desde início, Tati mostrou-se muito acessível aos monitores e assistidos, compreendendo cada um dentro de suas capacidades, adaptando e procurando a melhor forma de ensinar. Trouxe-nos sua experiência e sua dedicação, e nos cativou logo no primeiro momento, com seu jeito carismático, simples. Foi muito bom o contato dos assistidos com a mesma, e pudemos compartilhar momentos muito especiais. O convívio da artista Tati Polo proporcionou aos assistidos momentos agradáveis de carinho e amizade, e junto com a obra que foi se compondo em conjunto no dia a dia de seu trabalho. Foi construído também o sentimento de realização, união e trabalho em equipe. O prazer em dedicar-se na criação de um trabalho em grupo

que foi se transformando numa verdadeira obra de arte resultado da união de sentimentos de carinho, afeto e amizade. Esse período que a artista Tati passou conosco e com nossos assistidos foi muito importante para ambos, onde os monitores que acompanharam o trabalho de perto puderam observar, sentir e aprender. Foi de grande aprendizado para todos. Segundo as monitoras que acompanharam a turma de assistidos, a percepção de mudanças no comportamento geral da turma foi muito positiva e inesperada. Além da observação mais apurada em determinados assistidos, que normalmente apresentam dificuldades em atividades em grupo, em permanecer por

determinado tempo no local e até mesmo agressividade de alguns, foram percebidos, no decorrer dos dias em que a oficina acontecia, sentimentos de serenidade, tranquilidade e desejo de estar colaborando para o trabalho ser finalizado.

Houve a participação de um assistido que apresentava muita dificuldade em controlar o seu impulso de agressividade, como também, uma assistida que estava em fase de grande resistência em seguir as simples regras do dia a dia, assistidos com dificuldade em expressar seus sentimentos e manter o autocontrole, não conseguindo conviver dentro do grupo. Após o início das atividades, observou-se que tais comportamentos foram amenizados, tornando o ambiente mais produtivo e agradável.

O QUE NASCE APÓS A SUPERAÇÃO

Apesar da preocupação inicial dos funcionários, pois naquele período estavam todos atarefados com os preparativos do Festival Kodomo-no-sono, que é considerado o maior evento da entidade e, embora a grande maioria dos funcionários não pudessem acompanhar com mais dedicação e compromisso o trabalho da Tati, todos foram unânimes em reconhecer o esforço da artista e prestigiar o belo trabalho realizado.

Já os assistidos, pelo contrário puderam aproveitar ao máximo o tempo de convívio com a artista num clima de muita dedicação e res-

Observou-se o desejo de todos os assistidos em querer participar, alguns demonstraram, inicialmente, receio em executar algo que nunca haviam feito, mas no decorrer das atividades, superaram cada fase e descobriram serem capazes.

Participaram deste projeto o grupo de assistidos que, apesar de todas as diferenças e dificuldades que apresentavam, conseguiram em conjunto criar uma verdadeira obra de arte. A percepção do empenho e prazer dos assistidos a cada dia em que se construía o projeto enchia os olhos de orgulho, satisfação uma vez que, despertava sentimentos adormecidos e talvez até desconhecidos, através da união e interação com a Tati para desenvolver um objetivo comum.

ponsabilidade ao trabalho, de descontração, carinho e amizade. Justamente por estar num período em que os funcionários não poderiam dedicar-se integralmente aos assistidos, a presença da Tati nesse momento foi de muita importância para os mesmos. No final do seu trabalho foi realizada uma dinâmica de grupo onde cada um dos assistidos foi expressando os sentimentos de felicidade e realização, verbalizando o que estavam sentindo naquele momento. Foi possível observar pelo olhar e pelo sorriso expresso em cada rosto, o quanto estavam orgulhosos, felizes, satisfeitos, tran-

qüilos,serenos e em paz consigo mesmo.

A artista plástica finalizou sua participação no kodomo-no-sono registrando a palma das mãos dos assistidos e funcionários com tinta e tecido para ser levado em sua exposição, encerrando assim, o ciclo de seu trabalho em nossa entidade. Superação seria uma das observações de extrema importância durante o projeto da Tati em nossa instituição, pois mesmo diante das limitações de nossos assistidos foi mostrado o quanto são capazes de construir, exercer e realizar algo diferente, proporcionando aos mesmos, a melhorar os sentimentos de auto-estima, confiança, capacidade, paciência, fraternidade e amizade.

Ficamos muito felizes e satisfeitos por termos feito parte deste projeto tão bonito e grandioso, envolvendo dois países que estarão num evento mundial, as Olimpíadas.

O MAIS BELO DO SER HUMANO

Text | Ikoi-no-Sono Suzana Miyuki Narita Mizushima (Terapeuta Ocupacional)

Tatiane Mayumi Murohashi Nishimura (Coordenadora Técnica)

UM DESAFIO À PRODUÇÃO COLETIVA

“Eu nunca pensei em participar de uma obra tão preciosa e construtiva feita com um abraço. Precisamos agradecer a Deus por participar dessa obra.” (Sra. Tokuko Pereira Martins, 78 anos).

“Eu me senti realizada. Deu muito trabalho, mas conforme eu entrelaçava, enxergava o sucesso”. (Sra. Rosa Ito, 67 anos).

“Fiquei muito contente porque é uma oportunidade para mostrar aos japoneses como estão hoje os imigrantes no Brasil”. (Sra. Dirce Nakamura, 86 anos).

“Fiquei feliz em participar desta obra que foi levada para as Olimpíadas. Nunca pensei em participar com essa idade, quase chegando

aos 80 anos!” (Sra. Miyaco Murata Aykawa, 77 anos).

Estas foram as sensações despertadas pelos abraços do artista Jum Nakao, que com muita simplicidade e sensibilidade, conseguiu conquistar os idosos e fazer uma bela arte. Desde o primeiro contato com os idosos, o artista se preocupou em explicar detalhadamente a arte, sua técnica e material a ser utilizado. E, de que a arte seria desenvolvida respeitando a história de vida e também as capacidades física e mental de cada um.

“Fiquei muito feliz. Foi muito importante para mim. Quando estava fazendo sentia muita dor nas pernas, então eu parava um pouco e depois voltava.” (Sra. Yoshiko Akiyama, 90 anos).

“Eu gosto de participar de tudo, desde que es-

teja ao meu alcance. Gostei de ter participado”. (Sra. Teiko Suga, 84 anos).

Convidados a trançarem a sua própria obra, os idosos e o artista teceram também as conversas e relatos de experiências de vida que tiveram nesse convívio. Muitos idosos, pela curiosidade e vontade de interagir participaram dessa vivência e acabaram sendo envolvidos nessa trama de afeto.

“Foi importante... ajudei a tecer, mas foi só um pouquinho, achei difícil fazer.” (Sra. Emiko Kawaka-

PROVAS DA VITÓRIA

O local escolhido para a realização das obras facilitou o contato. Mesmo os idosos mais inibidos que, pareciam distantes, estavam bem atentos. Chegavam perto e observavam com um olhar de curiosidade tentando entender. Era frequente ver o idoso admirando a sua imagem e assim percebendo o movimento de sua própria vida e do outro.

Cada obra trançada era uma vitória para todos. Outras peças eram iniciadas e voluntariamente mais idosos ajudavam a trançar. Pouco a pouco, todas as obras foram tomando suas formas, representando cada um deles.

Quando as obras ficaram prontas, os idosos em seus melhores trajes e com muita gratidão foram fotografados e filmados ao lado de suas

mi, 85 anos).

“Uma forma de agradecimento que encontrei foi participar e ajudar a tecer um pouco. Fiquei muito alegre”. (Sra. Yaeko Takeda, 92 anos).

“Foi muito bom. Fiquei com vontade de aprender tudo.” (Sr. Yosio Saito, 88 anos).

A capacidade de enfrentar desafios dos idosos mostrou o quão é importante continuar a aprender e, que, crescer, ainda que emocionalmente, é muito importante para chegarmos longe.

obras, na certeza de que seriam levadas para a sua terra de origem, o Japão.

“As obras serão levadas para o Japão? Eu não me lembrava disso. Meus familiares que estão lá, se forem visitar essa exposição vão levar um susto. Vou comunicar via carta, informando lhes sobre isso. Estou feliz.” (Sra. Masa Minoura, 91 anos).

Esse projeto foi muito importante para o crescimento de todos ajudando muito na autoestima e na identidade de cada um. A obra do artista, também, trouxe à tona memórias da infância. “Gostei do trabalho dele, fez-me reviver a infância no primário, quando minha professora ensinou a tecer também”. (Sr. Mário Kuwae, 71

anos).

As reminiscências da infância são importantes, pois favorecem a integração do passado ao presente, dando continuidade à vida e proporcionando até mesmo uma releitura das experiências vividas.

O orgulho no olhar do idoso pousando diante da obra que, representa a sua própria vida, motivou ainda mais a Equipe Técnica em continuar em sua missão de proporcionar condições favoráveis aos idosos para que possam continuar a desenvolver-se até o final da vida, encorajados para fazer florescer o melhor de si mesmos, ainda que limitados por incapacidades físicas ou mentais.

O sucesso das obras nas Olimpíadas do Rio de Janeiro foi presenteado pelo artista aos idosos na entidade, através de um vídeo que mostrou, em detalhes, a exposição. Os idosos e a Equipe Técnica se emocionaram ao saber que milhares de turistas também tiveram a oportunidade de trançarem as obras.

“Foi muito bom, estou feliz!” (Sra. Reiko Hasegawa, 87 anos).

“Senti uma emoção tão grande porque nunca pensei que tantas pessoas fossem ver as obras. E nem acreditei quando um visitante de lá me mandou um presente”, diz a Sra. Tokuko, com a voz embargada.

“Fiquei emocionada ao ver que o projeto deu certo. Gostaria que as obras ficassem expostas onde mais e mais pessoas pudessem admirar. Espero, com entusiasmo, que o artista traga notícias da exposição no Japão”, comenta a Sra. Rosa Ito.

A nossa gratidão ao Projeto Turn é infinita, pois despertou aquilo que há de mais belo no ser humano, o amor e o afeto de um abraço.

O REFLORESCER

Text | Tatiana Polo Tsubouchi

UMA FORMA ESCULPIDA DENTRO DA VIDA

Minha primeira oportunidade de conhecer o Japão foi em 2001, como bolsista através do kenjin kai de Ishikawa-ken, terra natal de meu avô. Como bolsista de kaga yuzen zomê, tive o privilégio de aprender com o professor Yasuji Tsurumi e seu filho.

Essa viagem me proporcionou vivências que tiveram grande impacto em minha vida e desde então eu tinha o desejo de poder voltar ao Japão para rever sua Cultura, suas belezas!

Desde 1998, realizo profissionalmente trabalhos manuais em tecidos e após 2002 pude agregar o yuzen e o shibori em meus trabalhos sob uma ótica pessoal; acho que a insistência de trabalhar dessa forma todos esses anos proporcionou essa oportunidade de realizar essa jornada do Projeto Turn, a convite do professor

Hibino Katsuhiko e do Tòkyo Arts Council. Digo insistência porque em um país como o Brasil, viver do Ofício manual e da Arte requer amor e coragem, pois até pouco tempo, era pouco valorizado.

Em 8 de maio de 2016, mal podia conter minha alegria; eu estava de volta ao Japão, com o objetivo de aprender Edo tsumami para depois, partindo desse aprendizado, produzir uma obra com os internos da instituição Pró especiais Kodomo No Sono.

Em um pouco mais que um mês me empenhei para aprender a essência do edo tsumami e suas técnicas básicas. Passou rápido, pude rever e vivenciar um Japão mudado, mas não menos encantador e inspirador.

Dia 13 de junho, em um dia frio e ensolarado

de Inverno cheguei na instituição Kodomo, em Itaquera, São Paulo. Lá não existem mais crianças como em 1958, época em que foi fundada. Atualmente são duas unidades onde vivem separados homens e mulheres com diferentes graus de necessidades especiais. Eles desenvolvem atividades diárias com funções terapêuticas e outras de acordo com suas aptidões para ter certa autonomia e colaborar em pequenas obrigações da casa. Era a primeira vez que eu estava tão próxima de pessoas com esse perfil.

Em um primeiro contato, na Unidade masculina, a curiosidade fazia com que alguns deles se aproximassem de mim para me beijar a face (gesto comum no Brasil), abraçar e cumprimentar. De início fiquei um pouco intimidada, mas seria uma questão de tempo para me ambientar! Eu iria desenvolver os trabalhos na Unidade feminina e foi para onde segui logo depois. Adentrei as instalações grandiosas, rodeada de área verde. Nesse local existe um grande altar budista, onde criei o hábito diário de agradecer, pedir permissão para estar na casa e interagir da melhor forma possível com todos. Era hora do almoço, em um grande refeitório. Da parte das internas notei olhares desconfiados, alguns sorridentes, outros indiferentes. Após o almoço, hora de descanso, me deixaram a vontade para conhecer os espaços e a sala que seria nosso local de encontro e interação. Senti como se estivesse circulando em uma escola de crianças, onde os adultos ocupam esse papel. Vi mulheres descansando em seus

cantinhos com suas bonecas, outras aninhadas em suas cobertas com motivos infantis. Nesse mesmo dia alguns internos animados já passaram pela sala para conhecer tsumamis.

Aos poucos fui me tornando parte do dia a dia deles e vice-versa. Logo se formou um grupinho com interesse em fazer tsumami. Os que não participavam vinham saber o que se passava naquela sala e outros perguntar se também poderiam fazer florezinhas, então revezávamos. Da unidade masculina vieram alguns e outros que possuem maior potencial com habilidade manual e que costumam trabalhar no ateliê de cerâmica, atividade que, aliás, é praticada por lá há muito tempo. E para mim foi uma grande surpresa reconhecer características de cerâmicas que eu via quando criança na casa de minha avó, produzidas lá!

A vida é realmente interessante!

De início trabalhamos o mais próximo possível utilizando os materiais tradicionais utilizados no Japão, dobrando pequenos pedacinhos de pano. Será que alguns deles também não estariam reproduzindo algo de seus antepassados japoneses? Eles não sabiam dizer, mas o afinco e interesse eram notáveis! Uns ajudavam aos outros... Esse ato diário de conversar e fazer dobras no tecido também foi resultando em histórias passadas que eles contavam, piadas, músicas que cantávamos e até orações! Juntos nos divertíamos como crianças!

Mas eu também passei a saber de histórias tristes, algumas que eles contavam um pouco e outras que funcionários compartilhavam. Vez

ou outra eu ouvia choro e gritos, eles acostumados, diziam: Ah, é tal pessoa!

As diferenças se dissolviam enquanto produzíamos, nos tornávamos confidentes, amigos! E não foi à toa que a chita colorida, um tecido bem popular brasileiro, passou a fazer parte de nossos trabalhos! Afinal, também ali, compartilhamos cultura! Penso que nesses momentos os movimentos de nossas mãos, nossas vozes se confundiam! Como se cada um, imerso nas dobras que fazia, passasse a fazer parte da mesma história.

Ao final de muitos dias tínhamos produzido folhas, muitas flores pequenas, grandes, com tecidos japoneses, brasileiros, resultando em uma mistura colorida e harmônica. Ah, e tínhamos nos inspirado em flores brasileiras também! Bromélias, helicônias, etc. Os amigos da cerâmica tinham feitos muitas sementes para que elas simbolizassem esse processo que tinha brotado aqui. Quem não pode participar, vinha ver e admirar! Alegria e inquietação se misturava ao sentimento de tristeza.

Eu escutava: Segunda-feira você, vem? Não?! Que pena! Nos abraçávamos, despedindo-nos, eu e alguns chorávamos.

No Rio de Janeiro, na exposição do Projeto Turn, essas flores emolduraram uma grande cabeça e cabelos de um rosto inspirado em uma figura popular brasileira, uma jovem mulher de boca grande e olhar sonhador. Ela fica na janela observando a vida.

Através dos cabelos, o tempo passa. Cabelo cresce, corta, cresce, se renova. Cabelos trans-

parentes e delicados de uma mente sonhadora, cabelos dobrados e vincados pelo tempo. Da ação de diferentes corações e mãos, surgiram novas florescências que se tornam parte desse ecossistema. E foi assim também durante todo o período intenso e emocionante da exposição no Rio. As pessoas conheceram o projeto, ouviram os relatos e através da participação nos Workshops puderam também tornar se parte das vidas e dos trabalhos ali presentes.

A ARTE COMO CURA E MUDANÇA

Text | Jum Nakao

Muitos idosos do Ikoi no Sono são os primeiros imigrantes japoneses no Brasil, afinal, o Japão que existe em mim desagua através da existência deles. Subir este rio e encontrar sua nascente, seria um caminho de voltar às minhas origens japonesas. Mais do que ensinar, iria aprender.

É sempre bom lembrar que um copo vazio está cheio de ar.

Nossa primeira visita à Instituição foi antecedida de grande expectativa:

Quais histórias os Idosos guardavam para serem compartilhadas? O que descobriríamos na Instituição Ikoi no Sono?

Era importante mergulhar, pois de outra forma produziríamos superficialmente em nossas

atividades com os Idosos simples artefatos mecanicamente feitos a mão.

Para iniciar, visitamos e conversamos diariamente com os Idosos. Nas entrevistas que fazíamos, os Idosos se referiam à memórias longínquas da infância, quando a felicidade de estarem cercados pelos pais era presente, e ao momento atual em que recebem os cuidados e atenção da Instituição Ikoi no Sono.

A história comum de vida dos Idosos, estrangeiros em um país distante e órfãos de pátria é de abnegação, sacrifício e sofrimento. Este grande intervalo de vida é mantido em silêncio, num imenso vazio.

Respeitando os valores: dignificar, honrar e acima de tudo proteger a integridade destas

histórias vivas e belas dos Idosos e da Instituição Ikoi no Sono, chegamos nos seguintes questionamentos.

Como moldar o vazio?

Como dar forma a existência?

Como materializar os afetos?

Para acolher e dignificar todas estas vidas, concebemos um grande vaso para cada Idoso moldado pelo abraço do afeto, respeito, gratidão e amor.

Convidei os Idosos para subirem a um palco para receber meu abraço. Envolvi-os cuidadosamente na malha metálica e lentamente abracei todo o corpo dos Idosos neste processo de cura. A cada abraço agradei e transmiti o meu afeto, respeito, gratidão e amor. Viajamos juntos pelo tempo. Percebi muitos Idosos serem acolhidos como crianças por este abraço.

Iniciamos a segunda etapa: de tecelagem. Todos estavam empolgados e revigorados pelo abraço. A matéria prima escolhida para tramar, uma fita maleável, foi muito bem recebida pelos idosos. Em meio a cada trama, uma luz no olhar. A rotina diária que começou com a participação de alguns Idosos, logo contaminou toda a instituição. Vários Idosos se aproximaram pela curiosidade e aderiram aos workshops. Uma senhora cadeirante da ala de maior fragilidade,

Hasegawa-san, se voluntariou para participar, completando o nono e final molde da Exposição.

Duas Idosas em especial, Rosinha-san e Tokuko-san, foram extremamente assíduas e participativas, além de tecer seus próprios moldes, colaboraram em tecer moldes de outros Idosos. Tokuko-san, compartilhou o que aprendeu e orientou outros Idosos.

Idosos que não tiveram seus corpos moldados pelo abraço, se voluntariaram para ajudar a tecer os moldes de outros Idosos.

A rotina do Ikoi no Sono se transformara: Idosos reclusos estavam participativos, sintomas de quadros clínicos desapareceram, interações e trocas afetivas aconteciam.

Enquanto os Idosos teciam, as histórias de suas vidas nos eram contadas, cada linha tramada era como uma linha da vida, quando os Idosos finalizaram a tecitura da obra, lá estava a Vida deles como Obra de Arte.

Ao final, nove esculturas tramadas condensavam todo o lapso de uma existência compartilhada nestas semanas de workshop. A lacuna do vazio estava tecida pelas fitas numa alternância de em cima e embaixo, curvas e retas, erros e acertos, num simulacro das nossas próprias vidas.

Ao lado de suas obras, estampava o seu orgulho e a sua sensação de dignidade. A vida deles como Obra se tornara a Obra da Vida deles. Havia uma novo brilho em seus ares. Notávamos em cada semblante que os Idosos estavam todos prontos para re-tecer suas vi-

das.
Mais do que a vida dos Idosos como Obra de Arte, este Projeto nomeado, Tecitura de Afetos -Affect Weaving - é um Projeto Artístico sobre o valor da Vida. Não importa idade ou raça, a Vida não tem preço.

Affect Weaving – TURN – Japão – Brasil
Projeto Artístico Interativo sobre o papel da Arte o valor da Vida.

Após a conclusão dos trabalhos na Instituição Ikoi no Sono, as obras viajaram para serem expostas no Paço Imperial, no Rio de Janeiro, durante as Olimpíadas 2016. Pessoas de todo o Mundo participaram dos Workshops intervindo nas Obras dos Idosos, entrelaçando afetos, reforçando seus laços, reafirmando o Espirito das Olimpíadas Rio de Janeiro 2016.
TURN representa para mim este momento da volta das Olimpíadas ao Japão, em Tokyo 2020, e a volta simbólica destes primeiros imigrantes à sua Terra Natal. Representa a Arte como Cura e Transformação.

あとがき

森司 (TURNプロジェクトディレクター／アーツカウンシル東京)

TURN in BRAZILは、どう評価されるべきものだろうか。
もちろん速報的な成果はある。たとえば、会期中の動員数。2017年秋にアルゼンチンで開催される国際展への招聘。その結果だけ見れば、成功裡に終わったと言ってもいいだろう。しかし、それは満足するものではない。できなかったことも数多くあった。このことは当事者だけが感じた、ざらつく苦い感覚と言える。すぐに改善可能なこともあるが、辿り着きたい場所の遠さに直面し、まだ旅は始まったばかりなのだとすることを痛感した。
そうしたなかでも、「交流」という在り方に関する気づきは大きな収穫だった。交流がTURNにもたらす意味。「TURN」という考え方の訴求性と展開力の強さ。課題と可能性、その両方に対する気づきを体験として持ち帰った。

TURN in BRAZILとは、いかなるものであったか。この先、TURNが広く展開したときに、歴史的検証ができる記録として本書を設計する必要を強く感じたのは、39日間日比野らに伴走し、目撃者としてその場に居合わせたからだ。

ブラジルで起きたことを、どのように残すべきか思案した。観察日記のように第三者がエスノグラフィー的に記録できたら良いが、既に旅は終わっており、当事者では難しい。そこで監修者である日比野克彦がブラジルに滞在した39日間を軸に、4人の参加作家の日常を綴る日記的な構成を考えた。39日間のログから、計画的に進められた部分と、その都度状況に応答しながら構築していった部分があることを感じてもらえるだろう。まさに偶然と必然を味方に行っていたことが。

経験すること、先に進むことが、大きな学びの場を与えてくれる。慌てる必要はないが、これからも歩みを止めることなくTURNを展開していくために、改めて関係者への取材も多く行った。この本が、TURNについて多くの人と語るきっかけを生み出すことを願う。

TURN in BRAZIL 2016 ドキュメントブック

日比野克彦とブラジルでTURNした39日間

監修

森司 (アーツカウンシル東京)

表4ドローイング

日比野克彦

編集・ディレクション

川村庸子

編集

小野民

編集協力

浅野五月・畑まりあ (アーツカウンシル東京)、高塚由美

Special Thanks

PIPA、Monte Azul、こどものその、憩の園のみなさん、

赤澤由起子・堀江映予 (アーツカウンシル東京)、三宅由紀

アートディレクション&デザイン

加藤賢策 (LABORATORIES)

デザイン

奥田奈保子 (LABORATORIES)

発行

平成29年3月23日 第1刷発行

アーツカウンシル東京 (公益財団法人東京都歴史文化財団)

〒102-0073

東京都千代田区九段北4丁目1-28 九段ファーストプレイス8階

TEL: 03-6256-8435

FAX: 03-6256-8829

www.artscouncil-tokyo.jp

ARTS
COUNCIL
TOKYO



© アーツカウンシル東京

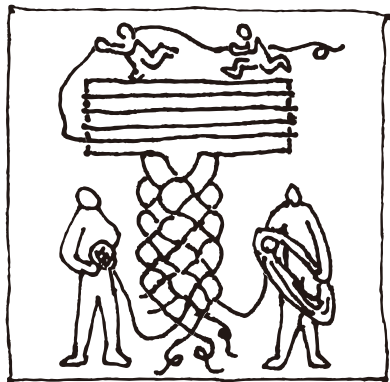
翻訳

株式会社オフィス宮崎

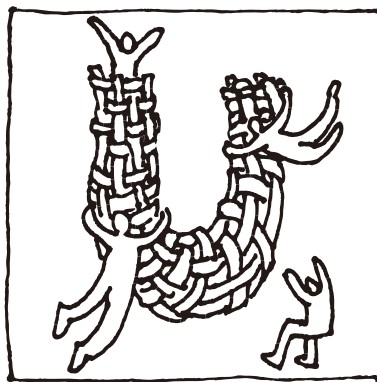
印刷

株式会社ユーホウ

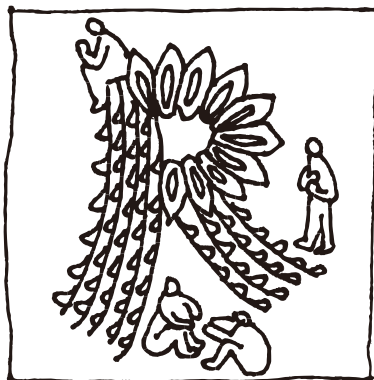
EDO KUMIHIMO



CESTARIA



EDO TSUMAMI



KIRIKO

